一、連吸の笛竹息の哀や

世に時花哥源五兵衛といへるは、さつまの國かごしまの者なりしが、かゝる田舍には稀なる色このめる男なり。あたまつきは所ならはしにして、後さがりに髪先みぢかく、長脇差もすぐれて目立なれども、國風俗、是をも人のゆるしける。明暮若道に身をなし、よは〳〵としたる髪長のたはふれ一生しらずして、今ははや廿六歳の春とぞなりける。年久しくふびんをかけし若衆に、中村八十郎といへるに、はじめより命を捨て淺からず念友せしに、又あるまじき美兒、たとへていはゞひとへなる初櫻の、なかばひらきて花の物云風情たり。有夜雨の淋しく只二人、源五兵衛住なせる小座敷に取こもり、つれ吹の横笛さらにまたしめやかに、物の音も折にふれては哀さもひとしほなり。窓よりかよふ嵐は梅がかほりをつれて振袖に移、くれ竹のそよぐに寢鳥さはぎて、とびこふ音もかなしかりき。灯おのづからに影ほそく、笛も吹(き)おはりて、いつよりは情らしく、うちまかせたる姿して、心よく語し言葉にひとつ〳〵品替て戀をふくませ、さりとはいとしさまさりて、うき世外なる欲心出來て、八十郎形のいつまでもかはらで前髪あれかしとぞ思ふ。同じ枕しどけなく、夜の明がたになりていつとなく眠れば、八十郎身をいためて起し、あたら夜を夢にはなし給ふといへり。源五兵衛現に聞て、心さだまりかねしに、我に語給ふも今宵かぎりなりしに、何か名殘に申(し)たまへる事もといへば、寢耳にもかなしくて、かりにも心掛りなり。ひとへあはぬさへ面影まぼろしに見えけるに、いかに我にせかすればとて、今夜かぎりとは無用の言事やと、手を取かはせば、すこしうち笑て、是非なきはうき世、定がたきは人の命といひ果ず、其身はたちまち脉あがりて、誠のわかれとなりぬ。是はこ源五兵衛さはぎて、忍びし事も外にして男泣にどよめは、皆々たち寄さま〳〵藥あたへける甲斐なく、萬事のことときれてうたてし。八十郎親もとにしらせければ、二親のなげきかぎりなし、年月したしくましましける中なれば、八十郎が最期何かうたがふまでもなし、それからそれ迄、兎角は野邊へおくりて、其姿を其まゝ大龜に入(れ)て、萠出る草の片蔭に埋ける。

【語釋】 ○世に時花歌　世間にはやる流行唄。源五兵衛の事件を唄に作つたものが「松の落葉」などに見える。その唄は此卷を講了した後に引用する。 ○所ならはし　土地の風習に從ふのである。この邊りは薩摩風の剛健粗放の姿態を示してゐる。 ○國風俗　國風俗としての意。 ○若道　所謂稚兒さんで、これも土地の風習の一である。 ○髪長のたはむれ。女色を云ふ。 ○念友せしに　「念友とせしに」であらうが、こゝは動詞（左行變活）のやうに用ゐてある。 ○つれ吹　合奏である。 ○一つ〳〵品替りて　それ〴〵に異つた情味があるの意。 ○戀をふくませ　媚態をあらはすの意。猶「ふくませければ、さりとは」とつゞく。 ○浮世外なる慾心　浮世の外たる慾心で、現實で望むべからざる欲求、即ちいつまでも若衆姿で居て欲しいと希望を云ふ。 ○いためて　抓るか何かしたのであらう。 ○あたら　可惜で、折角の夜をの意。（あたら夜を良夜と書く事もある）

○心さだまりかねしに　八十郎の言ふ事が、源五兵衛にどう云ふ意味か了解できない樣子を云ふ。 ○今宵を限りなりしに　今宵を限りなればの意。 ○ひとへ　一日か一夜かの誤りであらう。 ○せかすれば　「ぢらす」の意である。 ○忍びし事も外にして。忍んで逢つたと云ふ秘密をも忘れての意。 ○どよむ　動搖する。それから取り亂して泣き騒ぐこと。 ○萬事のことき切れ　いろ〳〵手をつくしてもだめであつたの意。「こと切れ」だけで死を意味する。 ○八十郎親元　八十郎の親元。 ○それ

からそれ迄　すつかり諦めた語氣で、仕方がない、それだけの運命だからの意。　○大龜　大瓶で、龜は當字。

【評釋】　『五人女』を刊行した翌年（貞享四年）の正月に『男色大鑑』（本朝若風俗）を出版したこの作者だけあつて、「五人女」の卷五に至つて、遂に若道女道を綯ひ交ぜにした源五兵衛物語を筆にした。彼が創作過程の推移を省察する上に於て有意義な現象である。　彼はこの衆道物語の舞臺を九州薩摩に求めた。　お國振として極めて適當な事は、お七物語の中に僧房間の嬖童事件を綴り込んだよりも、一層切實である。

初めに主人公源五兵衛を寫して「後さがりに髪先短く長脇差もすぐれて」云々と叙した。いかにもいかつげな風態であるが、鄕土的習俗として首肯せられる。但、「これをも人のゆるしける」は何をゆるしたのか分らない。國風俗としてなら、ゆるすもゆるさないもない筈だ。色好みの男の癖に粗剛な風體だと云ふ意味ならば了解できぬ事もないが、それでは餘り御丁寧すぎる。

八十郎との會合の場合は、潤ひもあり蕭やかな氣分もあつて、内容にふさはしい叙述である横笛の連吹のしんみりした情。「趣物の音も折にふれては哀れさも一入なり」で、春雨の夜を語る二人の姿も鮮やかに浮き出し、艶な灯を背景にして、丸窓に映る二づの黑い影が見えるやうである。暗香疎影の梅の香りに春宵を偲ばせたのも、呉竹の笹葉のそよぎに寢鳥の羽ばたきを叙したのも、笛の音に絡んで一段の詩興を昂めてゐる。

閨房の私語は、痴人の愛のそれを思はせるには十分であると云ふだけで、殊更にすぐれたものとも感ぜられない。たゞ八十郎が死の豫感に示唆されたのか、異常な言葉を口にするだけが變つてゐる。かくして脆くも死の手に攫まれたのは「定め難きは人の命」とは云ふものゝ、全く常套を逸した事象と云はねばなるまい。

「忍びし事も外にして」の一句は、この際、きはだつて緊張した詞章で、この言葉の環境から推測される源五兵衛の惑亂と、それに續く人々の狼狽は的確に把捉されてゐる。

この節の最終の句、「萠え出る草の片かげに埋めける」は、季節を示すと共に若い人の死にふさはしく感ぜられる若草は萠え出づるにひきかへて、人生の春を見果てぬ夢として、去りゆく少人の死の果敢なさが、この短章の間から湧き上つて來るのである。

猶、中村八十郎なる名は、野郎歌舞伎の役者のやうで、作者の命名のわざとらしさがおかしく思はれる。

源五兵衛此塚にふししづみて悔ども、命すつべきより外なく、とやかく物思ひしが、さても〳〵もろき人かな、せめては此跡三とせは弔ひて、月も日も又けふにあたる時、かならず爰に來て露命と定むべき物をと、野墓よりすぐに髻きりて、西圓寺といへる長老に始を語、心からの出家となりて、夏中は毎日の花をつみ香を絶さず、八十郎ぼだいをとひて夢の如く其秋にもなりぬ。垣根朝貌咲そめ、花又世の無常をしらせける、露は命よりは間のあるものぞと、かえらぬむかしをおもひけるに、此ゆふぐれはなき人の來る玉まつる業とて、鼠尾草折(り)しきて、瓜なすびおかしげに、ゑだ大豆かれ〳〵にをりかけ、燈籠かすかに棚經せはしくむかひ火に麻がらの影きへて、十四日のゆふま暮、寺も借錢はゆるさず掛乞やかましく、門前は踊太鼓ひゞきわたりて、爰もまたいやらしくなりて、一たび高野山へのこゝろざし、明れば文月十五日古里を立出るより、墨染はなみだにしらせて、袖は朽けるとなり。

【語釋】 ○月も日も云々　忌日。祥月祥日。　○夏中。一夏は九十日。四月十六日より七月十五日まで。夏安居と云ふ。　○八十郎の菩提　垣根の朝顔。ともに助詞「の」が省略してある。　○花又無常　朝顔の花の咲いてゐるのは朝のうちだけであるから、極めて短い花の命である。即ちこの花も亦無常を知らせるのである。　○露は命より露もはかないもの。法華經方便品の「人生泡沫如露夢幻」である。こゝは朝顔の花においた露の聯想から書きつゝけたのであらう。。その露よりも八十郎の命はもはかないものだつた。　○魂祭るわざ　盂蘭盆會である。陰暦七月十三日。　○棚經　聖靈棚にさゝげる讀經。　○麻がら　今Ⅲの「をがら」これを燒いて迎火とし、また、これを折つた箸で聖靈棚に供す。　○踊太鼓　盆踊の太鼓。　○墨染は泪にしらせて　墨染の衣にも悲しさはあらはれての意。

【評釋】 ⑨「戀人の死を悼んで、自ら「死」と「生」との岐路に立つ。而して「生」を擇んだものゝ圓頂緇衣の世捨人となる。源五兵衛もこの路を彷徨した結果墨染の姿となつた。三年目の祥月祥日に自殺を覺悟したのは、いかにも殊勝に見えるが「命すつべきより外なき」と決心しながら、そこに三年の時間的距離を置いたところに「此男とても死ねさうにないな」の感を強くする。」しかし香花の供養は神妙である。盆踊の華やさか賑やかさに顏を背けて、高野に志したのはます〳〵神妙である。しかしこの神妙さも何となく頼りない氣がする。「寺も借錢はゆるさず」の警句が、拍案の奇を叫ばしめるだけ、作者一流諷諧の味が不用意の間に迸出しただけ、源五兵衛の眞摯味、神妙さから來る嚴肅と緊張とは、何の手もなく崩壞して了つた。文句としては面白い穿つた文句である。けれど、それだけ、此場合の主人公の眞實に働きかける作者の風懷が、そこに一種の弛緩を持ち來すのである。何となく頼りないのはそれがためである。

二、もろきは命の鳥さし

里は冬かまへして萩柴折添て、ふらぬさきより雪垣など、北窓をふさき、衣うつ音のやかましく、野はづれに行ば紅林にねぐらあらそふ小鳥を見掛、其年のほど十五か六か七までは、ゆかし、水色の袷帷子に、むらさきの中幅帶、金鍔の一ツ脇差、髪は茶筅に取亂、そのゆたけさ女のごとし。さし竿の中ほどを取まはして、色鳥をねらひ給ひし事百たびなれ共、一羽もとまらざりしをほいなき有樣、しばし見とれて、さても世にかゝる美童も有ものぞ、其年の比は過にし八十郎に同じ、うるはしき所はそれに增りけるよと、後世を取はづし、暮かたまで詠つくして、其かたちかく立寄て、それがしは法師ながら、鳥さしてとる事をゑたり。其竿こなたへと片肌ぬぎかけて、諸の鳥共此兒人のお手にかゝりて命を捨が何とて惜きぞ、さても〳〵衆道のわけしらずめと、時の間に數かぎりもなく取まいらせければ、此若衆外なくうれしく、いかなる御出家ぞと問せけるほどに、我を忘てはじめを語ければ、此人もだ〳〵と泪ぐみて、それゆへの御執行一しほ殊勝さ思ひやられける、是非に今宵は我笹葺に一夜ととめられしに、なれ〳〵しくも伴ひ行に、一かまへの森のうちにきれいなる殿作りありて、馬のいなゝく音、武具かざらせて、廣間をすぎて緣より梯のはるかに、熊笹むら〳〵として、其奥に庭籠ありて、はつがん唐鳩金鷄さま〳〵の辭なして、すこし左のかたに中二階四方を見晴し、書物棚しほらしく、爰は不斷の學問所とて是に座をなせば、めしつかひのそれ〴〵をめされ、此客僧は我物讀のお師匠なり、よく〳〵もてなせとて、かず〳〵の御事ありて、夜に入ればしめやかに語慰み、いつとなく契て千夜とも

心をつくしぬ。

【語釋】 ○冬がまへ 冬の用意すること。 ○雪垣 冬季雪を除くるため軒の廻りに丸太材を立てかけ、横を結び簀を編みつけて垣としたもの。「雪垣など」は雪垣などしつらへ」である。 ○衣うつ音 砧の音である。 ○小鳥を見かけ 小鳥を見かけて。 ○ゆたけさ のんびりした風情を云ふ。『本朝若風俗』にも「せはしさ、ゆたかさ、大つもごりと元日程にかはれり」の文句がある。 ○色鳥 秋渡る鳥のこと。「さらにまた渡るも悲し山路ゆく秋や限りの色鳥の聲。」(雪玉集) ○後世を取はづし菩提心を失ふ。また浮世離しくなつたのである。 ○其かたちかく。 ○其方に近く。 ○諸々の鳥共…… わけ知らずめ。源五兵衛が小鳥を叱つた言葉である。「鳥どもよ、此の美少年の手にかゝつて死ぬのに、どうして命が惜しいのか。こんな美しい人の手で死ねば本望ぢやないか。よく〳〵お前たちは衆道の極意を理解してゐないのぢやな。馬鹿な奴らだ」の意。 ○もだ〳〵もだえなやむさま。こゝは感傷的になる(そのうちには自己の情炎に身もだえする意味が含まれてゐる) ○笹葺 あばら屋。こゝでは卑下して云つた語。 ○嚴作り 御殿風の宏壯な建築。 ○縁より梯の 渡り廊下のこと。 ○座をなせば 席に就く。 ○千夜とも 「秋の夜の千夜を一夜になせりとも言葉のこりて鶏や鳴きなむ」(伊勢物語)。交情密にして秋の夜長も短夜の如く明け易きを怨むのである。

【評釋】 この節の書初め「里は冬がまへして」から「野はづれに行けば」までの行文には、山ふところの秋らしい氣分が滿ち渡つてゐる。「紅林」と音訓させたのは、わざとめかしく、且妙に固苦しい感じを喚び起す。この黄に紅に染められた雜木林に、小鳥を覘つてゐたのは茶筅髪の若衆姿した少年であつた。「そのゆたけさ女の如し」の一句で風丰は躍如として映る。しかも小鳥は一羽もかゝらぬ心もとなさ。それに目をとめたのが、形は世

捨人でも心の底には情炎のやりどころなさに惱む源五兵衛坊主である。少年の優姿に恍惚としたのは無理もない。「後世取はづし」は穿ち得て妙と評すべき奇警な文句である。「暮れ方まで詠めつくし」は道草にしては長すぎるけれど、事實道草以上だから仕方がない。たゞし、亡き八十郎との比較研究は、高野に行く途上として甚だ穩かでない。而して小鳥どもに申しつける言葉には、恐れ入つて苦笑せしめられる。作者の醉興が透見した結果の筆であらう。

さて源五兵衛が素性を明すや、「それ故の御修行一しほ殊勝さ思ひやられける」と泪ぐみ、わが家に誘ひ歸る此の少年も、かゝる方面の理解者——時代相の一面に牴觸してゐるには相違ないが——卽ち、作者が作つた鑄型に欲るやうに出來上つた人物であつた。

森の中の宏壯な一構へには異議はない。後に書いてある通り御代官の御邸とあればそれでよい。たゞ何となく『かくれ里』式の樣子であるところが御愛嬌である。それから源五兵衛を召使に紹介して、「此客僧は我物讀のお師匠なり」は隨分人を食つた言葉であり叙述である。誰彼と見知らぬ顏もない片田舍である以上、お師匠樣突然の御入來とは云へ、不自然の感じの方が强い。

明れば別をおしみ給ひ、高野のおぼしめし立(ち)かならず下向の折ふしは、又もと約束ふかくして、互に泪くらべて、人しれず其屋形を立(ち)のき、里人にたづねけるに、あれは此所の御代官と、しか〳〵の事をかたりぬ。さてはとお情うれしく、都に上るもはかどらず、過にし八十郎を思ひ出し、又彼若衆の御事のみ、佛の

道は外になして、やう〳〵弘法の御山にまいりて、南谷の宿坊に一日ありて、奥の院にも参詣せず、又國元にかへり、約束せし人の御方に行(け)ば日外見し御姿かはらず出おかひ給ひ、一間なる所に入(り)て、此程のつもりし事を語り、旅草臥の夢むすびけるに、夜も明て彼御人の父、此法師をあやしくとがめ給ひ、起されておどろき、源五兵衛落髪のはじめ、又このたびの事、有のまゝに語れば、あるじ横手うつて、さても〳〵不思議や、我子ながら姿自慢せしに、うき世とてはかなく、此廿日あまりに成し跡に、もろくも相果しが、其きは迄彼御法師〳〵と申せしを、おかされての事にとおもひしに、扨はそなたの御事かと、くれ〴〵なげき給ひける。なを命をしからず、此座をさらず身を捨べきとおもひしが、さりとては死れぬもの人の命にぞ有ける。間もなく若衆ふたり迄のうきめをみて、いまだ世に有事の心ながら口惜。さるほどに此二人が我にかゝるうき事しらせける、大かたならぬ因果とや、是を申べし。かなし。

〔語釋〕 ○おぼしめし立ち 目的を達して後の意。即ち参詣をすます事をさす。 ○下向 歸路。 ○弘法の御山 紀伊高野山。 ○横手をうつ 不審の晴れた樣子をあらはす所作。「ハヽア、わかつた！」 ○冒されて 然に冒されての意。嘘言である。 ○心ながら わが心からとは云ひながらである。

【評釋】 八十郎に對する源五兵衛の誠意は消滅した。今更何の高野詣かと云はねばならぬ。「佛の道は外にして」は當然の歸結である。さればこそ高野に登つても一日居ただけで、靈山の氣に觸るゝ心もなく、たゞそは〳〵として引返して來た。

再會の場は室町期の小說『幻夢物語』を聯想させる。契りある稚兒に一旦別れたが、その人戀しさに旅を重ねて巡り會ひ、一夜を語り明したけれど、逢つたのは靈で、現し身の人は既に亡き數に入つてゐたと云ふ。——この段取は全く同軌を踏むものである。

夜が明けて代官に咎められるところは興趣ある素材である。作者は何が故にこの素材を活かさなかつたらうか。怪しむ彼の父、驚く源五兵衛坊主。取扱方によつては、かなり生彩ある場面となるところである。而して事情が解つて更に悲愁に鎖される心境の照應と推移とに、才藻の冴えを見せるには至極格好な資材である。折角の素題もこゝでは凡庸の域に横つてゐる。

われ故に二人の少年の命を犧牲にした。浮々した源五兵衛坊主は今度こそ身に沁みたらしい。「大方ならぬ因果とや、是を申すべし」と切つて「かなし」と附けた表現は、さすがにうまい。

三、衆道は兩の手に散花

人の身程あさましくつれなき物はなし、世間に心を留て見るに、いまだいたひけ盛の子をうしなひ、又はすへ〳〵永く契を籠し妻の若死、かゝる哀れを見し時は卽座に命を捨んと、我も人もおもひしが、泪の中にもはや欲といふ物つたなし。萬の寶に心をうつし、あるは又出來分別にて息も引とらぬうちより、女は後夫のせんさくを耳に掛、其死人の弟をすぐに跡しらすなど、又は一門より似合しき入緣取る事、こゝろ玉にのりて、なじみの事は外になし、義理一べんの念佛、香花も人の見るためぞかし。三十五日の立をとけしなく、忍び〳〵の薄白粉、髪は品よく油にしたしながら、結もやらずしどけなく、下着は色をふくませ、うへには無紋の小

袖、目にたゝずしてなを心にくき物ぞかし、折ふしは無常を觀じ、はかなき物語りの次手に髪をきり、うき世を野寺に暮して、朝の露をせめては草のかげなる人に手向なんと、縫箔鹿子の衣裝取ちらし、是れもいらぬ物なれば、てんがいはたうち敷にせよといふ心には、今すこし袖のちいさきをかなしみける、女程おそろしきものはなし、何事をも留ける人の中にては、空泣しておどしける、されば世の中に化ものと後家たてすます女なし、まして男の女房を五人や三人ころして、後よびむかへてもとがにはならじ、それとは違ひ、源五兵衛入道は、若衆ふたりまであへなきうきめを見て、誠なるこころから、片山陰に草庵を引むすび、後の世の道ばかり願ひ、色道かつてやめしは、更に殊勝さかぎりなし。

【語釋】 ○いたいけ　可愛い。弱小のものに對する撫愛の情を云ふ。 ○我も人も　誰れでもの意。世間一般の人々皆が。 ○慾と云ふ物つたなし　慾と云ふものが出て來るのは情けないの意。 ○出來分別　一時的の考へ、即ち出來心である。 ○後夫の穿鑿　二度目の亭主を吟味選擇するのである。候補者を詮衡する。 ○跡しらす　「しらす」は領せしむるで、跡目を繼がせるの意。 ○入緣　入婿に同じ。 ○こゝろ玉にのりて　「心魂にのりて」心魂は心、きもたましいに同じ。即ち氣にかける。心をそは〳〵させる事 ○なじみの事　馴染は亡夫の事。 ○義理一べん　世間體を繕つた、うはべの義理だけの程度で。 ○三十五日　五七日。亡後七日目毎に法忌を重ねてゆくその五回目。 ○とけしなく　もどかしく。待ち遠に思ふ。 ○品よく　手際よくである。 ○油にしたしながら　髪に油をつける。頭髪を氣にしてゐるさま。 ○しどけなく　だらしなく。 ○色を含ませ　派手な艶慾的な色彩のものを着るのである。 ○無紋　無地に同じ。 ○猶　しかし、やつぱりの意。 ○心にくき　心を引きつける、即ち誘惑的の意。 ○折節は　中には。多くの人のうちには の意。 ○はかなき物語のついでに　ちよつとした話を機緣として。 ○縫箔鹿子　鹿子絞りに縫箔をしたもの。縫箔とは刺繍に金糸銀糸を交へたものである。 ○天蓋　佛像又は棺などの上にかざす「きぬがさ」。 ○幡　儀式用の裝飾の具。こゝは佛前にあるもの。 ○打敷　寺にて佛前の案（つくゑ）の横廻りに掛くる敷物。 ○心には今少し袖の小さき云々　心の内ではもう少い袖が大きかつたらと悲しがつてゐる。「袖の小さき」は小すぎたので、大きいのが好もしかつたの意。即ち心のどこかに、まだ俗世間への憧れが殘つてゐるのである。 ○何事をも留めける人　萬事に心配して世話してくれる人である。 ○男の女房を　男たるものは女房をの意。 ○誠なる心から　本當の後世願ひ。 ○色道かつてやめし　「かつて」はふつつり、全然の意。

【評釋】　人生の一大事「死」を通じて眺めた世相の姿を打剖いて見せたのがこの一節である。その敘述は鋭い辛辣さを、ふつくらした調諧に包んでゐる。斷ち難い恩愛の羈絆を、死の魔手に捉へられた當座、われをも亡きものにと思ひ詰めた痛切な心持も、慾と色とに昏まされては、逝く者日々に疎しの例にもれない。かゝる人情の機微は明確に繰展げられてゐる。「泪の中にはや慾と云ふものつたなし」と云ひ「女は後夫の穿鑿」と云ひ、また義理の弟との契り、一門からの入婿と云ひ、時代こそ移れ、今も變らぬ社會事象の斷面である。「義理一べんの念佛香花も人の見るためぞかし」とは、抉つたりな鶴宗匠。このあたり、男の方面は忘れたかの如く、強ちに女ばかりに毒ついてゐるのも面白い。こつそり薄化粧した若後家の忍び姿は普通であるが、「髪は品よく油にしたしながら」は穿つた觀察で凡庸の筆ではない。而して下着を色よく、上に無地の小袖はさすが女性の見えであらうが、それに對して「猶心にくき物ぞかし」と嗟嘆の聲を發したのは、やはりこの作者なればこそである。「猶」の一字、輕々しく見落して

はならない事を特に注意したい。

次で、はかなき物語に一念發起して、野寺の明け暮れに行ひすます若比丘尼を點出したが、これも、ありし世盛りの艶な衣裳を見つめて、天蓋幡の料にもと思ひながら、「今少し袖の少さき」を悲しましめる。ことに「未練がましさ」と「花やぎに憧るゝの心」との女性心理が確實に把捉されてゐると云つてよい。

女の移り氣と浮薄な心との追究は、以上に止まらなかつた。作者は更に筆端を磨いて「女程恐ろしきものはなし」とて、空涙と云ふ獨自の武器を揮揄し、更に疊みかけて「世の中に化物と後家立てすます女なし」と喝破し、一轉して男は「女房を五人や三人殺して」も後妻を娶つて大事ないと、いやに男の肩を持つてゐる。これによつて作者の眼に映じた女の本性が如何なるものであつたかを揣摩し得ると共に、當代の抱いた一般女性觀の代辯として享け入れる事が出來ると思ふ。

さて、前章までの說話の跡を辿ると、筆致はかなり外れたまゝに躍り上つてゐると云はねばならぬ。そこで、此節の冒頭に立歸つて「人の身程淺ましくつれなきものなし」の句を誦する。世態人情の動き方の一面は、たしかに作者の言葉の如くであらう。たゞ作者は、この說話の本筋とはあまり緊密でない事象をこゝに披瀝したのであつた。曰く「それとは違ひ源五入道は云々」と。かくして昂揚した筆觸を平靜に收めた作者は殊勝さ限りなき源五兵衛が、あへなく死なした若衆二人のために、片山蔭に草の庵を引結んで修行三昧に耽つてゐると報告してゐる。

其比又さつまがた濱の町といふ所に、琉球屋の何かしが娘おまんといへる有(り)けり。年の程十六夜の月を

もそねむ生つき、心ざしもやさしく、戀の只中、見し人おもひ掛ざるはなし。此女過し年の春より源五兵衛男盛をなづみて、數々の文に氣をなやみ、人しれぬ便につかはしけるに、源五兵衛一生女をみかぎり、かりそめの返事もせざるをかなしみ、明暮是のみにて日數をおくりぬ。外より緣のいへるをうたてく、おもひの外なる作病して人の嫌うはことなど云(う)て、正しく亂人とは見へける。源五兵衛姿をかへにし事もしらさりしに有時人の語りけるを聞もあへず、さりとては情なし、いつぞの時節には此思ひを晴べきとたのしみける甲斐なく、惜や其人は墨染の袖うらめしや、是非それに尋行(き)て一たび此うらみをいはではと思ひ立(つ)を世の別と人人にふかくかくして、自よき程に切て中剃して、衣類も兼ての用意にや、まんまと若衆にかはりて忍びて行(く)に、戀の山入そめしより、根笹の霜を打拂ひ、比は神無月偽りの女こゝろにして、はる〳〵過(ぎ)て人の申せし里ばなれなる杉村に入れば、後にあらけなき岩ぐみありて、にしの方に洞ふかく、心も是にしづむばかり、朽末のたよりなき丸太を二つ三つ四つならべてなげわたし、橋も物すごく、下は瀨のはやき浪もくだけて、たましゐ散るごとく、わづかの平地のうへに片びさしおろして、軒端はもろ〳〵のかづらはいかゝりてをのづからの滴、爰のわたくし雨とや申べき。南のかたに明り窓有(り)て、内を覗ばしづの屋にありしちんからりとやいへる物ひとつに、青き松葉を燒捨て、天目二つの外には、しやくしといふ物もなくて、さりとてはあさまし。かゝる所に住(み)なして乞そ佛の心にも叶ひてんと見廻しけるに、あるじの法師ましまさぬ事なげかはしく、何國へと尋べきかたも、松より外にはなくて、戸の明を幸に入(り)て見れば、見臺に書物ゆかしさにのぞけば、待宵の諸袖といへる衆道の根元を書(き)つくしたる本なり。さてはいまも此色は捨給はずと、其人

のおかへりを待詫しに、ほどなく暮て文字も見えがたく、ともし火のたよりもなくて、次第に淋しく獨明しぬ。是戀なればこそかくは居にけり。

【語釋】 ○年の程十六夜の月云々　年の程は十六。「十六夜の月をもそねむ」のをもは變であるが、意味は月も羞らふ容色を云ふのである。 ○戀の只中　妙齢との意。近松の淨瑠璃の文句なら「世盛り戀盛り」と云ふやつである。 ○過ぎし年　前年の意。 ○なづみて　なづむは泥む。一心に思ひこむ。惚れるのである。 ○氣をなやみ　心を惱ますので、細々と思ひのたけを文に認めたのである。 ○是のみ　源五兵衛を思ふ心。 ○緣のいへるをうたてく　緣談を持込んで來たのをいやな事に思ひの意。「いへる」は云ひ入れるの意であらう。 ○作病　假病をつかふのである。 ○うは言　たは言に同じ。高熱に浮かされて、とりとめなき言を口走る。 ○亂入　氣狂ひ。 ○聞さあへず　背までも聞かずと云ふさま。 ○云はでは　云はないで置かうかどうしても云はねばならぬとの意。 ○思ひ立つ　決心する。 ○世の別と人々に　世の別と思ひながら、人々にはの意。知人などに再び逢ふ事はできまいと思ひながら人々にも内密でと云ふ意味である。 ○中剃して　若衆髷にするためである。 ○戀の山入りそめしより　本宮の山路に踏み入つたのと、戀の手始めの掛意を含む。 ○神無月僞りの　この語は「僞りのなき世なりけり神無月たがまことより時雨そめけむ」。(續後拾遺集、藤原定家)の歌から出てゐる。「僞りの女心」とつゞけたのは、明確でないが、西鶴一流の文字を喰つて了ふ書き振りで、歌の意をそのまゝ活かし、「眞心から思ひ込んだ女の一念」での意味と思ふ。「僞りの」はそのまゝの僞りあるの意でなく、むしろ「僞りなき世なりけり」で反對の意になつてゐる。而して、この言葉の表には若衆のにせ姿の意味が絡むでゐるに相違ない。無理な語法であるのは勿論である。 ○人の申せし　人から敎へられたの意。 ○荒けなき　荒い。どつ〳〵したの意。「なき」は打消の「なし」ではなく、狀態をあらはす語である。 ○是にしづむばかり　それを見るとすつかり心細くなる程である。 ○たよりなき　危うげな。 ○片びさし　粗末なさ、しかけの家。 ○自らの滴　自然と雫がおちるのである。 ○私雨　こゝだけの雨。 ○ちんからり　炉爐。ひちりん。 ○天目　天目茶碗の事。 ○ましまさぬ　お出でにならぬ。お留守。 ○松より　松の木と、「待つ」の意とにかけてある。 ○見臺　書見用の臺。本を開いて載せるところは斜面になつてゐる。 ○「待宵の諸袖」　書名。實際にあつたものか、知らず。 ○根元　根抵になる事柄。 ○此色　此方面の色道。即ち衆道。 ○戀なればこそ云々　かゝる淋しい所に、女の身で獨り待つてゐるのも戀の力があればこそ辛抱が出來たのだ。普通ならとても居られない。

【評釋】 「其頃又」として女主人公に筆をつけたがこゝに現はれた琉球屋のおまんは普通の色娘である。十六夜の月も羞ぢらふ生れつきとあるのは平凡に過ぎ、「心ざしもやさしく」もお誂向ではあるが、型にはまつてゐる。それ等の献立よりもむしろ「戀の只中」の一句に千鈞の重みがある。

數々の通はせ文、外よりの緣の拒絶、これもありふれてゐる。作病してうは言をしやべり、氣狂の眞似をするに至つては、熾烈な情炎は認められるけれど、聊か脫線氣味である。折角思ひ込んだ男が若衆狂ひして、こちらは見向いてもくれぬ遣瀨なさには身悶えする位なのに、墨染の袖にかくれたとは餘りにむごい仕うちである。そこで髪を「よき程に切り中剃して」若衆姿に身をやつしたと云ふ。彌漫せる頽唐の氣風は筑紫の果まで吹き靡かしたのであらうか。思ひつめては何を仕出すか分らない若い女の事である。戀のいたづらのさせた矯激な行動も、靜かに彼女の心根に入つて見れば、やはり普通の色娘らしい所作にすぎない。

根笹の霜を打ち拂ふ神無月の山路。里ばなれの杉村。荒けなき岩組。奥深い洞窟。朽木の丸太橋。碎け散る早瀨

の波。すべてが世捨人でも住みさうな道具立ではあるが、何となく芝居の書割めいた風情を否み難い。

私雨とは面白い言葉であり、此場合緊密に用いられてゐる。片びさしと軒端の葛、これもさきの敘景と關聯してゐるがともかく納まつてゐる。と見なければなるまい。

家の中の簡易生活ぶりはさこそと思はれ、訪ね來た女が「かゝる所に住みなしてこそ佛の心にも叶ひてん」と見廻したのも、至極尤もである。しかし此の至極尤もの感も見臺の上の書物によつて、甚だしく不尤もに旋轉するところが御愛嬌である。それを待つ間わびしく讀み耽る娘も、戸の明くを幸と主の留守に、のこ〳〵と上り込んだだけのずう〳〵しさはある。

しかし、灯火もなき深山の庵の更けゆく夜である。獨り居で待つ身になれば淋しさも一入であらう。「是戀なればこそ、かくは居にけり」は、よく利いてゐる。たゞし、「明しぬ」は書き過ぎで、不用意の走り筆である事は、すぐ次の文句でわかる。

夜半とおもふ時、源五兵衛入道わづかなる松火に道をわけて、庵ちかく立歸りしを嬉しくおもひしに、枯薬の荻原より、やことなき若衆、同じ年比なる花か紅葉か、いづれか色をあらそひ、ひとりはうらみ、ひとりは歎、若道のいきごみ、源五兵衛坊主はひとり、情人はふたり、あなたこなたのおもはく、戀にやるせなくさいなまれて、もだ〳〵としてかなしき有樣、見るもあはれ、又興覺て、扨もさても心の多き御かたと、すこしはうるさかりき。されど共思ひ込し戀なれば、此まゝ置べきにもあらず、我も一通り心の程を申ほどきてなんと立出れば、此面影におどろき、二人の若衆姿の消て、是はとおもふ時、源五兵衛入道不思議たちて、いかなる兒人さまぞと言葉を掛ければ、おまん聞もあえず、我事見えわたりたる通りの若衆をすこしたて申かね〳〵御法師さまの御事聞傳へ、身を捨是迄しのびしが、さりとはあまたの心入、それともしらずせつかく氣はこびし甲斐もなし、おもはく違ひとうらみけるに、法師横手をうつて、是はかたじけなき御心ざしやと、又うつり氣になりて、二人の若衆は世をさりし現の始を語るにぞ友に涙をこぼし、其かはりに我を捨給ふなといへば、法師かんるい流し、此身には此道はすてがたしとはやたはふれける、女ぞとしらぬが佛さまもゆるし給ふべし。

【語釋】 ○やごとなき こゝでは氣品のあるの意。元來は「止む事なき」の義から「すてゝおけない」―「平凡でない」―「高貴な」の意にだん〳〵轉じた語。 ○いきごみ 意氣込。意氣組。眞心を現はすべく意地を張り合ふ。 ○おもはく 心持ち。感情である。 ○さいなまれ 心を苦しめるさま。呵責される。 ○もだ〳〵 悶えるかたち。 ○うるさがり 嫌氣のさす。 ○申しほどく 說明する。了解を得るやう思ふだけを披瀝する。 ○面影 こゝは姿かたちである。 ○見人 少年。若衆。稚兒、みな同じ。 ○見えわたりたる通り 御覽の通り。 ○若衆を少したて申し 若衆としての意地を立てました者の意。即ち若衆として好尙を持ち修養をしたものである。 ○あまたの心入 多くの人を相手に浮氣することを云ふ。 ○氣遲びし 深く思ひ込む事。 ○おもはく違ひ 豫想がはづれたの意。 ○横手をうつて 了解した態度をあらはす。 ○移氣になりて こちらに心が向いて來る。氣が變つて來る。 ○世を去りし現の始云々 若衆二人は世を去りし者で、生きてゐた時の馴染めの事情を語つたの意。 ○知らぬが佛 諺(毛吹草)知らなければこそ心を動かさない。その心は佛の慈悲忍辱の心に等しいの意。

【評釋】 松明に道を分けて、夜半の山かげを辿る青入道に、縋りついた二人の若衆があると云ふ。枯葉の荻の草叢

から、花か紅葉かとまがふ計りの姿してあらはれたのであるから、配合は面白い。而して恨みつらみの愁嘆場を見せるので、鞘當にしても至極奇麗事に出來上つてゐる。まづ浮世繪趣味の構圖である。しかし、目の前に且偶發的事件として見せつけられたおまんにして見れば、「興さめて」うるさい氣分にもなつたらう。但どれほどに源五兵衛坊主が「もだ〳〵」として悲き有樣」をしても、「見るも哀れ」とは、例の西鶴流の眺め方、感じ方である。

しかも此場面が夢幻境であつて見れば、わざとらしさが餘りにも濃厚と云はねばならぬ。當代の怪異小說の流行もさる事ながら、今少し取扱方に一工夫できなかつたであらうか。と云ふのは、おまんの若衆姿を突如として源五兵衛の前に出現させる契機として、若衆の鞘當を持込んだのに違ひないから、それは肯定するが、この際いかにも現實味が多くお芝居かゞりなのが嫌味なのである。わざとらしいとはその感じを云ふのである。それならどうすればいゝかと開き直られては困るが、庵に於ける源五兵衛坊主の轉寢の夢として描き、覺めたところに若衆姿のおまんを枕頭に座らしめるが如きも一つの方法と思ふ。

さて本文に歸り、「源五兵衛入道不思議たちて」は「入道不思議たてゝ」で、いかなる兒人樣ぞとおまんに聲をかけたのである。「是は」と思つたのは勿論おまんである。それからのおまんの口說きは平凡であるが、思ふかまゝを卒直に云はしめたまでの事で、「若衆を少し立て申し」は面白い表現である。

法師の「又移氣になりて」の又は輕々しく看過し得ない「又」で、これまで寫された彼の性格に微して、極めて明確に享け入れられる。「共に涙をこぼし」のおまんの涙は普通であらうが、坊主に於ては「什麼何の落涙ぞ喝！」と云ひたくなる。ふやけ切つた僞坊主と云へば十分で、「此道は捨て難し」と御當人極めてたあいもなくだらしない。而して作者も「女ぞと知らぬが佛さまも許し給ふべし」とて冷かし氣分で敍してゐる

四、情はあちらこちらの違ひ

我そも〳〵出家せし時、女色の道はふつとおもひ切(り)し佛願也、されど共心中に、美道前髪の事はやめがたし、是ばかりはゆるし給へと、其時より諸佛に御斷申せしなれば、今又とがめける人をもたず、ふびんと是迄御尋有し御情からは、すへ〳〵見捨給ふなどたはふれけるに、おまんこそぐるほどおかしく、自ふともゝをひねりて胸をさすり、我いふ事も聞しめしわけられよ、御かたさまの昔を忍び、今此法師姿をなをいとしくて、かく迄心をなやみ、戀に身を捨ければ、是よりして後、脇に若衆のちなみは思ひもよらず、我いふ事は御心にそまずとも、背給ふまじとの御誓文のうへにて、とてもの事に二世迄の契といへば、源五兵衛入道おろかなる誓紙をかためて、此うへはげんぞくしても、此君の事ならばといへる言葉の下より、（約三百六十字略）氣を付て見る程貌ばせやはらかにして、女めきしに、入道あきれはてゝ、しばしは詞もなく、起出るを引とゞめ、最前申かはせしは、自がいふ事ならば、何にてもそむき給ふまじとの御事を、はやくもわすれさせ給ふか、我事琉球屋のおまんといへる女なり、過し年數々のかよはせ文、つれなくも御返事さへましまさず、うらみある身にもいとしさやるかたもなく、かやうに身をやつして、爰にたづねしはそもやにくかるべき御事かと、戀の只中もつてまいれば、入道俄にわけもなふなつて、男色女色のへだてはなき物と、あさましく取みだして移氣の世や、心の外なる道心、源五兵衛にかぎらず、皆是なるべし。おもへはいやのならぬおとしあ

な、釋迦も片あし踏込たまふべし。

【語釋】 ○ふつ きつぱり。斷然と。 ○美道 美童のあて字であらう。「前髪」は前髪あるもの、即ち若衆である。 ○今又咎める人云々 佛樣のお許しは頂つてあるから、今更咎める者もないの意であるが、その咎めだてする人を和尚とか兄坊主とか云ふ者に見てもよい。 ○ふびん 可愛想である。この言葉の上に「私を」の二字を入れて見るべし。即ち私を可哀想と思つて、こんな山奥まで尋ねてくれた云々である。 ○御情からは 御情がある以上。 ○自ら太股をひねり おかしさを怺えるためにする所作である。自分で股を抓り、痛さによつて笑を制する。 ○胸をさすり これも堪える狀態である。 ○昔を忍び 昔の男姿を云ふ。 ○身を捨て 一身を犧牲にする。親を離れ家をすてゝ後を惹つて來たの意。 ○脇に 私以外に。 ○ちなみ 因緣を結ぶ事。 ○御心にそまず 御機嫌に入らない。 ○とてものこと いつその事。 ○おろかなる 前後の考へもなくの意 ○誓紙かため 互に變るまいと誓約する起請文を書くこと。その用紙は熊野午王とて、熊野神社にて出す群鳥を刷りたるもの。 ○還俗 僧侶となつたものが俗體に歸るのを云ふ。 ○此君の事ならば あなたの事なら何でも聞く。 ○女めく 女らしい。 ○最前申かはせしは 先刻約束しました通りの意。 ○わけもなう 意地も張りもなく、ぐにゃ〳〵となる。 ○釋迦も 道心堅固な人でもの意。

【評釋】 初めは源五兵衛坊主の我儘至極な辯明で、あたま剃る當座からこれだけはお許しが願つてあると云ふ。誠に重寶な出家である。すつかり若衆のつもりでゐるのでおまんにはおかしい。こそぐられる程で、今にもふきだしさうなのは尤もである。「太股をひねり胸をさすり」は誇張ではない。又單なるおかしさのみでもない。單におかしいのは前後の事情を傍觀的に眺めてゐる讀者で、おまんの身にとつて見れば、思ふ男の傍にぴつたりと喰つ付いてゐる嬉しさが餘程手傳つてゐるこ考へねばうそである。

「我云ふ事も聞しめしわけられよ」は御丁寧な言葉づかひであるが、それもよからう。たゞ此言葉は源五兵衛が自分勝手な事ばかりしやべりつゞけるので、それを蔽ふやうに「私の方の言分もちつとはお聞きなさい」こ制したと共に、その語氣には嬌笑の響がふくまれてゐる事を忘れてはならない、而して此の戀娘は更に一歩を先んじて、誓約まで固めさせる拔目のない進展ぶりを示してゐる。男姿して山路を分けて來ただけの潑剌さは十分に認められる。

それからの行文は、現在の狀態では削除するより外はあるまい。所謂濫場で、感覺的要素に卽した描寫である。しかし省略したとて全體に狂ひを生ずる程の場所ではない。

因に、この省略中に「手枕の夢法師」と云ふ文句があるが、これは兼好の「手枕の野邊の草葉の霜枯に身はならはしの風の寒けさ」の歌にあてつけてある。此歌によつて「手枕の兼好」と呼ばれたと云ふし、また例の高師直の艶書を代筆したと云ふ俗說から、双岡が粹法師の浮名を後世に流してゐるので、西鶴が冥々のうち此文句を案出したのであらう。

女とわかつて逃げ出さうとするを引留めたおまんがむきになつた言葉も動作も、まづ自然であらう。源五兵衛は元來、海鼠性の男。「あさましく取亂して」は尤もの次第と云はねばなるまい。文脈は「取亂して移氣の世や」云々と一般の男性の上に擴大されて、作者は「皆是なるべし」と止めを刺し、更に「思へばいやのならぬ」云々とて、とり澄まして脂下つてゐる。

五、金銀も持あまつて迷惑

頭は一年物、衣をぬけばむかしに替る事なし、源五兵衛と名にかへりて、山中の梅暦うか〳〵と精進の正月をやめて、二月はじめつかた、かどしまの片陰に、むかしのよしみの人を頼(み)て、わづかなる板びさしをかりてしのび住ひ、何か渡世のたよりもなく、源五兵衛親の家居に行(き)て見しに、人手に賣かはりて、兩替屋せし天秤のひゞき絶(え)て、今は軒口に味噌のかんばんかけしなど口惜くながめすぎて、我見しらぬ男にたよりて、此あたりにすまれて源五右衛門といへる人はとたづねけるに、申傳へしを語、始はよろしき人なるが、其子に源五兵衛といへる有(り)、此國にまたなき美男、又なき色好、八年此かたにおよそ千貫めをなくなして、あたら浮世に親はあさましく、其身は戀より捨坊主になりけると也、世にはかゝるうつけも有ものかな、すへ〳〵語りくに、そいつめがつらを一目みたい事といへば、其貌爰にある物とはづかしく、編笠ふか〳〵とかたふけ、やう〳〵宿に立歸り、夕は灯も見ず、朝の割木絶て、さりとはかなしく、人の戀もぬれも世のある時の物ぞかし、同じ枕はならべつれども、衣かたるべき言葉もなく、明(く)れば三月三日、童子草餅くばるなど、鶏あはせ、さま〳〵の遊興ありしに、我宿のさびしさ、神の折敷はあれど鰯もなし、桃の花を手折て酒なき徳利にさし捨、其日も暮て四日なをうたてし、互に世をわたる業とて、都にて見覺し芝居事種となりて、俄に貌をつくり髭、戀の奴の物まね、嵐三右衛門がいきうつし、やつこの〳〵とはうたへども、腰さためかね、源五兵衛どこへ行(く)さつまの山へ、鞘が三文下緒か二文、中は檜木のあらけなき聲して、里々の子共をすかしぬ。おまんはさらし布の狂言奇語に身をなし露の世をおくりぬ。

【語釋】 ○頭は一年物 頭は剃つても一年經てば、もと通りに髪が延びるの意。 ○名にかへりて もとの名にかへつて。 ○梅暦 梅の開落によつて季節を知るを云ふ。 ○精進の正月 坊主としてのお正月である。 ○片陰 片ほとりに同じ。 ○何か渡世の便りもなく 何かと渡世の手だてはないものかと搜したが、それもないとの意。 ○家居 屋敷である。 ○天秤の響 兩替屋であつたから、貨幣を秤にかけて目方を量つた事を云ふ。 ○眺め過ぎて 眺めて通りすぎたのである。 ○見知らぬ男にたよりて 「たよりて」尋ねよつて話しかけたのである。 ○よろしき人 有福の人。 ○あたら浮世に親はあさましく 「あたら浮世に親はあさましくなり」で、親は悲嘆のために死んで了つたの意であらう。「あたら」は可惜。俗語のあつたらである。 ○折敷 へぎ折で、四角い盆形の具。 ○五に 夫婦お互で、共稼ぎの方針を立てたのである。 ○貌を作り髭 顔を作り、作り髭をつける(又は描く)の意。 ○嵐三右衛門 「攝州尼ケ崎の浪士西崎新平の男、始めて役者となり小夜嵐の狂言大當りにより之を稱して人、嵐と云ふ。後自ら西崎を改め嵐を氏とす。是三都嵐氏の祖也。元祿三年十月十八日死、六十八」(役者系圖) ○腰さだめかね 踊の腰つきがしつかりしないのを云ふ。 ○源五兵衛どこへ行く云々 「中は檜木の」までが唄の文

句。 ○狂言綺語　芝居に仕組んだ所作事である。元來は妄言僻說の意味である。 ○露の世　露の如く果敢ない世の意。

【評釋】　遺俗した源五兵衛が鄕里鹿兒島に歸つたのは極めて自然である。しかも世を忍ぶが如く、町はづれに居つくのも然るべき所作である。一まづ落ちついた彼が、「生れの家」のあたりに徨ひ、昔と變つた家居の前を眺め過ぐる樣子も、あり〳〵と見えるやうだ。兩替屋から味噌屋。味噌と云ふだけ、一寸おかしい氣がする。それから見知らぬ男に近よつて、わが父の事をそれとなく問ひたゞす段取りもよい。その男が思つた通りをつけ〳〵としやべるのも、ありふれた世態の一つである。「末々の語句に、そいつ奴が面を一目見たい」は手きびしいが、これも尋常の言葉にすぎない。その言葉を逆にとつて、「其貌こゝにあるもの」はいかにも輕妙な諷諧である。

編笠深々と顏をかくして、逃げ歸つた源五兵衛の後姿も侘びしいが、迫りついた町はづれの板庇の家は、更に殺風景である。腹張つての色戀沙汰で、どん底に近い生活では「人の戀も濡れも世にある時の物ぞかし」にちがいない。美女おまんも、かゝる狀態では艶も彩もなくなつてしまふ。寢物語も至つて枯淡の限りであらう。

その上、艶に優しい桃の節句が來た。世間の賑はしく華やかなのに反比例して、我宿の淋しさは一入である。「神の折敷はあれど餚もなし、桃の花を手折りて酒なき德利にさし捨て」はよく〳〵さし迫つた生活である。以前が嬌奢であり、酒脫であつただけに、猶々この感が深い。四日からの世渡りの術も、蕩兒の果としてはふさはしいものであつた。但、その道を修業したのではないから、素人藝のみぢめさも十分に掬みとられる。「あらけなき聲」はよく現はれてゐる。艶女おまんの布晒の方が遙かに物になつてゐたやうに思へるのは、私一人の感じであらうか。ともかくも、若旦那とお嬢樣が身を落しての大道藝である。なつてゐないのが却つて御愛嬌と云ふ格である。露の世をそれでも送り得るのは太平の象か、呵々。

詞句としては、初めの「頭は一年物、衣をぬげば昔に變る事なし」、また「山中の梅暦うか〳〵と精進の正月をやめて」。それから「其の顏こゝにあるものと恥しく」などは面白いと思ふ。

是を思ふに、戀にやつす身、人をもはぢらへず、次第にやつれて、むかしの形はなかりしを、つらき世間なれば、誰あはれむかたもなくて、おのづからしほれゆくむらさきの藤のはな、ゆかりをうらみ身をなげき、けふをかぎりとなりはてし時、おまん二親は此行方たづね詫しに、やう〳〵さがし出してよろこぶ事のかず〳〵、兎角娘のすける男なれば、ひとつになして此家をわたせと、あまたの手代來りて、二人をむかひかへれば、いづれもよろこびなして、物數三百八十三の諸の鎰を源五兵衛にわたされける。吉日とあらため藏びらきせしに、判金貳百枚入の書付の箱六百五十、小判千兩入の箱八百、銀十貫目入の箱はかびはへて、下よりうめく事すさまじ。牛とらの角に七つの壺あり、蓋ふきあがる程、今極め一歩錢などは砂のごとくにしてむさし、庭藏みれば元渡りの唐織山をなし、伽羅掛木のごとし、さんごしゆは壹匁五分から百三十目迄の無疵の玉千二百三十五、柄鮫、青磁の道具かぎりもなく、飛鳥川の茶入、かやうの類ごろつきてめげるをかまはず、人魚の鹽引、めのふの手桶、かんたんの米かち杵、浦嶋か庖丁箱、辯才天の前巾着、福祿壽の剃刀、多門天の枕鎗、大黑殿の千石どをし、ゑびす殿の小遣帳、覺へがたし、世に有ほどの万寶ない物はなし。源五兵衛うれしかなしく、是をおもふに江戸京大坂の太夫のこらず請ても、芝居銀本して捨ても、我一代に皆になしがたし、何とぞ

つかひへらす分別出ず、是はなんとした物であらふ。

貞享三龍集丙寅歳仲春上旬日

北御堂前
撰劔　書肆　森田庄太郎板

【語釋】　○戀にやつす身　戀のために身を落して、しがない暮しをする者の意。　○人をもはぢらへず　さう云ふ者は人に對して恥ぢらふ事もないの意。　○つらき世間　無情な、せち辛い世間。　○ゆかり　緣者である。こゝは「紫の藤の花」の緣語でゆかりとつゞけたのである。紫のゆかりの色と云ふ。　○尋ね詫ぶ　尋れあぐむ。仲々に尋ね當てないさま。　○ひとつ　一所にする。即ち婚姻。　○吉日を改め　よい日を暦に當つて定めるのである。　○藏開　土藏に納めた物品の檢査すること。　○判金　大判小判であるが、こゝは大判のこと。　○うめく　唸く。金が多くて、うなるのである。　○丑寅　東北。　○今極め一歩錢　當時の極印ある一分判金。（慶長の一分判金に對して云ふ）。一分は一兩の四分の一。　○むさし　汚ならしい。　○元渡り　直輪入。　○伽羅掛木の如し　伽羅は掛木の如く澤山ありの意。伽羅は香木の一種掛。木は物を釣りかける木。　○柄鮫　揃った粒狀突起の鮫皮で、刀の柄に卷くに用ふるもの。　○飛鳥川　茶入の銘である。　○ごろつきて　どろ〳〵して、澤山あるさま。　○めげる　破れ碎ける。　○かんたん　邯鄲。例の盧生が呂翁から枕をかりて一炊の夢をむさぼつた場所である。「米かち杵」はその際、米を搗いた杵である。傳說では黃粱とあつて粟飯で、「（前略）初主人蒸黃粱爲饌、時未熟也」（李泌「枕中記」）と見える。　○浦島の庖丁箱　浦島が漁夫であるので魚屋と見立てゝ庖丁箱と云つたものか。　○辨財天の前巾着　辨天樣は印度傳來の女神。前巾着は「巾着の上に紐通しを付けて帶へ付て巾着を前へ提げるなり、印形要用の鍼の類内外朝夕身を放たざる品を入るなり」（賤の小田卷）。女の神樣の前巾着、おかしな敍述でもある。　○福祿壽　七福神の一人で頭の長い神。星の化身と云ふ。大津繪などに唐子がこの長頭に梯子をかけて剃をあててゐる圖がある。剃刀とはそれらからの着想であらう。　○多聞天　やはり印度神、武神であるからその持物の枕槍を出したのである。　○大黑殿　これも福神で印度神（マハカラ）と云ふ。米俵を踏まへてゐるので「千石通」と書いたのである。　○千石通し　上に大い匣があり、下には斜に篩が有る。上から春米を入れると、下からは米と糠とが分れて出て來る裝置ある農具。　○ゑびす殿　福神であるから小遣帳と云つたのである。　○大夫　最上位の遊女を云ふ。「此名目京都より始る。藝の上の名也。慶長の比まで遊女ども小舞亂舞を嗜み一年に二三回つゝ四條河原に芝居を構へ能太夫を皆傾城が勤めし也、（中略）因て今日の太夫は誰の家の何と云ふ傾城が勤むるなど云ひしより能傾城ども の惣名となりけり（洞房語園）。　○請ける　請出すとも云ふ。金で購ひ引取るを云ふ。　○芝居銀本　芝居を興行する時の資本主となるを云ふ。　○何ぞつかひへらす云々　何ぞ遣ひへらすべき分別もがなと思へどその分別出でずの意。　○龍集　龍星のやどること。此星は一年に移ること一次であるので、一年を龍集と云ふ。集は宿の義である。

【評釋】　戀の世帶に窶れはてた二人が、昔の面影もなく恥もすてて、今日を限りとなり果てた時、娘の行衛を尋ねあぐねた末に、おまんの親は漸くにして、その居處をつきとめた。悲劇はこゝに一轉して喜劇となる。頗るお誂向に出來上つてゐる。萎れゆくゆかりの色の藤の花を思はせたいたいけな風情は、再び生溫い春風に吹かれて紫の花房が悠つたりとゆらぐ姿態を見せた。源五兵衛にしても先頃口惜しく眺めた軒下の味噌の看板はさておき、昔の兩替屋の天秤の響も何のその、牡丹餅で頬ぺたを叩かれた有樣で、誠に「うれしかなし」の、少々取りのぼせた形である。

書き上げられた内藏の中の數々は、西鶴得意の誇張法と數字癖とでこれあげた敍述で、又かと思はせるだけである。飛鳥川の茶入までは まづ穩かであるが、人魚の鹽引、瑪瑙の手桶あたりからそろ〳〵脫線し、筆調子に乘つて鼻唄まじりに書きつらねたのが郡鄕の米かち杵以下の品物である。眞に「覺え難し」に相違なく、「世にある程の萬寶ないものはなし」と云はねばなるまい。かう筆つきが曲がると「その通りだ無い物はない、有るものだけ有るだらう」と毒づきたくもならうと云ふものである。

喜劇的結末で結構だから、今少し嗜みをもつて記敍して貰ひたかつたと思ふ。三都の太夫の身請、芝居の銀本。共に當代のブルジョア階級の何よりさきに思付く金の遣ひ道で、尤も至極と云ふより外はないが、これまでのふざけ氣分の行文から、皮相をすらりと撫でた位にしか感興も起らず、「是はなんとしたものであらう」の輕い調子も、すぎては及ばざるの印象しか殘さない。

おまん源兵衞の心中事件は元祿九年八月の事であると傳へられてゐるが、「五人女」の創作年代、貞享三年から見て時代錯誤たる事は明らかである。近松門左衞門の『おまん源五兵衞薩摩歌』（元祿十七年正月、大阪竹本座上演）の初めに「はやり小唄も時につれ、時の昔とどこへ行く、寛文年間の頃かとよ」の文句があるが、これは大體事實に近いやうに思はれる。尤も近松の作意では薩摩の侍菱川源五兵衞は琉球屋の娘おまんと契つたが、おまんの贖身のために仲を割かれ、憤激して斬らんとし、誤つておまんを傷け自ら切腹しようとするのを、笹野三五兵衞、妻小萬のために助けられると云ふ筋で、殊に最後は長崎の黄陳と云ふ名醫によつて蘇生する事になつてゐる。かく結末は喜劇的になつて居るが『五人女』のそれとは似もつかぬ構成を持つてゐる。事實は情死と云ふが、近松も西鶴も共にこの事實を重んじてゐない點がおもしろい。

この事件の流行唄は、二文豪のロト（くちうた）からでも普く街頭に傳播された事が想像できるが、どの樣なものであつたらうか。『松の落葉』卷四の「源五兵衞踊」の唱歌は

高い山から谷底見れば、薩摩源五兵衞は目に立つ男、のほんにほ、しやれた鬢つき茶筌髪、寢て又起きても茶筌髪、ずんと凹んだ塗笠、おまんは何處へ、播磨の明石へ、蛤踏みに〳〵、蛤々ふみにぐり〳〵舟にの、此舟に乘せた源五兵衞、めりこと廻つてのぞんだ、播磨の明石へ、蛤踏みに〳〵、蛤々ふみにぐり〳〵舟にの、此舟に乘せた源五兵衞、一萬八千たから藏、えいえいや、えい〳〵代のさかえ

とあつて、心中歌らしくもなく、むしろ末句は「五人女」の取つた素材を思はせるものがある。また

高い山から谷底見ればお萬可愛いや布さらす

の唄も人口に膾炙してゐる。とにかく源五兵衛とおまんとの情話と、場所としての薩摩とは、緊密な關係を以つて後代に持込まれたものらしい。

元文二年薩摩侍の早田八右衛門と云ふ者が、大阪曾根崎、櫻風呂抱女菊野と馴染んで官金を費消したが、だまされたと悟つて、菊野を初め抱主等五人を斬殺した、所謂曾根崎五人斬なる事件があつた。（西澤一鳳の「傳奇作書拾遺」上卷參照）。薩摩侍と云ふところからして源五兵衛に渡し込み、近松作中の人物をそのまゝに流用したのが『薩摩歌妓鑑』である。寅暦七年九月竹本座興行で、作者は吉田冠子、竹田小出雲、近松半二、三好松洛等の合作である。その後、歌舞伎方面に入つては

寛政元年	初嵐元文噺	辰岡萬作	
同　六年	島廻戯聞書	並木五瓶	
同　七年	五大力戀縅	同　人	
文化三年	略三五大切	同　人	
同　八年	盟三五大切	鶴屋南北	

などがあるが、これらは、凡て菊野事件を取扱つたもので薩摩源五兵衛とか小萬の名は見えるが「五人女」事件のそれとは何等の關係はないのである。

結語

「五人女」に現はれた各篇に就ては、その都度、それに關する事實の考證と局一題材の作品とに瞥見を與へ、評釋の折々には批判がましい言辭をも弄して來たが、今講了するに當つて、「五人女」全體に亘る管見を附け加へたいと思ふ。或は前述のある項目と重複する點が多少あるかも知れない。猶以下の文章は拙著「近世日本小說史」の『西鶴論』の中五人女に關するものより抄錄しつつ筆を執つた事をお斷りしておく。

官能の高き勾ひに熾烈な肉の香を偲ばしめる好色本の中にあつて「五人女」には異常な色調が認められる。一代男以下の諸作に現はれた兩性間の交渉は、內部衝動に嗾かされた或る一個人が、性の飽滿を期する行爲そのもので――たとへ、其等の人物の理想境が、愛慾の種々相から產れる情趣氣分を味得するにあるとは云へ――大體として積極的撫斬的で、その間には何等の顧慮も省察もない。「情慾の遂行にはあらゆるものを犧牲にして憚らぬ大びらな行動が伴つてゐる。然るに「五人女」にあつては、優しさといぢらしさとの奧に、世を憚り人を憚る內氣なところが見える。こゝに所謂好色の範圍を脫した戀の面影が認められる。

まづ、この前提の下に五人女の脚色を論じ、更にそれに據つて誘起せらるゝ諸要素を索ねたいと思ふ。

五人女に於ける五篇は、おまん源五兵衛を除いて他は悉く悲劇的分子から構成せられてゐる。お夏お七のうら若い戀の二曲は、おせんおさんの世馴れた愛慾の物語を挾んで、四篇四樣とり〴〵の趣をなすと共に、全體の配置の上にも留意の痕を發見する。

お夏清十郎の物語の構成にはかなりに深い注意を拂つてあるやうである。戀の大港、室津に於ける清十郎の耽溺を「序曲（アインライツング）」として姫路に來る素因を作り、こゝで結帶からあらはれる艶文に思ひつく男まさりの女を點出して、遂に小袖幕の中なる濡場の「昂揚（スタイゲルング）」となり、更に駈落の「頂點（クフエプンクト）」に達し、紛失金の「轉向（ウムケエテ）」となつて、世にはやり唄

聞けば哀れなる戀の「破綻（アウフレエズング）」に終る。說話の進行は一歩一歩と展開して、その戯曲的色彩が著しく感興を惹く。たゞ冒頭で、清十郎と皆川との心中未遂沙汰の精寫は全篇の緊張を毒する不用の文字であり、又最後の破綻をもたらす清十郎の刑死を紛失金の置塲の物忘れに歸して了ふやうな、事もなげの筆づかひは、餘りに投げやりな態度と思ふ。これらは繁簡よろしきを得ない敘述法で、全般の構想から見て、締釘の打ち所が揚違ひになつてゐる感がある。もしそれ、この一篇に於ける前段に於ける遊里描寫の精密は、作者が此方面に於ける異常なる興味の發露で、癒すべからざる彼が病弊であらう。

お七吉三の一篇もまた、同じく戯曲的趣向を有するものである。若き世の果敢ない戀の花のやうな一生を破り、そこに男女の區別こそあれ、一方は刑死し、一方は生殘つて墨染の衣を浮世の風にさらすと云ふ、悲しい宿命は全く同巧異曲である。たゞ吉三に關する後日譚[illegible]當代の物語としては無理もないが、作品としての完備を求むるなら削除すべきものであらう。われ〳〵の享くる感觸はその章を評釋するに當つて述べた通りであるから細詳は避ける、大體の脚色はお夏篇と同じ道程を辿つて最後の悲劇に流れこむものである。

おせんの物語の布置に大きな缺陷のある事も既に指摘した。樽屋と久七との鞘當が、全體の五分の四を領して、說話の核心たる事件が僅かに殘る一分しか敘してないのは、何と云つても辯明の餘地はない。かくの如き不調和は作者常套の連歌式記述法がそのまゝに踏襲されたものゝ思ふ。こにかく短篇小說としての重心を攝みそこねた作品である。

これに反しておさん茂右衛門の奇しき宿命は、すぐれた結構布置の下に描かれてゐる。冒頭「姿の關守」で女主人公の點出から、夫の留守のつれ〴〵なるまゝの惡戯に及び、その不用意と輕擧とによつて計らずも不義の女になり終る。而して罪の女としての彼女の行爲も、市井の婦人として有り勝ちな自然の姿を以つて動いてゐる。刹那の偸安と淺慮とによつて、綻びては繕ひ、繕つては破れ遂に最後の悲劇にずり落ちる。女主人公のおさんを初め、茂右衛門の姿態もかなり鮮明に浮き上つてゐる。この點に就てはその篇末に指摘しておいたからこゝには單にこれだけを附加するに止める。

殘るおまゝ源五兵衛は構成上、最も拙劣なものである。それは喜劇題材たるためではない。源五兵衛を中心とする前後二人の念友の契とおまんの戀とはわかれ〴〵の說話であつて、一代男の世之助の如く、たゞ同一主人公によつて繋がれてゐるに過ぎない。思ふに作者の興味は、おまんが男裝して女嫌ひの源五兵衛に近づく點に介在するに相違ない。要するに斷片的好色談の餘波がこゝに現はれたのである。

次に五人女と他の好色本との異同に就て一言したい。

從來の作品に見られなかつた特徵としては第一に悲哀感の增加である。この傾向は一代男には全く見えず、二代男以後に見られる特殊相であるが、それはまだ微弱な程度のものであつた。然るに五人女に現はれた悲哀暗愁の色は各篇の主要な情調として動かすべからざる力を見せてゐる。尤も素材そのものに關聯してはゐるものゝ、敘述の方面に於て著しく感塲的な色彩を帶び來つた。わけて若き戀の破滅を描くあたりは特にこの感じが深い。お夏狂亂の塲や、お七のやつれ姿は、行文に音樂的旋律さへ加つて、何となくほろりとさせる情感的魅力が伴つてゐる。或は「これぞ戀の新川、舟を作りて思ひをのせて、水沫（うたかた）の哀れなる世や」と云ひ、「さても〳〵取り集めたる戀や哀れや無常なり

夢なり現なり」と云ふ。いづれも女主人公の盲目的情熱と其悲慘な最後に專念同情して、かの淫蕩浮華な半面を全く忘れしめる。これ淨化せられたる情操の權威であつて、かくして藝術上の美の崇拜は行はれるのである。「五人女」に對する禮讃の聲も、畢竟この感觸に浸潤する陶醉境に胚胎すると思ふ。

これが成女の戀になると風に裂かれ雨に打たれて散る花の哀れさ美しさはないが、更に深刻なる人情の搖ぎが見える。こゝに於て悲哀は單なる嗟嘆嗚咽に止まらずして涙を離れた懊惱となり、諦めすぎての捨鉢となる。即ちその裏面には道義的觀念の萠芽が指摘せらるゝのである。

此道義的觀念の發現も、在來の好色本には見出し難い一要素である。かの茂右衛門が京の町の忍び歩きに、十七夜の影法師に胸を冷し、住み馴れた旦那殿の町に入つては私かに樣子を聞いて身を慄はし、四條河原に狂言を覗けば、これも人の娘をぬすむ所、是れさへ氣味あしく、ならび先きの方を見ればおさんの舊夫がゐる。「魂消えて地獄の上を一足飛び、玉なる汗を搔きて木戸に驅け出て」たなど、いづれか胸奥より閃めく道念の光でないものがあらう。又おせんが鮑に伏して仆れたのも逃れ難い罪過の自覺に外ならない。

道義的觀念の搖曳するに關聯して、敎訓的口吻も著しく目に立つやうに思はれる。男を見向きもせぬ堅氣の女を敘しては、「後には此女に物いふ人もなかりき、これを譏れど人たる人の小娘はかくありたきものなり」と云ひ、世上の節操なき女の多きを誡めては「世に神あり報あり、隱しても知るべし、人恐るべきは此道なり」と澄ます。或は清十郎の一命を奪つた原因の金が、思はぬ所から出たのに當つては、「物には念を入れべき事」と仔細らしく、或はお七の意を敘しては、「油斷のならぬ世の中に殊更見せまじきは道中の肌付金、酒の醉に脇差、娘のきはに捨坊主」と勿體ぶる。かゝる說敎的言辭の隨所に散見せらるゝは、上述の悲哀感及び道義的觀念と共に、作者の創作的態度に一轉化を來たした例證である。しかし猶、在來の情趣氣分は依然として瀰漫してゐる。同じ敎訓をなすにも、その神佛の口吻を借りたものは、餘程俗にくだけ、却つて粹和尙西鶴の風丰が明らかに看取せられるのである。

例へばお夏が別離の悲愁に悶えて室の明神に祈願を籠めた夜、枕上に立つこの御告の一條の如き、宛然酸いも甘いも嚙みわけた叔父貴の說法ではないか。かくては町娘を諭すと云ふよりも、むしろ揶揄冷笑するやうで、折角の社會相に對する辛辣な諷諧も輕い浮調子になり了つてゐる。泰平の逸民にはかゝる浮薄な洒落な態度が歡迎せられたであらうけれど、作品そのものに立入つて考へて見れば、ふざけすぎて眞面目に煩悶する少女の心情に同化する事は出來ない。即ち昂まる感興を阻害して、情緒の涸渴を持來すばかりである。更におさん茂右衛門が切戸の文球の夢の御告に對する捨臺辭の如き、神佛の取扱ひをも全然茶化してかゝつた西鶴の現實趣味、遊戯的態度を極端に暴露したものである。一方に道義的觀念を基調とする迷へるものへの歸趣を示しながら、直ちにこれを反古にしてかゝる。もしおさん等が飽くまでも肉に纏綿する心情を描かんとならば、神佛を傀儡視するには及ばないであらう。このあらゆるものを茶化して懸かる傾向は國民性に基く日本文學の一要素であるが、この場合叩けば生血の迸るやうな切實な人生の一面を寫すに當つて、甚だ不穩當な道化ぶりと云はねばならない。

かゝる輕い氣分で、多少ふざけたやうな人生觀照の態度を持するのは好色本の通有性である。清十郎が姫路にゐる時、お物師腰元抱姥下女などのとり〳〵に思ひを寄せるあたりや、おせんが伊勢參宮の途次に於ける泊り〳〵の描寫の誇張的筆致はかゝる一面の發露に外ならぬ。而して各篇に於て失戀の男女が、多く佛門に歸依するのは思ふに事

實の典據であつて、作者の創意ではあるまい。それ〳〵作者の説明があるにも拘らず、思ひなしか、因襲的行爲をたゞ漫然と取扱つたかの如き感を惹起するのはそのためであらう。

要するに「五人女」は二三の誹議するべき點を有するけれど、構想背景、描寫に於て短篇小説の體を具備し、その內容にふさはしい情緒を湛え、且當代にあつては清新の氣に富む優秀な作品であると云ふ事に歸着する。

論じ來つて猶一項目を逸してゐる。それは初めに提撕した「五人女」に現はれた戀である。西鶴の創作過程より云へば「肉」から「戀」への問題である。

好色の範圍を離れて戀の面影が見える。この問題を捉ふるに當つて、「五人女」に於ける第一の印象はこれである。こゝに云ふ「肉」とは性慾を意味し、戀とはそれのみに執しない異性間の情愛を指す。換言すれば「肉」は自己の性慾の飽滿のみを追求して對象たるべき人物の心身に考慮を拂はないが、「戀」にあつては自己及び對象は一團となつて大なる「我」を形成し、その精神肉體の兩生活に終始するものである。

この見解によつて五人女に現はれた兩性關係を眺めると悉く戀と稱へ得るもので、一代男や一代女などに於けるもの、即ち肉の享樂とは大に趣を異にしてゐる。然らば五人女の戀は如何なる姿態を以て現はされてゐるか。まづ若き戀の描寫から眺める事とする。

若き戀と見るべきはお夏、お七、おまん三人である。而してこの情趣の最も饒かに漲つてゐるのは、お七のそれである。吉祥寺へ退轉の頃、折ふし夜の嵐をしのぎかねた宵、貸してくれた着替の中に、「黑羽二重の大振袖の梧銀杏の並べ紋、紅うらを山道の裾取、わけらしき小袖の仕立」があつた。お七はわが年の頃を思ひ出して、いかなる上臈かと逢ひ見ぬ人のなつかしく、更にあるかなきかの棘に、胸にいつしか亂れそめる隱微の消息は、よく斯般の契機を語るものである。かくして「私は十六になりますと云へばお七わたくしも十六になります」の幼い戀の口説となり、雪の夜の情宿に「灯の影に硯紙おいて互に書いて見せたり見たり」する、忍ぶ戀の憂さ辛らさも十分に掬みとられる。而してある日「風はげしき夕暮に、いつぞやの寺に逃げゆきし事」を思ひ出して「この戀火事あらば」との出來心は、唐突にして幼稚に過ぐる嫌ありとは云へ、まゝ事めいた初戀の悅樂には、此の不自然の痕跡も蔽はれやう。鈴の森に松風ばかり殘つて、その日の小袖群內縞のきれ〴〵は、詩のやうな戀の結末としてはあまりに慘酷であり悲惻である。わけてその蕭やかな行文には嗚咽の聲さへ偲ばせるものがある。

茂右衞門に對するりんの戀も眞面目なものである。茂右衞門が灸を据ゑて貰つた時、据ゑおとしたのを、「据手の迷惑さを思ひやつて、目を寒ぎ齒を喰しめ堪忍せしを、りん悲しく揉み消して是より肌をさすりそめて、いつとなくいとしや」と思ひ込む徑路は、人情の機微に觸れた精細な敍述と云はねばならぬ。

かゝる若き日の戀には、結ぼれた懊惱と、迸る情熱と、堪へ得ざる羞恥とが伴つて來る。お夏は次第に痩せに痩せてあたら姿も替り、たゞ聲を聞き合つてのみ樂しみ、お七は思あまつて書きしるし、おまんは心苦しさに堪えかねて男姿に身をやつして山の庵に尋ね入つた。かくて靈犀一點、春を解して後は、蓦然として、一は狂亂となり、一は罪の人となるに至る。たゞおまんが圓滿なる解決は、一にその兩親の粹な裁きに國歸するが、それまでには大道藝人のみぢめさを嘗めてゐる。

かくの如く、愼ましい娘の戀は、時あつて迸騰し、面に烙印を押すが如き熾烈なる熱愛となる事は、古往今來、變

るなき人生の事實である。西鶴の描ける戀の娘はその悅樂の日にあつて、多少陶醉的情緒に惑溺する傾向はありながら、一旦破滅の淵に陷つては、淡い陰影に鎖されて、遣瀨なき惱みの色と、濡れそぼつ哀愁の氣とによつて、沈痛な美の諧調に浸潤して了ふ。

更に、分別もあり世故にも馴れ所謂世間を知つた成女の戀を檢めやう。おせんは有夫の身である。しかも夫と同棲するまでには一かどの苦勞があつた。この人妻としての彼女が、長左衛門と不義に陷つた徑路はどうであらう。唯あらぬ濡衣に憤激した片意地にすぎない。「とても濡れたる袂なれば、此上は是非に及ばず、あの長左衛門どのに情をかけ、あんな女に鼻あかせん」との張魂にすぎない。その最後こそ潔いものがあつたけれど、戀の動因には不純の色が見える。即ち嫉妬深い女を妻とせる長左衛門に對する同情が「各別の志、ほどなく戀」となつたのである。おさんに至つては偶發的事件のために身を誤つたのであるが、その素因は夫の留守中に於ける非常識な惡戲にある。しかも一旦身を汚すや「うれしや命に代へての男ぢやもの」と、翻然氣をかへて逃れ得るだけは逃れようとした、かゝる女性の心理的過程には、純然たる人間の通有性と共に時代精神を看過する事はできない。おせんが貞操を犧牲にして恬として顧みない意地も、おさんがたゞ一向に生を惜み肉に執するのも、凡て所謂元祿女の眞相を語るものである。即ち女房氣質に加ふるに遊女氣質を以つてした、當代女性の心的現象を表明してゐるのである。

思ふに「一代男」に現はれた遊女高橋の寬濶や、小紫の任俠や、吾妻の心意氣や、さては一代女の情と意地と名聞との戀の諸分に想見せらるゝ遊女氣質は、また一般の元祿女性の半面ではなかつたらうか。換言すれば元祿期に於げる女は人妻と云はず町娘と云はず、幾分の遊女的氣風に浸染しては居なかつたらうか。

史實はしばらく云はず、西鶴に現はれた女性には凡てこの風格が認められる。「人の娘はかくありたきもの」と世間の褒め者であつた利發女のおせんすら、たゞ柔和な女ではなく、かの張意地で潜んでゐた。おさんが自ら招いた奇禍の原因も所詮は愼ましからぬ行爲から起つたのであつた。又お夏が文殼を見て「女のあまねく思付くこそゆかしけれ」と思ひつくのも、おまんが中剃して男姿に戀人の跡を慕ふのも、さては常香盤の鈴落ちて夜半の靜寂を破る時、目ざめた飯焚女のお七に對する仕こなしも、お七が新發意を賺す洒落な態度も、一として、この「遊女らしさ」の發現でないものはない。

以上述べ來つたところを總括すれば、五人女に現はれた戀はそれが少女にあつても人妻にあつても、とりん〳〵の品があるけれど、共に元祿世相の半面が一抹の刷毛によつて鮮やかな色彩を呈してゐる。さりながら、西鶴の好色本に取扱はれた凡ての色戀沙汰から見れば、五人女の戀は毒々しい蕁麻の臭ひや、粘り強い紅藍の匂ひの中に、二もと三もとの罌粟が、その深紅の花葩をもたげて、その吹く風に搖れながら薫りの高い芳香を放つてゐるやうな感じがする。

〔附言〕講了に當つて一言申します。菲才をも顧みず、曲りなりにもこゝまで漕ぎつけました。今更に愧ぢがましく感じてゐる次第です。本文の誤植や、語釋の不備な點などが讀みかへすにつけて目につきます。今はたゞ完全を期するため、何等かの機會に訂正增補する意向のある事をお告げしたいと存じます。

西鶴選釋

世間胸算用

解題

「世間胸算用」はその題簽にも内題にも、「大晦日は一日千金」といふ小標題がつけられてある通り、大晦日に於ける町人の苦しい遣繰を専ら題材としたものである。全部五卷から成り、各卷に四つづゝの短篇合計二十章を收めてある。元祿五年正月に京都・江戸・大阪三都の書肆から同時に出版された。西鶴の諸種の小說中所謂町人物に屬するもので、彼の生前に出版されたものゝ中では最後の作であつた。元來町人物は彼が自らその社會に生活して居たゞけに、最もよくその機微に通じ、隨つてより深く鋭い觀察を下し、より自由奔放な描寫を、試みる事が出來た。特にこの「胸算用」は彼が晩年の作であるから、その觀察は愈々深刻精細に、その筆致は益々老熟圓滑を加へて、町人物中の白眉たるを失はぬ。金を中心とした町人の世相が大晦日といふ經濟生活上の特殊な場合を捉へた事によつて、最もエツフエクテイヴに描き出されゐる。もう五十といふ年に達した西鶴が、世の中の酸いも甘いも嚙み分けたらしい靜かな微笑を湛へながら、このいたましくも滑稽な町人生活の裏面を、冴えた筆先にぐん〳〵と描き出して行つた所は、何といつても彼の作品中一番落付きと深みとを持つて居ると言へよう。なほ本書は普通「ムナザンショウ」と呼ばれてゐ

るが、原本にはすべて「胸算用」と振假名があり、當時の他の小説にも例へば「忘花」（元祿九年刊）などに、「むねさん用」と明かに假名書したものが見えるから、やはり「ムネザンヨウ」とよむべきであらう。

序文

松の風靜かに初曙の若えびす〳〵、諸商人買ての幸ひ、寶ての仕合、さて帳閉ぢ棚卸し納め銀の藏開き、春のはじめの天秤大黑の打出の小槌、何なりともほしき物それ〳〵の智惠袋より取出す事そ。元日より胸算用油斷なく、一日千金の大晦日を知るへし。

元祿五申歲初春

難波　西鶴

松壽

【凡例】　本文はすべて原本のまゝに從つた。通讀の上には多少不便であらうが、古い書物の實際の面目を知る上から、研究者のためには却つてよからうと思ふ。假名遣の誤や送假名の不備やは、讀者自ら補正してよんで頂きたい。甚しい宛字などは語釋の方で注意したものもある。また原本に假名書きになつてゐて分り難い個所も、語釋で漢字を宛てゝある。

【語釋】　○若夷「京師街頭寶ニ鞍馬毘沙門天ノ紙符井弱惠美須等ノ福神之畫ヲ。四民買レ之貼ニ門戸ニ或供ニ藏德棚ニ元日拜レ之所ノ福案ノ祚。」（日次紀事）「元朝未明に大黑神と夷殿の圖像を版行にして人の門戸を敲　賣ありく事、都鄙に有る事也。諸人福の神を賣るというて買ふ者多し。是を若夷と稱す」（滑稽雜談）。　○帳閉　帳綴。正月四日諸商人が商始めとしてまづ一年中用ひる帳簿を綴ぢる。これを帳綴といつて互に酒食を饗して祝ふ（日次紀事）。初寅の日に行ふ、帳面に大福の字を題するのは洛陽の上善提藥師堂大福寺から起つた。その緣起に云く「本尊は推古天皇六年庚午聖德太子彫刻し給ひ大和國廣瀨郡宮田鄕に伽藍を建て、藥師を以て本尊とす。造營事終りて大工鍛冶諸商人に金錢を賜ふ。各々富貴の身となる」と。それで上方の商人は年始此堂に來集つて帳の上書を大福帳と題した。文龜以後この事が絶えた。（滑稽雜談）尤もこの胸算用の中にも卷五に「今年は今までの嘉例を祝ひかへるとて、十日の帳綴を二日に取越し」と見えるから、その日取は必しも一定してゐなかつたらしい。　○棚卸し「商賣の輩書へ置きたる物の員數を、多少分際何によらず、歲首に改むる事也。これ今年賣買する貨財を、今市店より取卸すの義也」。（滑稽雜談）　○藏開　歲始に藏を開いて書へておいた金銀米錢その他一切の貨財を取出して、用に充て賣買の事を調べる。吉日を選んで行ふ。（滑稽雜談）　○打出の小槌　すべて昔の商家には銀の量目を量るために天秤が備へてあり、それを量る場合には針先が狂はぬやう小槌で打つのである。それを大黑の槌に見立てたのだ。

この序文は西鶴自筆のまゝを板下にしてゐる。元來西鶴は手蹟も美事で、自著の俳書浮世草子などは、自筆のまゝを板下にしたものが多いが、この「胸算用」は序文だけが自筆である。翌年の秋にはもう彼が白玉樓中の人となつてゐるのから推すと、この頃から多少健康を害してゐたものでもあらうか。序文は初春の板行にふさはしい目出度づくめで、最後に教訓的な口吻で大晦日の用意を說いたのも、ゆつたりした落ちつきを見せてゐる。文の意は「松吹く風も靜かに枝を鳴らさず、元朝に若夷〳〵と賣り歩くその福札の御利益で、諸商人が賣買共に利を得ることだらう。扨歲

始には商家で帳綴やら店卸し、又納め置いた銀子を改める藏開きなどが行はれ、春の始めの初商ひには、天秤を小槌で打つ。それが大黒の打出の小槌の如く、何でも欲しい物を手に入れるといふのは、各々の智恵才覺による事だ。だからこの目出度い元日から、よく一年中の豫算を立てゝ、大晦日に至つてうろたへぬやうにせねばならぬ。」と。くどいが碎けばまづこんな事になる。

胸算用　大晦日は一日千金　巻一

目録

一、問屋の寛濶女
　はやり小袖は千種百品染
　大晦日の振手形如件
二、長刀はむかしの鞘
　牢人細工の鯛つり
　大晦日の小賀屋は泪
三、伊勢海老は春の枩
　狀の書賃一通一錢
　大晦日に隠居の才覺
四、藝鼠の文づかひ
　居風呂の中の長物語
　大晦日に煤はきの宿

本文

問屋の寛濶女

世の定めとて大晦日は闇なる事、天の岩戸の神代このかたしれたる事なるに、人みな常に渡世を油斷して、毎年ひとつの胸算用ちがひ、節季を仕廻かね迷惑するは、面々覺悟あしき故なり。一日千金に替がたし。錢銀なくては越れさる冬と春との峠、是借錢の山高ふしてのぼり衆たるほだし、それ〳〵に子といふものに身體相應の費、さし當つて目には見えねど、年中につもりてはきだめの中へすたり行、はま弓、手まりの糸屑、此外雛の摺鉢われて菖蒲刀の銘の色替り、踊たいこをうちやぶり、八朔の雀は珠數玉につなぎ捨られ、中の亥猪を祝ふ餅の米、氏神のおはらひ團子、弟子朔日、厄拂ひの包錢、夢違ひの御札を買など、寅舟にも車にも積餘るほどの物入、ことに近年はいづかたも女房家ぬし奢りて、衣類に事もかゝぬ身の、其ときの浮世模やうの正月小袖をたくみ、羽二重半疋四十五匁の地絹よりは、千種の細染百色かはりの染賃は高く、金子一兩宛出して是

さのみ人の目たゝぬ事に、あたら金銀を捨ける。帯とてもむかしわたりの本繻子、一幅に一丈二尺一筋につき銀二枚が物を腰にまとひ、小判二両のさし櫛今の直段の米にしては本俵三石あたまにいたゞき、襠も本紅の二枚がさね、白ぬめの足袋はくなど、むかしは大名の御前がたにもあそばさぬ事、おもへば町人の女房の分として、冥加おそろしき事ぞかし。せめて金銀我ものに持あまりてすればなり、降ても照ても晝夜油斷のならざる利を出す銀かる人の身體にて、かゝる女の寛濶能々分別しては、我と我心の恥かしき義なり。明日分散にあふても、女の諸道具は遁るゝによつて、打つぶして又取つき、世帯の物種にするかと思はれける。慾じて女は鼻のさきにして、身體たゝまるゝ宵迄乗ものにふたつ灯挑、月夜に無用の外聞、闇に錦のうは着、湯わかして水へ入るごとく、何の役にも立さる身の程、死れたる親仁持佛堂の隅から見て、うき世の雲を隔ければ悔みても異見は成がたし。

【語釋】 ○破魔弓 はまとは藁で圓座のやうに編んだ的このとで、もと正月の遊戯として、この的を小高い所から轉げ落して、それを射ることが行はれた。それが後にははまが破魔に通ずるので緣起を祝ひ、細長い板に弓矢を節り付け、その下に武者繪などを押して、男兒の正月の贈物とするやうになつたのである。 ○菖蒲刀 端午の節句に男兒の玩ぶ木刀。「以柳木作大小之刀、是謂菖蒲刀男兒横之於腰」(日次紀事) ○踊太鼓――盆踊りの拍子にうつ太鼓。その製は圓太鼓で表に繪などかいてある。「甲子夜話續編」卷六十四にその圖が見える。 ○八朔の雀 京都の俗として八朔の節句には家々の乳母が繪行器一双を、その保養する女兒に贈り、又童兒は戯れに松笠で雉子を作つたり、烏賊甲で鷲鷲を作つたりして、自ら玩び或は互に相贈つた。綵雀 もその類で、これを薏苡の枝につけ、行器と共に贈ることが行はれた。(日次紀事)○中の亥猪 十月亥の日に餅を食へば萬病を除くといふので、古來禁中でもこの上亥日に内藏寮から餅を供御に献する儀式があつた。(公事根源)後世民間では猪は多く子を平産する等といつて、やはりこの日餅を食ひ又贈答するならはしとなつた。中のゐのこはこの月亥の日が三度あればその二番目のをいふ。 ○御拂團子 御祓祭の時神に供へる團子。 ○弟子朔日、十二月は一年の末の日であるから、その朔日を乙子朔日といひ、又乙子の餅といつて餅を製して祝ふ風習があつた。乙子とは季子のこと。 ○厄拂 又厄落しともいふ。「宗長手記」に「節分の夜京には役落しとて年の數錢を包みて乞食の夜行に落して取らする事を思ひやりて」とあるから、室町時代からの風習である。後世は年數を豆で數へ、これに一錢加へてやつた。「今夜(節分の夜)乞人以綿巾覆頭面自稱役拂役落、終夜往來街衢至曉而止矣」(日次紀事)。そして包錢を貫つた乞食は「やあら目出たや鶴は千年亀は萬年東方朔は八千歳」などゝ言つて、目出度く祝ふのが常であつた。 ○夢違ひの御札「節分夜獏の形を圖て枕に加へ侍れば、惡夢を避くるとて、今の世俗する事也。俗説に獏は夢を食なる故これを用ひるといへり云々」(日本歳時記)「一代男」卷三にも「夢ちがひの獏の札、寶舟寶など」と見え、節分の夜寶り歩いたもので、これを枕の下に敷く風習はすでに室町時代からあつた。船内に種々の珍寶を畫くから寶船といふ。後には七福神や「長き夜のとをの眠りの皆目さめ波乗り船の音のよき哉」といふ廻文(上からよんでも下からよんでも同じ文句といふ)の歌などをかいた。江戸では正月の元日か二日の夜も敷いて寝る事が行はれた。舟から車とつゞけた。 ○女房家ぬし 家主はいはらじともいふ。一家の主婦をいふ。永代藏卷五「拙者が旦那は人に變り定まる女房いはらじなし」。丹波與作中卷「わめく聲に出女ども、いはらじ諸共表に出る」等の用例がある。「右二例共に翻刻本にいはうじとしたのは誤りである)又支考の笈日記中卷にも

家主の寐てゐるもよし杜若　如水

の句があつて、家主にイハラシと振假名してある。語源については、元祿九年刊女重寶記に、「百姓のをお方ども又鬧鞋（ゑらこ）ともいふ、下女に藁鞋をはかするの義なり」とあるが、これは少々附會の說らしい。やはり一家の主の意でイヘヌシから轉訛した語であらう。○浮世模樣　當時浮世の語はさま〳〵の意に用ひられてゐるが、こゝは當世風、流行などの意。やはり模樣である。

○千種の細染、百色替り　諸種の染料を用ひて、細かく模樣を染め分けたものであらう。千種色は萠黃色をいふが、こゝはやはり百色と同じで、特定の色の名とは思はれぬ。○背渡り　古渡り、もと渡り等ともいふ。古く舶來した上等品。○銀二枚錄一枚は四十三匁に相當する。○ゆぐ　女の腰卷。○本紅　本式に染めた上等の紅染。○御前（ごぜん）　武家大名の內室をいふ。（人倫訓蒙圖彙）○寬濶　はでなこと。惣じて寬濶を尙ぶ事は、元祿頃の一種の時代精神でもあつた。○分散　破產。○又取り付き又商賣を始め。○女は鼻の先　諺に「女の智惠は鼻の先」。○月夜に云々　月夜に提灯、闇夜の錦、湯沸かして水にする、皆無用の喩にいふ諺である。

冒頭の句には、まづ彼の吟「大晦日定めなき世の定め哉」を想はせる。「大晦日は闇なる事」とは、大晦日が儼ごして年の終りに控へてゐる事を言つた文句である。定まつた大晦日なのに、人皆かねての生活に油斷があつて、節季の拂ひをすます事が出來ぬのは、すべて各々用意が惡いからだ。もう最後の一日となつてからは、千金出しても追附かない。金がなくては。越せぬ冬と春との境の峠だが、それが借錢のため中々登れない。その借錢に縛られるのは、誰も三界の枷たる子供の爲めだ。――こゝでは絆から子供といふ言語が引出されてゐる。――子といふものゝために、差當つては目立つた額ではないが、年中に積ると掃溜（これも積りの緣）の中へ廢つて行く節句毎の贈答品玩具等の費用でも大變なものだ。殊に近頃は家々の女房が贅澤をして、着物は相當持つてゐるのに、時々の流行衣裳をこしらへよ

うと計畫し、その切竈（きれつど）の代よりは染賃の方を高く出して、立派な模樣を染めさせる。しかもその染賃一兩づゝ出しても、それほど金が入つたものとは人目にも立たぬのに、あつたら金を捨てるやうなものだ。帶といつても古い舶來の本繻子、一筋八十六匁のものを結び、差櫛は小判二兩、即ち米三石の値に當るものを頭に戴き、湯具にしても足袋にしても、昔は大名の奧方もせぬやうな贅澤ぶりだ。それもせめて自分の金を持ち餘つてゐてやるのならまだしもの事、常住金利の廻し方に氣をつけてゐねばならぬやうな、借金してゐる人の身體として、そんな女のはで好きは、よく〳〵考へて見ると自分で恥かしくなるわけのものだ。だが明日破產の宣告を受けても、女の諸道具は處分を免れるから、一旦財產を潰してしまつて、それから又商賣に取り付き、その時女房の道具を賣拂つて世帶のたねにするのかと思はれる。惣じて女の智惠は淺はかなもので、身代限りするその晩までも無用の虛榮心にかられてゐる。

西鶴はかうして女の贅澤を、まづ第一に戒めた。子故の費用も馬鹿にはならぬが、それは何といつてもまだきりがある。連添ふ女房にかう奢られてはたまらない。人の金をかりて商賣をしてゐる。まづ中位の商人の女房でこれだ。櫛だけで本俵三石といふのだから、米價を標準にすると、今の値段で一寸百圓位の代物になる。百圓といへば丁度中等敎員の初任給ぐらゐに當るそれではなか〳〵こんな女房は養へぬわけだ。當時の女が一般に衣類道具に贅澤であつた事は、これのみならず。いくらも例をあげる事が出來る。近松の「天の網島」に治兵衞の女房おさんが衣裳を質入れするのに物數十五色で新銀三百五十目と見積つた所があるが、佐々政一博士はこれをもとゝして、當時紙屋ぐらゐの小商人の妻の晴著が百石取のお侍の一月分の收入を投げ出しても、やつと一枚半しか買へない位高價のものだつたと、面白い計算をされてゐる。（醒雪遺稿中の「元祿の衣裳」の條參照）

今の商賣の仕かけ世の僞りの問屋なり。十貫目が物を買て、八貫目に賣て銀まはしする才覺、つまる所は内證のよはり、來年の暮には此門の戸に賣家十八間口、内に藏三ケ所、戸立ぐ其まゝ疊上中二百四十疊、外に江戸船一艘五人乘の御座ふね通ひ舟付て賣申候、來ル正月十九日に此町の會所にて札をひらくと沙汰せられ、皆人のものになれば、佛の目には見えすきて悲しく、定めて佛具も人手に渡るべし、中にも唐かねの三ツ具足、代々持傳えて惜ければ、行先の七月魂祭りの送り火の時、蓮の葉に包みて極樂へ取て歸るべし、迚も此家來年ばかり、汝が心根もそれゆへ、丹波に大分田地買置、引込所拵らへけるは中々無分別なり。我賢こければ我に銀借ほどの人も又利發にて、ひとつ〳〵吟味仕出し、皆人の物になる事なり。よしなき惡事をたくまんよりは、何とぞ今一たび商賣仕返せ。死でも子はかはゆさのまゝに、枕神に立て此事をしらすぞと、見し姿ありありとの夢は覺て、明ければ十二月二十九日の朝、寢所よりも大笑して、さても〳〵けふと明日とのいそかしき中に、死んだ親仁の慾の夢見、あの三ツ具足お寺へあげよ、後の世迄も欲がやまぬ事ぞと、親をそしるうちに、諸方の借錢乞山のごとし。何とか埒を明る事ぞと思ひしに、近年銀なしの商人共、手前に金銀有ときは、利なしに兩替屋へ預け、又入時は借る僞にして、こさかしきもの振手形といふ事を仕出して、手廻しのたがひによき事なり。此亭主も其心得にして、霜月の末より銀二十五貫目、念比なる兩替屋へ預け置、大拂の時米屋も呉服屋も味噌屋紙屋も肴屋も、觀音講の出し前も、揚屋の銀も乞にくるほどの者に、其兩替屋で請とれと、振手形一枚づつ渡して、萬仕廻ふたとて年籠りの住吉參、胸には波のたゝぬ間もなし。こんな人の初尾は、うけ給ふてから氣づかひし給ふべし。されば其振手形は、二十五貫目に八十貫目あまりの手形持かくる程に、兩替には算用差引して後に渡そう、振手形大分有と、さま〳〵詮議するうちに、又掛乞も其手形を先へ渡し、又先からさきへ渡し、後にはどさくさと入みだれ、埒の明ぬ振手形を銀の替りに握りて、年を取ける。一夜明れば曇かなる春とぞなりける。

【語釋】 ○内證の崩り 内證には諸義あるが、こゝは一家の財政狀態、暮し向き等の意。 ○江戸船 上方から江戸に貨物を積込る船をいふ。 ○御座舟 もと天子を始め貴人の乘る船をいつたのだが、こゝは和漢三才圖繪にも「遊山船俗云御座舟」とある通り、普通の遊山船である。川遊びのものは川御座とも言つた。 ○通ひ舟 岸から大形の御座舟などに人を乘せて運ぶ小舟。 ○三つ具足 花瓶・燭臺・香爐の三佛具をいふ。 ○運の葉 枕上の宛字。 枕上に立つのは大抵神樣だから、 つい誤つて用ひられたのだらう。西鶴だけでなく一般に慣用されたらしい。 ○枕神 ○大拂 上巳・端午・七夕・重陽の節句前の拂ひに對し、大晦日の仕拂をいふ。 ○觀音講 元來は觀音經を講ずる法會であるが、當時の講といふのは今の會とか團とかいふ程の意であつた。伊勢講・醫講・賴母子講等皆それである。日次紀事の伊勢講の說明に「俗間三人或五人當合心、約二其日一聚二其家一謀二其事一謂講、其日多用二首日及十六日一、其所聚之家稱二頭人一是首長之謂也、頭人輪轉設二酒食一奏二謀中人一」とある。 ○年籠 年の暮から正月にかけて神社佛寺に參籠すること。 ○初尾 初穗の宛字。 吉神社からの緣である。 ○胸には波の云々 住

眼前の虛榮にかられて表面の塗飾を事とするのは、女ばかりではない。今の商賣のやり方が、皆うそで固めたまる

で偽りの問屋だ。十貫目の物を八貫目に賣つて、見す〳〵二貫目の損をしながら、とにかく現金が手元に廻るやうな才覺をする。しかし結局仕入れた商品の代は拂はねばならぬのだから、財政は逼迫して來る。遂には一年たつかたゝぬに、家藏共に賣物に出して、町の會所で入札して貰ふといふ事になる。それが佛の目には見えすいて悲しいので、「せめて家代々もち傳へた三具足だけは、來年の七月極樂へ取つて歸らう。とても此家も人手に渡らぬのは來年一杯位なものだ。お前の考へもその通りだから、豫じめ丹波に大分田地を買つておいて、そこへ引込む用意をしてゐるやうだが、それは却つて無分別といふものだ。お前がそんな抜目のない事をすれば、債權者の方も利口で、そんな田地はちやんとしらべ出して、それも皆人の物になつてしまふ。つまらぬ惡い考を起すより、もう一遍何卒眞面目にかせいで見よ」と、死んだ親仁は夢に諭した。息子はそれも尻にきかせて、押寄せる借金取りを振手形といふ便利な方法で追拂つて、自分は年籠りなどゝいゝ氣なものである。さてその振手形は實際額面だけの預金がないのだから、結局不渡り同樣なものとなつて、最後に受取つた人は埒の明かぬ手形を握つて年を取るといふ事になる。

こゝには遣繰の一方法として、振手形惡用といふあらてをかつぎ出してゐる。振手形といふものは今の小切手や手形と同じ事で、この頃からさうした金融上の便法が考へ出されたらしいが、それを逸早く題材にした所は、恐らく西鶴の窃かに得意とした點であらう。一體西鶴は頗る當時の經濟的事情に通してゐたので、算數の術にも遜し、商賣の懸引なども相當に心得て居たと思はれる。西鶴の素性については、從來武家の出身だといふ說さへ傳へられたが、その作品を通して見ると、どうしても町人だとしか思はれない。特に最近伊藤仁齋の第二子梅宇の隨筆たる「見聞談叢」中の記事によつて、西鶴の本名が平山藤五と言つて、大阪のかなり富んだ町人であつた事が明にされた。——但しこの記事はそのまゝ信ずるには、なほ根本資料的價値に多少乏しい點はあるが、少くとも最も有力な資料と思はれる。——そして彼自身は家業の方は手代任せにして、暢氣な生活をしてゐたらしいが、商人のかうした巧妙な遣繰などは、自ら知る機會が多かつたことだらう。

振手形制度の起源發達などは、經濟史の方から見ると、面白い研究題目だらうが——そしてすでに相當な研究が試みられてゐるのであらうが——こゝにはそれらの事は大した必要はない。だが一寸氣づいたまゝに言ふと、「風流敗毒散」(元祿十六年刊)卷三に、「振手形取りに歩かぬ小姓云々」と見え、又錦文流の「當世乙女織」(寶永三年刊)の中にも、なぎといふ女僧が色仕掛で加賀屋の嘉吉といふ商人に、なぎ宛の振手形を書かせ、うま〳〵百兩を騙取する話が見える。それから「子孫大黑柱」(寶永六年刊)卷四には、「大かたの商人相應の兩替と取組み、振手形にて取遣りして天秤をたゝかず。されば二十貫目三十貫目の丁銀を、中々正銀にては人隊大ぶんかゝりてさばけ難し」と、この方法が堺の商人の間に行はれた事を記してゐる。これ等の話によつても、元祿以後益々この振手形が取引上汎く利用されるやうになつて居た事が分る。

二　長刀はむかしの鞘

元朝に日蝕六十九年以前に有て、又元祿五年みづのえさる程に此曙めづらし。曆は持統天皇四年に儀鳳曆より改りて、日月の蝕をこよみの證據に、世の人是を疑ふ事なし。日より見靈して末一段の大晦日になりて、淨瑠り小うたの聲も出ず、けふ一日の暮せはしく、こと更小家がちなる所は喧嘩と洗濯と壁下地つゞくると、

何もかも一度に取まぜて、春の用意とていかな事餅ひとつ小鰯一匹もなし。世に有人と見くらべて淺間敷哀れなり。此合借屋六七軒、何として年を取事ぞと思ひしに、みな質だねの心當あれば、すこしも世をなげく風情なし。常住身の取置、屋賃其晦日切にすます。其外に萬の世帶道具、あるひは米味噌燒木酢醬油鹽あぶら迄も、借人なければ萬事當座買にして朝夕を送れば、節季々々に帳さげて、案内なしにうちへ入るものひとりもなく、誰におそれて詫言をするかたもなく、樂みは貧賤にありと、古人の詞反古にならず。書出し請て濟さぬは。世にまぎれて住ける畫盗人に同じ。是を思ふに人みな年中の高ぐくりばかりして、毎月の胸算用せねによつて、つばめのあはぬ事ぞかし。

【語釋】 ○壬申ほどに　申とさる程とかけた言葉。○餞風曆　唐の高宗の麟德二年李淳風の作つた曆。高宗の餞風年中我が國に渡來したのでかく呼ぶ。持統天皇の四年十一月から元嘉曆と共に行はれ、淳仁天皇の天平寶字七年廢せられた。○口より見盡して末一段の「曆の最初から段々繰つて行つて最後の」といふ意を、次の淨瑠璃小唄を引出すために、末一段といふ言葉を用ひて言つたのである。○世に有る人　世に時めいて居る人。○身の取置　一身の處置しかた。こゝの全體の文意は、「平生自分の身を處置するのに、屋賃はその晦日ぎりに支拂ひ、其外云々。」○當座買　其都度現金で買ふ事。○節季々々に云々　當現金買ひにしてゐるから節季毎に掛取帳をさげて借金とりに來る者が一人もない。○樂みは貧賤にあり　顏回が陋巷にあつてその樂みを改めなかつた故事によつたのだらう。○書出しうけて云々　買がゝりの金を請求されて、それを支拂はぬのは世間の目を掠めて生活する畫盗人のやうな圖太い奴である。「住みける」は「住める」とあるべき所。例の西鶴の文法。○高ぐゝり　ごく大體の豫算。○つばめの合はぬ　收支の決算勘定が合はぬ。つばめはやはり刀の鐔目から出た言葉であらう。近松の女護切上に「跡のこじりの帳面のつばめ合せと親方が、鞘鳴りするぞ道理なる」とあり、又傾城禁短氣三にも「あれも是もの心當共ばらりとちがひ、不斷あてにして買がゝりせしつばめ合はず、節季に難儀して云々」とある。なほ犬子集に「春はたゞ歸る雁がね追々に、本利揃ふる燕算用」とあるのなども、元利合計の算用といふ意で、雁の緣で燕の字を宛てたまでゝあらうと思ふ。

冒頭むつかしい曆の說などを持ち出したのは、まんざら出鱈目のこけおどしではないので、西鶴はかつて貞享二年正月、義太夫に拮抗すべく特に加賀掾に「曆」といふ新作淨瑠璃を作つて與へた事がある。それは貞享の新曆頒布をあて込んだ趣向だつたので、その折元嘉曆・儀鳳曆などの事まで少々はしらべて見たらしい。元朝の日蝕の事なども實際にちがひない。さてこの一節は、曆の事から末一段の大晦日とおとし付け、平生一年中の高ぐゝりばかりして、毎月の細かい胸算用をしない不用意を戒めて終つて居るが、實はその訓戒的な言葉は、貧家に却つて買懸りのないといふ話から、つい筆が辷つたにすぎない。質種を心當てに、年末も平氣で暮してゐる合借家の事を言ふのが勿論主だ。

其日過の身は知たる世帶なれば、小づかひ帳ひとつ附る迄もない事なり。さる程に大晦日の暮方まで不斷の體にて正月の事ども何として埒明るぞと思ひしに、それ〳〵に質を置ける覺悟有て、身仕廻するこそ哀れなれ。一軒からは古き傘一本に、綿繰ひとつ、茶釜一つ、かれこれ三色にて銀一匁借て事すましける。又其隣にはかゝが不斷帶くはんぜこよりに仕かへて一すじ、男の木綿頭巾ひとつ、蓋なしの小重箱一組、七つ半の笈一

丁、五合升壹合升二つ、湊燒の石皿五枚、釣御前に佛の道具添て、取集て二十三色にて一匁六分借て年を取ける。其ひがし隣には舞々住けるが、元日より大黒舞に商賣を替ければ、五文の面、張貫の槌ひとつにて、正月中は口過すれば、此烏帽子ひたたれ大口はいらぬ物とて、二匁七分の質に置て、ゆるりと年を越ける。其隣はむつかしき紙子牢人、武具馬具年久しく賣喰にして、小刀細工に馬の尾にてしかけたる鯛釣もはやりやめば、今といふ今小尻さしつまりて、一夜を越べき才覺なく、似せ梨地の長刀の鞘をひとつ、質屋へもたしてつかはしけるに、こんなものが何の役に立べしと、手にしばしももたずなげ戻しければ、牢人の女房其儘氣色を替、人の大事の道具を何とてなげてそこなひけるぞ。質にいやならばいやですむ事なり。其上何の役にたゝぬとは爰が聞所じや。それはわれらが親、石田治部少輔亂に、ならびなき手がらあそばしたる長刀なれども、男子なき故にわたくしに讓り給はり、世に有時の嫁入に、對の挾箱のさきへもたせたるに、役にたゝぬものとは先祖の恥、女にこそ生れたれ、命はをしまぬ。相手は亭主と、取付て泣出せば、あるじ迷惑して、さま〳〵詫てもきかず。其うちに近所の者集りて、あのつれあひ牢人はねだりものなれば、聞つけ來ぬうちに是をあつかへと、いづれも亭主にさゝやき、錢三百と黒米三升にて、やう〳〵にすましける。扨も時世かな。此女もむかしは千二百石取たる人の息女、萬を花車にてくらせし身なれ共、今の貧につれて、無理なる事に人をねだるとは、身に覺て口おし。是を見るにも、貧にては死れぬものぞかし。すでに嗳ひ濟て、三百三升請取り、此黒米取て歸りて、明日の用にたゝぬといへば、幸ひこれに碓有とて、かしてふまして歸しける。是ぞ世にいふさはり三百なるべし。

【語釋】 ○質を置きける覺悟 「質を置く覺悟」の意 ○綿繰 綿繰車。綿の核を取去るのに用ひるもの。 ○觀世紙捻 紙のこよりをいふ。世阿彌が翁の烏帽子の懸緒に用ひたからの名だとも、又觀世又次郎が始めた故の名だともいふ。嬢が不斷帶を解いて質種とし、紙捻を帶の代りにしたのである。 ○七半の箒 箒に糸を通すのに、一よみ(四十本)を單位として數へる。七つなからは七よみ半即ち三百本の糸を通すべき箒をいふ。 ○湊燒 和泉國大鳥郡湊村から產する陶器。 ○釣御前 御前は門徒宗の語で持佛をいふ(俚言集覽)。釣御前は畫像などで壁に懸けつるすやうにした持佛。 ○舞舞 幸若舞のこと。立烏帽子・直垂・大口(大口袴の略稱)をつけて舞つた。 ○大黒舞 正月に大黒天の姿を摸し、面を被り打出の槌を携へて、門毎に歌ひ舞つて物を乞うた。萬歳などゝ同種の物乞である。 ○紙子牢人 紙子を着た貧乏な浪人。 ○小尻差詰り 窮迫して動きがとれぬやうになる事を、刀の鐺の詰つたのに譬へていふ語。 ○似せ梨地 梨地は金銀の粉末を蒔いて、梨子の果の皮の斑の如くした上に、漆を塗つて研ぎ出した蒔繪の一種。 ○何の役に立つべし 「何の役に立つべき」の誤。こんな誤りは當時の文章としては普通のことで、特に西鶴には多い。 ○世に有る時の嫁入 世に時を得て盛んに暮してゐた時の嫁入。 ○挾箱 棒を通して擔ふやうにした箱。 ○ねだり者 人をゆすつて物などねだり取る者。 ○あつかへ あつかふは仲裁する、調停するなどの意。 ○花車 上品、優美、華美などの意。 ○身に覺えて 自分の身のことゝして思うて見て。 ○碓 足で杵の端を踏んで搗くやうにした臼。碓臼。 ○さはり三百 諺。「さはり三百、行當り五百」ともいふ。「さはらぬ神に崇なし」の反對で、關係したために損すること。

貧乏人相手の質屋のさまは、窮迫した社會相を描くには誠に好題材である。西鶴は勿論これを大晦日の重要な題材として利用することを忘れなかつた。否彼はこゝばかりではない、「織留」の中には身に一つ著た古布子を脱いで、や

う〳〵一匁七分借り、丸裸になつて下帯ばかりで歸る男や、七十あまりの老婆が蚊屋の釣手二筋を質種に僅か十六文貸して貰ふ悲慘なさまを描いて居る。「永代藏」にも伏見の町はづれの小質屋の話がある。降りかゝる雨にぬれて古傘一本を六分、朝飯焚きすてたあとをまだ洗ひもやらぬ釜をさげて錢百文といふやうな哀れなさまが、こゝと殆んど同じ筆致で綴られて居る。かうした貧乏人らしい質種とその借り得た金高とを、一つ〳〵綿密に書き上げた所が西鶴の特色である。馬の尾で仕かけた鯛釣の小刀細工も、いかにも浪人の内職らしい。賣れてからが一つ二文か三文の儲けにすぎなかつたらうが、それさへ流行りやめば、それこそ一夜を越す事さへ出來なかつたにちがひない。似せ梨地の長刀の鞘一つとは、よく〳〵困つた果ての質種である。それで一文も貸して貰へぬとなれば、脊に腹はかへられぬ、元は由緒正しい武士の娘も、居直つてねだりがましい事も言はねばならぬ。誠に身に覺えて口惜しき次第だ。「これを見るにも貧にては死なれぬ物ぞかし」とは、時世につれてさもしく成下る人心を、道破して餘す所がない。

浪人の女房の質種から捲起した小さな波瀾、それも玄米三升錢三百のあつかひ、その上玄米は碓で搗かせて無事に收まつた。しかしこの一見喜劇に終つた場面には、所謂紙子浪人の最も悲慘な生活苦が、涙なくては讀まれない程深刻に描き出されてゐる事を忘れてはならない。

又牢人の隣に、年ごろ三十七八ばかりの女、親類とてもかゝるべき子もなく、ひとり身なりしが、五六年跡に男にはなれたるよしにて、髪を切紋なしのものは着ども、身のたしなみは目だゝぬやうにして昔を捨ず、しかもすがたもさもしからず、常住は奈良芋を慰みのやうにひねりて日をくらせしが、はや極月匆に萬事を手廻しよく仕廻て、割本も二三月迄のたくはへ、看かけには二番の鰤一本小鰯五枚鱈二本、かんばし、ぬりばし、紀伊國五器、鍋ぶた迄さらりと新く仕替て、家主殿へ目ぐろ一本、娘御に絹緒の小雪踏、お内儀樣へうね足袋一足、七軒の合借家へ餅に午房一把づつ添て、禮義正しくとしを取ける。人のしらぬ渡世、何をかして内證の事はしらず。其奥の相住に二人の女ありしが、一人は年も若く、耳も目鼻も世の人に替る事なくて、一生ひとり過して悲しく、鏡見るたびに我ながらよこでうつて、是では人も合點せぬ筈と、身の程を觀じける。又一人は東海道關の地藏に近き旅籠屋の出女せし時、木賃泊りのぬけ參りにつらくあたり、米など盗みし科にや、同じ世に報ひて、米の乏しき鉢ひらき坊主となりて、顔を殊勝らしく作り、心の外の空念佛、思へば心の鬼、狼に衣ぞかし。精進の事は忘れて、鰯の頭も信心からとて、墨染の麻衣を着ゆへに、此十四五年も佛のお影にて、毎朝修行に出しに、一町にて二ところ宛の手の中、二十所を集めて漸一合有、五十町懸廻らねば米五合はなし。道心も堅固になくては勤めがたし。過にし夏くはくらんをわづらひてせんかたなく、衣を一匁八分の質に置けるが、そののち請る事成がたく、渡世の種のつきける。人の後世信心に替る事はなきに、衣を着たる朝は米五合ももらはれ、衣なしには二合も勸進なし。殊に極月坊主こて、此月はいそがしきに取まぎれ、親の命日もわすれくれねば、是非もなく錢八文にて年をこしける。まことに世の中の哀れを見る事、貧家の邊りの小質屋、心よはくてはならぬ事なり。脇から見るさへ、悲しきことの數々なる年のくれにぞありける。

【語釋】 ○紋なし 模樣のない。即ち地味な着物である。 ○割木 小さく割つた薪。 ○看掛 正月に食ふ魚を吊しおく餉。

○二番の鰤　中位の大きさの鰤。大形のを一番といふに對した語。　○かんばし　神箸の義か。（俚言集覽には「カンは羹也」と解してゐる）。正月雑煮を祝ふ時に用ひる白木の箸をいふ。　○紀伊國五器　五器は食器をすべていふ稱だが、特に椀をいふ。これは紀州の根來塗（テゴロ）（堅牢なので知られてゐる）などの椀であらう。　○目ぐろ　鰹の小さいのをいふ。（俚言集覽增補に鮪（マグロ）の大阪詞とあるのは誤である）。　○うね足袋　晒木綿を絹糸で畦刺（ウネサシ）（糸で田畠のうねを作るやうに刺し縫ふこと）にした足袋。足袋は古くは多く革製であつたのだが、天和の頃から木綿のうね足袋が流行つたといふ。（我衣）。　○よこで　横手　○鯛　東海道五十三次の一で、名高い地藏がある。關の小まんと歌はれたのもこゝの出女であつた。　○出女　デヲンナ又はヨデヤレ。宿屋に居て旅人を相手とした飯盛女のこと。　○按參り　親がゝり又は主人に使はれてゐるものが、その父兄や主人に無斷で抜け出て伊勢參宮をすること。そしてこの按參りに對しては、父兄も主人もあとでこれを懲罰叱責してはならぬ習ひとなつて居た。この風習は江戸時代の初期から、後世に至るまで盛んにはやつた事で、傭人どもの一種の息抜きでもあつたのだらう。　○鉢開坊主　鉢を持つて米錢を乞ふことを「鉢を開く」といふ。即ちさうして門乞して歩く坊主のこと。　○狼に衣　諺。　○鯛の頭も信心から　これも諺。つまらぬものでも信仰すると靈驗があるとの喩へ。なほこゝでは精進を忘れて鯛の頭も食ふといふ意にかけてある。　○手の中　乞食や托鉢僧などに施す米錢をいふ。手の中に一つかみほどの米といふ義。　○くはくらん　霍亂。暑氣あたりをいふ。　○師走坊主　袈やつ〳〵しく便りなげなる者をさして師走坊主・師走浪人といふ（用捨箱）。坊主は盆には貰ひ物があるが、暮には誰も忙しくて構つてくれないので、特にみすぼらしいなりだといふのである。近松の夕霧阿波鳴渡の中の名文句にも、「紙子ざはりがあらい〳〵。これ引けば破れるつかめば跡に師走坊主、師走浪人」とある。

浪人の事から轉じて、その隣に住む一人の女と、又其奥に相住みしてゐる二人の女の話になつた。隣に住む卅七八の女は親類とてもなく、又かゝるべき子もなくて全くの獨身だが、五六年前に夫に死別した由で、髪を切り地味な着物を着て後家を立てゝ居る。しかし身嗜は昔と同じく相當にして、姿もかなり上品で美しい。暮し向きもこの合借家中では最も豊からしい。正月の準備も手廻しよく、家主以下の附届けまでちやんとすませて、禮義正しく年を取つた。「人の知らぬ渡世、何をかして内證の事は知らず」と、西鶴は妙に意味ありげな言葉を挿んでゐる。これこそ所謂浮世後家で、折々どこかの中宿（ナカヤド）で、好色な隱居や物好な若い男を相手に、生活費をかせぎ出してゐたのだらう。その奥に相住みしてゐる二人の女。一人は顔も十人並なのに、まだ定まる夫もないらしい。鏡見るたび我れながら、この容貌で結婚しないのを人が怪しむのも無理はないと、身の薄命を觀じて居る。そのあきらめ切つた淋しい女と反對に、もう一人はなか〳〵のしたゝか者。昔宿屋の飯盛女をしてゐた時、惡事をした報いで、今は僅かの報謝米しか貰へぬ鉢坊主となつてゐる。外形だけは神妙に尼の姿をしてゐるが、心には精進の事さへ忘れて、生魚も食ふ。しかし世の中は妙なもので、鰯の頭も信心からとて、こんな女でも墨染の衣着るおかげで、この十四五年は手の中を貰つて生活してゐる。尤もそれとても米五合貰ふには、五十町もかけ廻らねばならぬから、實はなま易しい事では勤まらぬのだ。ところが病氣で肝腎の商賣道具を質に置いてから、それを請け出せないで、渡世の種につき果て、錢八文で年を越すといふみじめなさまになつた。

この一篇は終始七軒の合借屋にとりまかれた質屋を中心にして居る點で、割合にまとまつた結構になつてゐる。三人の女の生活が、やゝ質屋から遠ざかつた話になつたが、それも最後に鉢坊主の衣の質入れで、再び中心に結びつけられた。そして「貧家の邊の小質屋、心弱くてはならぬ事なり」と、感慨を洩らしたが、それは前にあげた「織留」の

中でも、「質屋程世の憂き目見る物はなし、氣の弱き人の中々成るまじき家業なり」（卷五の三）と同じやうな事を言つて居る。

三　伊勢海老は春の梶

神の松、山草むかしより毎年かざり付たる蓬萊に、いせゑびなくては、有つけたるもの一色にて春の心ならず。其年によりて格別ねだんの高き事有て、貧家又は始末なる宿には、是を買ずに祝儀をすましぬ。此前も代々の年ぎれして、ひとつを四五分づつの賣買なれば、此替に九年母にて埒を明ける。是は大かた色かたちも似たりよつたりの物成しが、伊勢ゑびの名代に車ゑび、いかにしてもかり着のごとく、ない袖ふる人は是非もなし。世間をはつて棟のたかき内には、それほどの風があたつて、北雨吹の壁に筵こもも成がたし。澁墨の色付板包むなど、これらは奢にあらず。分際相應に人間衣食住の三つの樊の外なし。家業は何にても親の仕似せたる事を替て、利を得たるは稀なり。兎角老たる人のさしづをもるゝ事なかれ。何ほど利發才覺にしても、若き人には三五の十八ばらりと違ふ事數々なり。

【語釋】　○神の松　正月神棚に飾る松。　○山草　裏白の異名。これも正月の飾に用ひる。　○蓬萊　新年の祝儀として、三方にいろ〳〵目出度いものを盛つた飾物をいふ。日次紀事に「俗俗新年三方臺、置二海老・熨斗・昆布・榧・橙・鶴俵等一、先供二賀客一祝新年一、是謂二蓬萊一」とある。一に喰積ともいふ。伊勢海老は長壽を賀し、橙は代々續き榮えるの義にとつて祝ふのである。　○代々　橙　○年ぎれ　年ぎり。年によつて果樹など開花結實しない事があるのをいふ。後撰集雜一に「今までになどかは花の咲かずしてよそとせあまり年切はする」などゝあつて、古い言葉である。　○此替に　このかはりに。○無い袖振る　「無い袖は振られぬ」といふ諺を逆に言つたので、文意は「伊勢海老のかはりに車海老はへんだが、それでも無理にでも間に合せようとする人は仕方がない」。なほ袖は上の借着からの緣語。　○それ程の風が當つて　棟が高ければ高いだけ風の當りも多いのを言つたのだが、裏には世間を張れば張るだけ多くの物入りもある意を含ませてゐる。　○澁墨の色付板　澁に灰炭を合せたもので色を附けて塗つた板。壁板、板塀などに用ひる。「色付板包む」は「色付板で包む」の意。　○仕似せ　動詞。父祖の家業に似せて、それを受けついで行く義。今は專ら名詞としてのみ用ひられ、數代つゞいて來た老舗のことをいふ。こゝは「親が永年賣り込んだ商賣をやめて」の意。　○さしづ　指圖。　○三五の十八　三五の十五となるべきが十八になるといふので、目算の外るゝ事にいふ諺。下に本文の如く「ばらりと違ふ」といふ言葉を添へていふ場合が多い。

伊勢海老や橙の高價な事は、實際折々あつたものと見える。永代藏卷四にも、ある年伊勢海老と橙がきれて、江戸では海老一疋を小判五兩、橙一つを三兩づゝに賣つた。上方でもその年は海老二匁五分、橙七八分づゝしたが、春の物だといふので是非調べて蓬萊を飾つたといふ話がある。尤もそれは堺の商人氣質を示した一挿話にすぎなかつたのだが、こゝでは伊勢海老が一篇の主題になつて居る。

親のしにせた商賣を守らねば成功はむつかしい、とかく老人の指圖通りにしたがよいとは、西鶴が當時の商人たちの實際を見ての敎訓であつたらう。かういふ意味の言葉を、彼は屢々くり返してゐる。

さるほどに大坂の大節季、よろづ賓の市ぞかし。商ひ事がない〳〵といふは六十年此かた、何が賓あまりて捨たる物なし。ひとつ求れば其身一代子孫までも、讓り傳へる挽碓さへ、日々年々に御影山も切つくすべし。まして蓮の葉物、五月の甲、正月の祝ひ道具は、わづか朔日二日三日坊主、寺から里への禮扇、これらは明ずに捨りて世のつゐえかまはず、人の氣江戸につゞいて寛潤なる所なり。たとへ千貫すればとて、伊勢ゑびなしに蓬萊を餝りがたしと、家々に調ければ、極月二十七八日より所々の魚の棚に買あげて唐物のごとく次第にむつかしく、はや大晦日には髭もちりもなかりけり。浦の苫屋の紅葉をたづね、伊勢ゑびないか〳〵といふ聲ばかり、備後町の中ほどに永來といへる肴屋に、只ひとつ有しを一匁五分より付出し、四匁八分迄にのぞめども、中々當年のきれ物とて賓ざれば、使がはからひにも成がたく、いそぎ宿に歸りて海老の高き事を申せば、親父十面つくりて、われ一代のうちに高ひもの買たる事なし。薪は六月、綿は八月、米は新酒作らぬ前、奈良晒は毎年盆過て買置、年中現銀にして勝手のよき事斗、此以前父親の相はてられし時、棺桶ひとつ樽屋まかせに買かづきて、今に心がかりなり。伊勢ゑびがなふて年のとられぬといふ事有まじ。ひとつ三文する年、ふたつ買ふて算用を合すべし。ないもの喰ふと云年德の神は御座らいでもくるしうない事。四匁が四分にても、ゑびは沙汰のない事と機嫌わるし。され共内義男子とひとつになつて、世間はともあれ、鉾が始めて禮にわせて、伊勢ゑびなしの蓬萊が出さるゝものか。何ほどにてもそれを買と重て人をつかはしければ、はや今橋筋の問屋の若ひもの買取て、尤五匁八分にねだんは定めたれども、正月のいはゐの物、はしたがねは心にかゝると、錢五百やりてゑび取て歸る。其跡にて色々穿鑿すれ共、繪にかこふもなかりき。是に付ても此津のひろき事思ひあたりし。

【語釋】 ○大節季　小節季に對して大晦日をいふ。 ○蓮の葉物　盂蘭盆には供物を蓮の葉に包んで佛前に供へる。その供物のこと。それはあとですぐ流してしまふので、ほんの一時的のものだから、轉じてすべて粗製のものを蓮の葉物ともいふ。又一時の際物商ひを蓮の葉商ひといひ、浮氣な女を蓮葉(特に間屋女をいふ場合もある)といふのも同じ意から出たのである。 ○三日坊主　「僅か朔日二日三日まで位の僅かな間用ひるだけだ」といふのを、物にあき易く長續きのしない意の諺である「三日坊主」にかけてつゞけたのである。 ○寺から里への禮扇　寺から且那に配る禮扇で、ほんのしるしばかりの極めて粗製のものを用ひた。上の坊主の緣で寺を引き出し、そしてすぐ「寺から里へ」といふ諺を用ひたのはいかにも輕妙な筆致といはねばならぬ。 ○唐物　支那から舶來する品物。 ○掃も塵もなかりけり　普通なら「灰も塵もない」などいふべきを、海老だから掃と言つたのである。 ○浦の苫屋の云々　海老の赤いのを紅葉に見立てゝ定家の歌「見渡せば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋の夕暮」を用ひた洒落。 ○十面　澁面の宛字。 ○買かづきて　買ひかぶつて。 ○ない物喰ふ　無理をいふ意の諺。 ○年德の神　その年の吉方を司る神。 ○御座らいでも　御出でにならなくても ○禮にわせて　年禮にやつて來て。 ○はしたかね　端金。大意は五匁八分など〻分位の端がついてゐては、正月の祝物としては緣起が惡いからとて、錢五百文拂つたといふのである。錢と銀との相場は時によつて一定して居ないが、この頃であれば銀一匁がまづ錢八十文以下であらう。隨つて五匁八分なら四百五十文に當るのを、奮發して五百文で買取つたのである。 ○繪に書かうもなかりき　それを買取るのでない、只繪にかくために見せて貰ふだけの海老もなかつたといふ意か。 ○此津　大阪をさしていふ。津はすべて人の多く集まる都會をいふので、湊に限

ちない。京、江戸、大阪は江戸時代三ケ津と稱せられ、最も殷賑な都會であつた。

一つ求むればその身一代はおろか、子孫の代まで讃り傳へる挑碓さへ、御影山の石を切り盡す程に賣れるといふ素晴らしい購賣力。大阪の繁華はそれだけでも推し量られる。鐘一つ賣れぬ日はない大江戸の春と、まさに伯仲の殷賑である。伊勢海老ぐらゐはいくら高くても、どん〳〵賣れて行く筈だ。遂には舶來品でも求める程に、手に入れにくくなつて、魚屋を一軒々々尋ね歩かねばならぬ始末。やつとある魚屋で見つけるには見つけたが、四匁八分でも賣らぬといふのに、流石使の一存にも成りがたく手を引いた。米の値を標準にして、當時の物價を今の貨幣で換算して見ると、恰度この胸算用卷四に「一石につき四十五匁の相場の米を云々」と見えるから、四匁八分ではその十分一餘りの値になる。最近の米の値段ははつきりした事は知らぬが、まづ一石三十圓位とすると、四匁八分は三圓五十錢位に當らう。さて使が歸つてその由をいふと、親父は澁面作つて、自分の諸色安價買入法を述べ立てたつまりが、そんな高いものは買はなくてもよいといふ。無い物食はうといふ無理事言ひな歳德神は、來なくても宜いといふ權幕である。しかし内儀はさすが世間體を思ふ女氣、息子も親仁程にはせちべんでない當世氣から、母子一しよになつて、何程しても買つて來いと重ねて使をやつた。しかし世間は廣い。やつぱり何程しても求める人が外にもあつて、はや錢五百で賣れてしまつて、跡のまつり。それからは何處を探しても、もう手に入れる事は出來なかつた。

大阪人の寛濶さ、購賣力の旺盛さ。それがこの一節には、伊勢海老一尾が五百文で賣れたといふ事實によつて證明されてゐる。五百文といへばざつと五圓近くに當らう。今でも伊勢海老一尾に五圓出すといふ人は、あんまり有るま

い。

宿に歸りて此事を語れば、内義は後悔らしき貞つき、おやぢは是を笑ふて、其問屋心もとなし、追付分散にあふべきもの也。内證しらずして、さやうの問屋銀をかしかけたる人の夢見惡かるべし。蓬萊に海老がなふて叶はずは、跡の捨らぬ分別有とて、細工人にあつらへて、物の見事に紅ぎぬにて張ぬきにして、二匁五分にて出來けり。正月の祝儀仕廻ふて後、子共がもちあそびにもなるぞかし。人の智惠はこんな事ぞ。四匁五分を二匁五分で埒をあけ、しかも跡の用に立事と、おやぢ長談義をとかれしに、いづれも道理につまり、是程に身體持かためたる人の才覺は各別と、耳をすまして聞所へ、此親仁の母親、裏に隱居して當年九十二なれ共、目がよく足立ちて、面屋へきたり、きけば伊勢ゑびの高ひせんさく、けふまでそれを買ずに置事、去とては氣のつかぬ者共よ。そんな事で此世帶がもたるゝものか。いつとても年越の春あるときは、海老が高ひと心得よ、其子細は伊勢の宮々、御師の宿々、あるひは町中在々所々迄も、此一國は神國なれば、日本の諸神を家々に祭るによつて、海老何百萬と云限もなふ入事なり。毎年京大坂へくるは、此神々に備へたる跡の祭り也。此祖母はそれを考へ此月の中比に、髭もつかずに生ながらのを、四文づつにて貳つ買て置たと出されしに、皆々横手を打、御隱居にはひとつですみます物を、二つは奢つた事と申せば、こちに當所のない事はいたさぬ。定まつて畑午房五把、ふとければ、三把くるゝ人がある。それほどの物を返すそこへ、此ゑびにて、一匁が午房四文がものでますます合點じや。今に歳暮ものもてこぬが爰の仕合。去ながらいかに親子の中でも、たがひの算用あひは急度したがよい。海老がほしくは、五把もたして取におこしや。どの道にも午房に替る伊勢ゑび、いづれ祝ひの物

に是がなふてもよいはといふてはおかれぬものじや。慾心でいふではなけれ共、慾じて五節句の取やり、先から來た物を能々ねうちして、それ程に見えて少づつ徳のいくやうにして返す物じや。毎年太夫殿から御祓箱に鰹節一連、はらや一箱、折本のこよみ、正眞の青苔五把、かれこれこまかにねだん付て二匁八分がもの申請て、銀三匁御初尾上れば、高で二分あまりて、お伊勢樣も損のゆかぬやうに此家三十年仕來つたに、そちに世をわたしてから、銀壹枚づつ上らるゝ事、いかに神の信心なればとていはれざる事なり。太神宮にも、算用なしに物つかふ人うれしくは思しめさず。そのためしには散錢さへ、一貫といふを六百の鳩の目を拵らへ置、宮めぐりにも隨分物のいらぬやうにあそばしける。さる程に慾の世の中、百二十末社の中にも、錢の多きは恵美酒、大黒、多賀は命神、住よしの船玉、出雲は仲人の神、鏡の宮は娘の顔をうつくしうなさるゝ神、山王は二十一人下々をつかはさしやる神、いなり殿は身體の尾が見えぬやうに守らつしやる神と、宮すゞめ聲々に商ひ口をたゝく。皆是さし當つて耳よりなる神なれば、これらにはお初尾上て、其外の神のまへは殊勝にてさびしき。神さへ錢もうけ貝はならぬ世なれば、まして人間油斷する事なかれ。伊勢より例年諸國へ旦那廻りの祝儀狀、大分の事なれば、能筆に手間賃にて書せけるに、一通一文づつにて、大晦日から大晦日迄書くらして、同じ事に氣をつくし、年中に二百文取日は一日もなし。神前長久民安全、御祈念のため口過のため也。

【語釋】 ○分散　破産。身代限り。 ○問屋銀　問屋に借しつける銀。 ○張抜　張子と同じ。 ○年越の春ある時　年越は節分のこと。 節分が元日以後にある時。 ○御師　伊勢・熊野・大山などの下級の神職の稱で、專ら參詣の人々を宿させたり、案内したりするのを業としてゐた。 ○跡の祭　詭。 ○鶴もつかず　「鶴も縮がす」であらう。鶴の折れたのをついだりしてない事。 ○太夫殿　御師のこと。 ○御祓箱　御祓の札を納めた箱。 ○はらや　伊勢白粉。水銀に明礬鹽を和して製したもので伊勢の射和地方で多く產し、伊勢名物の一となつてゐた。 ○折本の暦　昔の伊勢暦はすべて折本で黑い表紙をつけてあつた。 ○正眞　シヤウジン、雜り物のない。 ○初尾　初穗の宛字。 ○銀一枚　平たい楕圓形をした判銀で、その一枚は四十三匁に相當する。多く贈答の場合に用ひた。 ○いはれざる事　いらぬ事。無用の事。 ○鳩の目　薄い鉛の小錢で、伊勢大神宮に參詣する人々が、散米の代りに蒔いたもの。その十目を以て錢十文にあてた。伊勢の宮錢ともいふ。永代藏四にも「宮廻りの蒔錢に鳩の目とてをかしげなる鉛錢を百といひて六十つなぎにして」とある。 ○多賀　本社は近江國犬上郡多賀にあつて諸册二神を祀る。俗に長壽を守る神として信ぜられてゐる。 ○船玉　船靈。俗に住吉の神は航海の安全を守る神、即ち船靈だといふ。 ○宮雀　散錢などで衣食してゐる神職を卑しめていふ語。 ○耳より　自分に都合のよい話などには、自然その方へ耳が引寄せられるといふ意から、耳寄りといふ。 ○殊勝にて淋しき　散錢を貪らないので殊勝と評したのである。「淋し」と終止形たるべき所を、「淋しき」と連體形にしたのは、文法上誤りではあるが、例の西鶴一流の破格。 ○旦那廻りの祝儀狀　毎年伊勢講などで參詣に來て泊る得意客へ、御師から挨拶のためやる手紙。永代藏卷四、仕合せの種を蒔錢の條にも「その外末々御師手前有難のなき人は、諸國旦那まはりのお定まりの狀一つ錢一文づつにして、これを書いて年中妻子はどくむ人何百人か其限り知られず」とある。 ○氣をつくし　退屈し。

海老が遂に手に入らなかつたので、内儀は悔しさうな顏つき、それは普通の人情である。ところが親仁はさすがこれ程の財產を作り上げたとけの分別で、「そんな贅澤な買物をする問屋はあぶないものだ。今に破產するにきまつて

ゐる。そんな内輪のくらし向きを知らないで。銀をかしつけた人の夢見が悪からう」と、五百文で買つた問屋の内證を批判し、張抜の海老といふ新工夫で、みんなを感心させた。しかし上には上がある。この親仁の母親は、海老の高直なのを未然に察して、はや師走の中頃四文の海老を二尾までも買つて置いた。そして母屋の者共は、「今日までそれを買はずに置く事、さりとては氣のつかぬ者どもよ」と一喝を食つた上、そんな事では世帯が持てぬと叱られて、二匁五分の張抜細工に得意となつた親仁も、今は一言もない。母親は海老の高い子細を諄々と說いた後、さて今度は一つですむ海老を二つ迄買入れておいた理由を說明した。「勿論あてのない買物などはせぬ。歲暮に毎年きまつて牛蒡五把、太ければ三把くれる人がある。その返禮としてそれ相當のものをやるべきだが、そこへこの海老を返禮にするので、つまり一匁の牛蒡に對して四文の物で禮をすますつもりだ」といふ。誠に水も洩らさぬ周到な用意である。だが幸ひまだその牛蒡の歲暮を持つて來ぬから、母屋は餘つた海老を讓つて貰へるといふ仕合せ。親子の間ではあるし、高が四文だ。勿論只で呉れるのかと思ひきや、「さりながらいかに親子の中でも、互の算用合は念度したがよい」と出られた。こゝにこの母親の性格が最も餘蘊なく描き出されてゐる。

母親はさらに物の贈答についての心得を細々と示した。要するに先方から來たものの値段を、よく〳〵評價して、その位の値段に見えて、しかも實は少々安いものを返すべきである。これが原則だ。その一例として伊勢の御師からの毎年の贈物に對し、三匁の初穗を上げる位が恰度相當だと數へる。差引二分の御賽錢とは、お伊勢樣も實は我を折る事だらう。勘定高い親仁すら、世を渡されてからは銀一枚づゝを上げてゐたのだ。銀一枚は四十三匁に當る。この母親にして見れば、「いかに神の信心なればとて、いはれざる事なり」と憤慨するのは、尤もな事である。

四、鼠の文づかひ

毎年煤拂は極月十三日に定めて、且那寺の箒竹を祝ひ物とて、月の數十二本もらひて、煤を拂ての跡を、取葺屋根の押へ竹につかひ、枝は箒に結せて、塵もほこりもすてぬ隨分こまかなる人有ける。過し年は十三日にいそがしく、大晦日に煤はきて、年に一度の水風呂を燒れしに、五月の粽のから、盆の蓮の葉迄も段々にため置、湯のわくに違ひはなしとて、こまかな事に氣をつけて、世のつゐへせんさく人に過て利發がほする男有。同じ屋敷の裏に隱居たてゝ、母親の住れしが、此男うまれたる母なれば、其しはき事かぎりなし。ぬり下駄片足なるを水風呂の下へ燒時、つく〳〵むかしを思ひ出し、まことに此木履は、われ十八の時此家に嫁入せし時、雜長持に入て來て、それから雨にも雪にもはきて、羽のちびたるばかり、五十三年になりぬ。我一代は一足にて埒を明んとおもひしに、惜や片足は野ら犬めに喰へられはしたになりて、是非もなくけふ煙になす事よと、四五度もくりことをいひて、其後釜の中へなげ捨られ、今ひとつ何やら物思ひの風情して、泪をはら〳〵とこぼし、世に月日のたつは夢じや。明日は其むかはりになるが、惜い事をしましたと、しばしなげきのやみがたし。

【語釋】 ○煤拂　十三日は鬼宿に當つて吉日だといふので、古くこの日に煤拂をする習はしがあつた。○取葺屋根　屋根にそぎ板を並べて石や丸太等を押へにしたものをいふ。和漢三才圖會八十一「以三薄層二葺者名二板屋一、或名二取葺一上壓二小石一。」○水風呂　普通の風呂のこと。据風呂の訛だとも、蒸風呂に對しての名だともいふが、或は茶湯の風爐に對して言つたのではあるまいか。○つゐへぜんさく　費詮鑿。少しでも無用の入費がないかと細かに詮義立てして氣をつける事。○雜長持　衣裳などを入れる長

持に對して、種々の雜具を入れる長持をいふ。　○羽のちびたる　羽は箒の宛字。　○むかはり　一周年をいふ。

始めから吝嗇なさまが、かなり誇張した筆で書かれて居る。年に一度しか立てぬ水風呂を焚くのにさへ、一年中の廢物を利用しようといふ細かい氣のつけ方だ。誠に世の費詮鑿に利口ぶつた顏する男だけの事はある。この話を聞いたゞけでも、大ていの者は我を折る事だらうが、この男生んだ親と來ては、木履一足を五十三年間履いて、それでなほ惜しがつて居るのだ。まづこの一つの述懷話で、母親の面目を遺憾なく讀者に示した。だがつゞいて何やら物思ひの風情して、「世に月日のたつは夢ちや」と言ひつゝ、涙をはら〳〵と流した一條となると、流石この吝い母親でも、無常は觀じて居るのだなと、一寸憎めない氣持になる。

折ふし近所の醫者水風呂にいられしが、先以目出たき年のくれなれば、御なげきをやめさせ給へ。してそれは元日にどなたの御死去なされたと尋られしに、いかに愚智なればとて、人の生死を是程になげく事では御座らぬ。わたくしの惜むは、去年の元日に堺の妹が禮に參つて、年玉銀一包くれしを、何ほどかうれしく、惠方棚へあげ置しに、其夜盗まれました。そもや勝手しらぬ者の取事では御座らぬ。其後色々の願を諸神にかけまする共其甲斐もなし。又山伏に祈を賴みましたれば、此銀七日のうちに出ますれば、だんの上なる御幣がうごき、御灯が次第に消ますが大願の成就せししるしといひける。あんのごとく祈り最中に御幣ゆるぎ出、ともし火かすかになりて消ける。是は神佛の事、末世ならず有がたき御事と思ひ、お初尾百二十上て、七日待ども此銀は出ず。さる人に語りければ、それは盗人においといふ物なり。今時は仕かけ山伏とて、さま〳〵ごまの壇

にからくりいたし、白紙人形に土佐踊さすなど、此まへ松田といふ放下しがしたる事なれ共、皆人賢過て結句近き事にはまりぬ。其御幣のうごき出るは、立置たる岩座に壺有て、其中に鰌を生置ける。珠數さら〳〵と押捫で、東方に西方にと、とつかう錫杖には佛壇をあらけなくうてば、鰌が是におどろき上を下へとさはぎ幣串にあたれば、しばらく動きてしらぬ目からはおそろし。又灯明は臺に砂時計を仕くはし、油をぬき取事ぞと、此物がたりを聞から、いよ〳〵損のうへの損をいたした。我此年まで錢一文落さずにくらせしに、今年の大晦日は、此銀の見えぬゆへ胸算用ちがひて、心がかりの正月をいたせば、よろづの事おもしろからずと、世の外聞もかまはず大聲あげて泣れければ、家内の者ども興をさまし、我々疑るゝ事の迷惑と、心々に諸神にきせいをかけける。

【語釋】　○何ほどか嬉しく　どんなにか嬉しく思つて。　○惠方棚　惠方神即ち歲德神を祭つた棚。　○だんの上　壇の上。　○御初尾百二十　御初穗百二十文。普通神佛の燈明料として上げる金は、十二燈又は十二銅といつて十二文が常であつた。これは特別の祈だから丁度その十倍上げたのであらう。　○盗人におい　おいは追錢の略。盗人にあとから更に追加して錢を與へるといふ意で、損の上に損を重ねるとか、敵の方に都合よくしてやるとかいふやうな意に用ひる諺。　○しかけ山伏　詐欺を働く山伏。　○ごまの壇　護摩の壇。　○からくりいたし　からくりを仕かけて。　○土佐踊　土佐の盆踊から出た踊の一種。　○放下師　もと田樂に附屬した雜伎で、輪鼓・品玉などを演ずる法師のことを放下僧といひ、寺社の境内や巷街の辻々などでその藝を行つた。後それが俗人に移つてから一般に放下師と稱するやうになつた。即ち手品師の事である。放下の名は佛語から出たので、諸緣を放擲して無我に入るの意だといふ。即ち一切の妄念を絶つてその術を行ふからである。　○近き事にはまりぬ　手

近い事でだまされるものだ。はまるは他の術中に陥る、即ち欺かれるといふ意。 ○岩座 佛像の臺座が岩石の形をしてゐるから、それを岩座といひ、又一般に臺となつてゐる部分をもいふ。こゝは御幣を立てる臺。 ○東方に西方に 神おろしをする祈禱の文句である。「東方に降三世明王、西方に大威德明王」などゝいふのが常である。 ○とつかう 獨鈷。 ○あらけなく 荒っぽく。 ○仕くはし 仕込んで。 ○きせい 所誓。

「明日はそのむかはりになるが、惜しい事をしました」といふ歎きには、この醫者でなくとも、誰れしも「してそれは元日にどなたの御死去なされた」と尋ねずには居られまい。しかも世にも稀なこの吝い母親に對しては、世間並みの推量などは決してその正鵠を得る事は出來なかつた。いかに愚痴でも、人の生死など問題にして、これ程に悲しむ事はないとの御挨拶には、そのふて〳〵しさを憎むよりも、先づ啞然として度膽を抜かれずには居れない。かうなると超人間的な嚴肅ささへ感ずる。さて母親のしばしやみ難かつた悲しみの原因は、年玉銀一包の紛失である事が分つた。かくてこの老いた守錢奴――といふよりは寧ろ拜錢宗の信者――は、年玉銀の行方を探るために、更に一層の損をした話を、遺恨骨髓に徹すると言はんばかりに、こま〳〵と物語つた。

仕懸山伏の話は、延寶八年刊の笑話集「囃物語」に見えてゐる。一寸その一節を抜抄して見よう。

御幣を大きなる德壺に立て、不動の御前にすゑ置き、さて山伏壇上に打上りて施主に向ひて申しけるは、最前も申す如く本復あれば、祈る内に此の御幣ゆるぎ申す程に、心を付けて見給へと言渡し、(中略)もみにもうで祈りければ、暫く有て德壺にさし入れし御幣ゆら〳〵と動ぎければ、願成就目出度しとて、山伏も施主も感涙を流し悦びけり。(中略)德壺にさし置きし御幣を抜出さうとしけるが、幣串が長さに、過つて德利をこかしたり。とくりの中より鯰二升許出でゝ、護摩の壇をはね廻る。施主もあきれ山伏も赤面して途方にくれた。よく〳〵思案して見れば、供物色々有る中に、鹽を山の如く臺に盛つて供へし有り。最前供物をまく時、この鹽をとくりの中へ蒔入れしにより、鯰が上を下へ返しける時、御幣ゆる〳〵とせしなり。

西鶴はこの話をもとにして書いたものか、それとも當時實際さうした仕懸山伏があつたのを聞いて材料にしたのか分らぬが、とにかくこゝは母親の吝嗇さよりも、この詐欺手段に興味の中心がうつゝて居る。園水の「畫夜用心記」や、月尋堂の「儻偶用心記」などの俑を作したものは、やはり西鶴であつた。

大かた煤もはき仕廻て、屋ねうらまであらためける時、棟木の間より杉はら紙の一包をさがし出し、よくよく見れば隱居の尋ねらるゝ年玉銀にまぎれなし。人の盗まぬものは出まするぞ、さるほどに悪ひ鼠目といへば、お祖母中々合點せられず、是ほど遠ありきいたす鼠を見た事なし。あたまの黑ひねづみの業、是からは油斷のならぬ事と、疊たゝきてわめかれければ、藥師水風呂よりあがり、かゝる事には古代にもためしあり。仁王三十七代孝德天皇の御時、大化元年十二月晦日に、大和の國岡本の都を難波長柄の豐崎に移させ給へば、和州の鼠もつれて宿替しけるに、それ〳〵の世帶道具をばはこぶこそおかしけれ。穴をろくめし古綿、鳶にかくるゝ紙ふすま、猫の見付けぬ守り袋、鰤の道切るとがり杭、桝おとしのかいづめ、油火を消板ぎれ、鰹節引てこまくら、其外娌入の時の駄斗、ごまめのかしら、熊野參りの小米つと迄、二日路ある所をくはへてはこびければ、まして隱居と面屋、わづかの所引まじき事にあらずと、年代記を引て申せど、中々同心いたされず。口がしこくは仰らるれ共目前に見ぬ事はまことにならぬと申されければ、何ともせんかたなく、やう〳〵案じ出し、長崎水右衛門がしいれたる鼠つかひの藤兵衛をやとひにつかはし、只今あの鼠が人のいふ事を聞入て、さまざ

きの藝つくし、若ひ衆にたのまれ戀の文づかひといへば、封じたる文くはへて跡先を見廻し、人の袖口より文を入ける。又錢一文なげて是で餅かふて來いといへば、錢を置て餅くはへて戻る。何と〳〵我を折給へといへば、是を見れば鼠も包がねを引まじきものにあらず、さてはうたがひはれました。去ながらかゝる盗み心ある鼠を宿しられたるふしやうに、まん丸一年此銀をあそばして置たる利銀を、急度おもやからすまし給へといひかゝり、一割半の算用にして、十二月晦日の夜請取、本の正月をするとて、此祖母ひとり寢をせられける。

【語釋】 ○杉原紙 播磨國揖保郡杉原村から產する紙。來書の一種で薄く柔かい。 ○鼠目 鼠奴。 ○遠ありき 遠歩き。 ○あたまの黑い鼠 何か物が紛失した時など、鼠でなく人間が犯した事だといふ場合に、婉曲に「頭の黑い鼠だらう」といふ。 ○仁王 人皇 ○大化元年云々 日本書紀卷二十五に「十二月(大化元年)乙未朔癸卯、天皇遷二難波長柄豐埼一、老人等相謂之曰、自レ春至レ夏、鼠向二難波一遷都之兆也」とあるから、これは全くの出鱈目ばかりではない。 ○穴をくろめし くろめるとは體裁よく表面をつくろふ意。鼠の通ひ路となつてゐる穴を、一寸分ぬやうに古綿をつめて胡魔化しておくのである。 ○桝落し 桝を伏せて臺などにたてかけ置き、その下に鼠の餌を入れ、鼠がそれを食ひに桝の下へはひつた時、桝が下に落ちかゝつて、鼠を蓋ひ捕へるやうにしかけたもの。 ○かいづめ 桝がぴつたり伏さつてしまはないやうに支へるもの。支へ。 ○てこまくら 挺枕。 ○嫁入 鼠の嫁入は御伽噺などでよく知られてゐる事だから言つたのである。 ○熊野參り 紀州熊野權現に參詣すること。 ○面屋 母屋。 ○年代記 歷史上特に異事奇聞を年代順に列擧した書物。 ○長崎水右衛門 江戸鹿子(貞享四年刊)によれば、江戸湯島天神前に住んで居て、かういふ獸などに藥を仕込むのに妙を得た人であつたといふ。 ○しいれたる 仕込んだの意。 ○ふしやう 不祥。 災難不運といふ程の意。 ○一割半の算用にして 一割半の利息を附けて受取ることにしたのである。

大體煤拂も終つた頃、偶然棟木の間からおばゝの年玉銀は發見された。「人の盗まぬものは出まするぞ」とは、家內の者がおばゞに對して、少々あてつけがましい皮肉であつた。だがそこで直ぐ胃を脫いで降參するやうなおばゞではなかつた。「憎い鼠め」などゝいふやうな事では中々承知しない。どうでも頭の黑い鼠の所業にちがひないと横車を押し出した。醫者殿は少しは物の本も讀み嚙つて居るだけに、「人皇三十七代云々」と鹿爪らしく年代記まで引いての考證ぶり。これではいかなお祖母も納得するだらうと思ひきや、「目前に見ぬ事は實にならぬ」と劍もほろゝに一蹴した。遂に仕方なく鼠使ひの藤兵衛を雇つて、鼠の賢しさを實際に示して見せる外はなくなつた。そしてお祖母も成程これには我を折つた。しかしこの有力な立證も、彼女が年玉銀發見と共に忽ち思ひついたであらう利息計算の慾念は、それが眞の鼠の仕業だらうが、又頭の黑い鼠の罪であらうが、少しもこれを變ぜしむべき理由とはならなかつた。「さては疑ひ晴れました」と言つた口の下から、「しかしさうした盗み心のある鼠を宿させたのが不運だとあきらめて、滿一ケ年この銀を遊ばせて置いた利銀を、たしかに母屋から支拂つてくれ」と言ひがゝりをつけて、遂に要求過りの利息を受取つた。そして「これで本當の正月が出來る」と言つて、獨寢をした。

この一篇は吝嗇な老母の性格が、誇張した筆で最も巧みに描き出されてゐる。仕懸山伏や鼠の藝は、少々際物をあて込んだやうな傾もあるが、勿論全體の結構に何等破綻を來す程の事ではない。醫師の年代記も史實によつて居るといふものゝ、穴をくろめた古綿以下、鼠の運ぶ品々の羅列には、西鶴ならではと思はれる才の働きが見られる。さうして何よりも最後の「この祖母獨寢をせられける」の一句は、全體のこゞめをさした言葉として、實に言ひ難い妙趣をもつて居る。寸鐵人を刺すと言つたゞけではなほ言ひ足りない。金錢の外には何物も構はない老母の風貌が、この

言葉によつてどんなに味ひ深く描き出されて居るだらう。一體西鶴の文には、最後にかうした一語千金的の文句が頗る多い。深く味はふべきである。

胸算用　大晦日は一日千金　卷二

目　錄

一　銀壹匁の講中
　○長町につゝく嫁入荷物
　○大晦日の祝儀紙子一疋
二　詭言も只はきかぬ宿
　○何の沙汰なき取あげ祖母
　○大晦日のなげぶしもうたひ所
三　尤始末の異見
　宵寐の久三がはたらき
　大晦日の山枡の粉うり
四　門柱も皆かりの世

一　銀一匁の講中

人の分限になる事、仕合といふは言葉、まことは面々の智恵才覺を以てかせぎ出し、其家榮ゆる事ぞかし。是福の神のゑびす殿のまゝにもならぬ事なり。大黑講をむすび、當地の手前よろしき者共集り、諸國の大名衆への御用銀の借入の内談を、酒宴遊興よりは增たる世の慰みとおもひ定めて、寄合座敷も色ちかき所をさつて、生玉下寺町の客庵を借りて、毎月身體僉議にくれて、命の入日かたぶく老體ども、後世の事はわすれて、只利銀のかさなり、富貴になる事を樂しみける。世に金銀の餘慶有ほど、萬に付て目出たき事外になけれ共、それは二十五の若盛より油斷なく、三十五の男盛にかせぎ、五十の分別ざかりに家を納め、惣領に万事をわたし、六十の前年より樂隨居して、寺道場へまゐり下向して、世間むきのよき時分なるに、佛とも法ともわきまへず、欲の世の中に住り。死ば萬貫持ても、かたびら一つより皆うき世に殘るぞかし。此寄合の親仁共、二千貫目より内の分限壹人もなし。

（語釋）　○大黑講　大黑天を尊信する仲間の會。　○手前この手前は手前者などいふ時の手前と同意で、一家の經濟狀態をいふ。手前宜しき者とは即ち金持ちのこと。　○色近き所　遊廓などに近い場所。　○入日かたぶく「身體僉議に日を暮らして入日傾

朱雀の鳥おどし　大晦日の喧嘩星殿

く」といふのを、晩年の意にかけて用ひた。　○餘慶　餘計、深山。　○道場　佛道修行の場所で、即ち寺をいふ　○まゐり下向　下向は神佛に參詣して歸る事。しかしこゝは「參り下向」で一語になつてゐるので、要するに寺に參ること。全體の文意は「寺などに參るのが、世間體のよい時分だのに」。　○かたびら　經帷子。　○一つより　浮世に云々　一つよりの下に「外は」の二字を補つて見るべし。

人が金持になるのは、幸運だといふのは只言葉だけの事で、實は各自の才能によつて働き出すのだ。それは福神惠比須殿の心のまゝにもならぬ事である。西鶴はかう言つて先づ果報は寢て待て主義のなまけ者を戒めた。そして大阪の金持連によつて組織された大黒講の集會ぶりを紹介した。その會場も下寺町の客庵といふ物わびた所を借りて、諸大名への御用金貸附け上の內相談などするのを、普通人の酒宴遊興よりも面白い慰みと思つてゐる。そこへ毎月寄合つては終日人々の財產の評價などして暮し、もう老體の者どもが後世の事を忘れて、只金のふえる事だけ樂しんでゐるのだ。だが物にも程度がある。これでは全く金錢の奴隸に過ぎない、死ねば巨万の富を持つて居ても、經帷子一枚の外は冥途に持つて行けないのだと、西鶴は次に二段目の戒めを說いた。しかし勿論かうした戒めを說きすゝめるのが目的ではない。この大黒講會員の話しを緒として、壹匁講會員の徹底した吝い詮鑿ぶりを物語らうといふのが眼目である。

又近年我々がはたらきにて、わづかなる身體の者共金銀を仕出し、二百貫目三百貫目あるひは五百貫目までの銀持二十八人かたらひ、壹匁講といふ事をむすび、毎月宿も定めず、一匁の仕出し飯をあつらへ、下戸も上戸も酒なしに、あそび事にも始末第一、氣のつまるせんさく也。朝から日のくるるまで、よの事なしに身過の沙汰、中にも借金の慥かなる借手を吟味して、一日も銀をあそばさぬ思案をめぐらしける。此者共が手前よろしく成けるはじめ、利銀取込ての分限なれば、今の世の商賣に銀かし屋より外によき事はなし。然れども今程は見せかけのよき內證の不埒なる商人、大分かりこみこしらへてたふれければ、思ひもよらぬ損をする事たび〳〵也。されども人を氣づかひして、金銀借ずにも置れず、隨分內證を聞合せ、此仲間はたがひに樣子をしらせ、向後は借入をいたすべし。いづれもかく言合すからは、出しぬきにあはし給ふな。さあらば各〻心得のために、當地で定まつて銀かる人をひとり〳〵書出し、こまかに詮議して見るべし。これ尤なり。先北濱で何屋の誰、財寶諸色かけて七百貫目の身體といひ出れば、其見立は各別、八百五十貫目の借銀といふ。此有なしの相違に、一座の衆中肝をつぶし、爰が大事のせんさく、兩方のおぼしめし入とくと承はり、人々の心得のためとぞ聞ける。先分限と見たる所は、去々年の霜月に娘を堺へ緣組せしに、諸道具今宮から長町の藤の丸のかうやく屋の門までつゞきし跡から十貫目入五つ、青竹にて揃への大男にさし荷はせ、其まゝ御祓の渡るごとし。外にもあまたの男子あれば、餘慶なくて娘に五十貫目は付まいと思ひまして、いやといふものを無理に、此三月過に二十貫目預けましたといはるゝ。扨々お笑止や、其二十貫目が一貫六百目ばかりで戻るで御座ろといへば、此親仁顏色かはつて、箸もちながら集め汁喉を通らず、今日の寄合に口おしき事を聞けると、樣子をきかぬ內から泪をこぼされける。とてもの事に其內證が聞たし。されば其聟どのかたも、よく〳〵せはしければこそ、芝居並の利銀にて何程でも借らるゝなり、此利をかきて、芝居の外何商賣して胸算用があふとおぼし

めすぞ。十貫目箱壹つは、かなものまでうつて三匁五分づつ、十七匁五分で箱五つ、中には世間にたくさんなる石瓦、人の心ほどおそろしきものは御座らぬ。兩方の外聞、見せかけばかりに内談と存ずる。われらは其箱を明て、正眞の丁銀にしてから、まことにはいたさぬ。あの身體の敷銀は、二百枚も過もの、こしらへなしに五貫目。何と各われらが沙汰する所が違ふたか。先あれには一兩年二貫目ばかり預けて見て、それに別の事なくば、又四貫目程五六年もかして、慥かなる事を見とゞけての二十貫目といへば、一庫是尤と同音に申。段々利につまつて、此親仁歸りには足腰立ずしてなげき、我此年まで人の身體見違へし事なきに、此たびはふかくなる事をいたしましたと男泣にして、何とぞ御分別はないか〳〵とあれば、時に最前のせちがしこき人のいふは、千日千夜御思案なされても、此銀子無事に取かへす工夫は、只ひとつより外になし。此傳授上上の紬一疋ならば、慥かに取かへして進上申といへば、それは〳〵中わたまで添まして御禮申さう、何とぞ賴むといふ。

（語釋）　○我々がはたらきにて　めい〳〵自分々々の働きで。即ち親讓りの身體でないのをいふ。　○一匁講　一匁會といふ種の寄。　○仕出し飯　料理屋から仕出す飯。　○よの事　餘の事。　○今程は　今時は、此頃は。○内證の不埒なる　内わの經濟狀態は埒が明かず行詰つてゐる。　○倒れければ　倒産即ち破産するから。　○諸色かけて　諸道具まで合せて。　○其見立は各別　その見立ては格別のちがひがある。各別は格別。　○藤の丸　大阪で名高い膏藥屋であつた。　色道懺悔男（寶永四年刊）卷之三に、「先づ日本で名膏藥と申すは、江戸に兜膏藥、長崎に白石膏藥、筑紫に板阪、高野山に大師御夢想待乳膏藥、京大阪は藤の丸云々」と見える。　○御祓　御祓祭の略。　まるで御祓祭の行列が練つて行くやうだとの意。　○御笑止や　笑止は今「氣の毒」といふべき場合に用ひる言葉で、他の不幸災難に對していふ。をかしいの意ではない。　○集め汁　大根・牛蒡・芋・豆腐などいろ〳〵入れた汁をいふ。　○芝居並の利銀　芝居興行のために借る金は、當時最も高利であつたのである。　○利をかきて　利息を計上する事を利をかくといふ。こゝの文意は「こんな高い利子を拂つて借つた金では、芝居を興行する外、何商賣をして豫算が立つと考へるか」。○かなものまでうつて　金物まで打つて。金具まで打つて全體の箱だけの値段は三匁五分づゝだとの意。　○見せかけばかりに云々　表向金があるやうに見せかけだけしようと、豫め算方と内々相談しあつたものだと思ふ。　○丁銀　海鼠のやうな長楕圓形に鑄た銀貨、凡そ四十匁位あつた。「正眞の丁銀にしてから誠には致さぬ」とは、たとひ本當の丁銀を入れてあつても、どうせそれはその一日限りにどこからか借りて來た金だらうと言ふのである。　○敷銀　持參金。　○二百枚　銀一枚は四十三匁だから二百枚では八貫六百匁になる。こゝの文意は、「二百枚でも身體には過ぎてゐるので、まづ支度無しに現金五貫目が相當の持參金だらう」。　○利につまつて　利は理の誤。　○ふかく　不覺。　○中綿　衣服の中に入れる綿。

大黑講はいくら吝いといつても、さにかく二千貫目以上の財産家ばかりの寄合だ。さすがに會場だけでもきめて借りうけて居る。壹匁講員といふのは小商人からたゝき上げた連中だけにもつと世智辛い。毎月會場も定めずしかも一匁の辨當飯で酒無しにやらうといふ儉約ぶりである。そして持ち出される話といへば、もとより商賣上の沙汰ばかり、就中最も確實有利な金の貸附方法を評議する事が第一の話題であつた。で結局金を借る商人達の實際の經濟狀態を調査して、それを此一匁講員相互に知らせ合つて、貸金の增殖をはからうといふ事になつた。いはゞ今の興信所見たやうな仕事を、この會でやらうといふのである。そこで早速その詮議にとりかゝつた。先づ北濱の何某が錦玉にあ

がつた。一人は總財産七百貫目と評價したのに、他は負債八百五十貫目と見立てた。差引き千五百五十貫目といふ大した評價ちがひである。あまりの相違に一座の人々も、將來參考のため、その二人が推定の根據とした點を聞かうといふ事になつた。財産をプラスと見立てた方は、娘の嫁入の際の持參金の金額から割出したといふ。マイナスと見拔いた方は、その敷銀は全く見せかけだけにすぎないと言つて、前者の粗忽を笑つた。さう聞いて一夕會員たる程の者が足腰立たずして敷いたのは尤もの事であつた。彼にとつては何物にもかへ難い金錢である。いかなる手段でもよい、貸附けた二十貫目が無事に返る工夫はあるまいかと頼んで見た。さきの世智賢く見拔いた男は、得意然として、上々の紬一疋御禮にやるならその工夫を傳授してやらうといふ。何が扨その上中綿まで添へて差上げるとの返事に、遂々その唯一つしかないといふ方法の傳授を始めた。しかもこの世智賢い男さへ、よもやかうした傳授をした上で、紬一疋が白石紙子二端に變らうなどとは、思ひもよらぬ事だつたらう。

「いやといふものを無理に、此三月過ぎに二十貫目預けました」といふ言葉は、當時の經濟狀態に通じて居ない一と寸解しかねるかもしれない。當時は大きい兩替屋とか問屋とかいふものは、一種の銀行業を營んでゐたので、遊資を持つてゐるしまうた屋だとか、賣溜めの金を少し貯へてゐる小商人とかは、その金を有利に貯蓄するために、確實な兩替屋などへ預けるのである。兩替屋はこれを資本として更に手廣く商賣が出來る。頂けた方は利子がついて、しかもいつでもいる時は返して貰へるといふ制度だ。だから無理にこちらから頼んで預つて貰ふといふ訣が、自ら明かになるであらう。そのあてにして預けた先が不信用だといふのだから實際驚かないでは居れなかつたわけだ。

百二十末社の評以下は、西鶴の例の筆拍子の走りすぎである。母親の說敎がいつの間にか、神々の錢儲け話に變つた。惠比須・大黑から出雲の神までの御利益は、誰も知つた通りの事だが、鏡の宮以下は西鶴が神の名に因んでの出鱈目であらう。山王即ち日吉神社には末社が二十一ある。稻荷と狐との關係は言ふまでもない。それでかうしたこじつけが出來上つたのである。「神さへ錢儲け只はならぬ世なれば、まして人間油斷する事なかれ」とは、御尤もながら、引合に出された神樣は少々安つぽく扱はれた形である。しかしかうした解釋が、やはり元祿世相の一面を物語つてゐるものであらう。（以上三一頁にあるべきを脫漏したので便宜こゝに補ふ）。

然らば只今迄より念比に仕かけ、天滿の舟祭りが見ゆるこそ幸はひなれ、濱にかけたる棧敷へ女房どもをおこして見せたしと、廿五日にお內義をやりて、さきのかゝとしみ〳〵內證をかたらせ、一日あそぶうちに、男子どもが馳走に出るはしれた事じや。時に二番目のむすこが生れつきをほめ出し、かしこそふなる眼ざし、こなたの御子息にしては、お心に掛さしやるな、鳶が孔雀を產んだとは、此子の事、玉のやうなる美人、ちかごろ押付たる所望なれども、わたくしもらひまして聟にいたします。酒ひとつ過しましていふでは御座らぬ。われらが子ながら、これ娘も十人並に、其うへ親仁のひとり子なれば、五十貫目付てやるとはつね〳〵の覺悟。又われらがわたくしがね三百五十兩、長堀の角屋敷捨うりにしても二十五貫目がもの、仕てから袖も通さぬ衣裳六十五、ひとりの娘より外にやるものが御座らぬ。是がこちの聟殿と、思ひ入たる良つきして、是を言葉のはじめにして、其後折ふしすこしづつ物をやればかへしを請、是以損のいかぬ事。それよりよいほどを見合

せ、やとひにつかはし、銀掛るそばに置て數をよませ、こくゐんをうたせ、内藏へはこばせなどして、一日つかふて歸し、其のちさきの身になる人を見たて、ひそかによびにつかはし、其人の二番目の子を、女房どもが何と思ひ入ましたやら、是非にと望みまいらす。いそがぬ事ながら、次而もあらば此方の娘を囉ふてもくださるかたづねてくだされ。こなたへ取つくろふて申事も御座らぬ、銀千枚はいづかたへやりますとても其心得と云わたし、先へ通じたと思ふ時分に、内々の預け銀入用と申つかはせば、欲から才覺して濟す事手にとつたやうなり。此仕かけの外有まじと、いひおしへてわかれける。其年の大晦日に、かの親仁門口より笑ひ込、御影〳〵、御かげにて右の銀子元利ともに二三日前に請取ました。こなたのやうなる智恵袋は、銀かし仲間の重寶〳〵と、あたまをたゝき、扨其時は紬一疋とは申せしが、是にて御勘忍あれと、白石の紙子二たんさし出して、中わたは春の事といひ捨て歸りける。

【語釋】 ○天滿の舟祭り 大阪天滿天神の御祓祭のことで六月廿五日に行はれる。當日神事の練物の盛んなさまは「難波鑑」（延寶八年刊）などに見えて居り、神輿は難波橋から舟で恵比須島の御旅所に向ふので舟祭りと稱する。右の「難波鑑」には「御輿二社難波橋より舟にめし、今は恵比須島に漕ぎ行き御旅所に遷幸あり。夜に入りて還らせ給ふ。御迎の挑灯の數々浪間を輝かし、蒼波もから紅に水くゝり、神代もきかぬ祭禮の有樣いとさら〳〵し」とあつて、その舟祭の繪が見える。 ○舟祭が見ゆるこそ幸なれ 二十貫目の銀を預けた北濱の何某の家の裏が、舟祭の渡る河筋に當るので、それを見物する事が出來るのは幸ひだとの意。 ○濱 大阪で河岸のことをいふ。 ○さきのかゝ 先方の女房。 ○馳走に出る とりもちのため座に出る。 ○お心に掛けさしやるな この一句は次に向ふの親たちを蔦に喩へて言ふために、その言譯として一寸話の中に挿んだのである。 ○蔦が孔雀を生んだ 諺。蔦が鷹を生むともいふ。 ○美人 當時は美男の意にも用ひてゐる。○押付けたる所望 無理に承知させようとするやうな願ひ。 ○これ娘も 此方の娘もの意。 ○わたくしがね 私金。一家の金でなく、女房自身の財產たる金。 ○仕てから 仕立てゝから以來。 ○思ひ入たる顏 深く思ひ込んだ顏つき。 ○やとひにつかはし 北濱の家の手代などを、一日手傳はしてくれと雇ひにやり。 ○銀掛くる 銀貨の目量を天秤にかけてはかる事。 ○よませ よむは數へること。 ○こくゐん 極印。昔は金銀の貨幣に、その僞造や盜用を防ぐため印を打つたのである。 ○さきの身になる人 先方の身のためになる人。即ち先方に極く親しい人。 ○こなたへ 「こなた」は對稱の人代名詞。「貴方に體裁をとり繕ふため言ふ必要はない。ありていに申しますが」の意。 ○先へ通じた その話が北濱の某の耳に入つた。 ○白石の紙子 奥州白石から產する紙子。 ○中綿は春の事 中綿は正月になつてからの事。

さて世智賢い男が、預け銀取返し法の秘傳を授ける事になつた。ではこれから益々先方と親しくして、丁度そこで天滿の舟祭りが見物出來るのは幸ひだ。當日女房を見物にやつて先方の次男を聟にしたい意向を洩らし、その上娘には多分の持參金を持たす事を仄めかさせる。これが秘策の第一着手である。それから先方の人を傭つて銀の勘定などに手傳はせる。これはこちらに確かに相當の現金を持つて居るといふ事を示して、先方を十分信用させるための手段であつた。次に先方の親戚でも窃かに來て貰つて、今度は主人から正式に娘の緣談の仲人を頼み込む。これだけの豫備行動をとつて置けばもう大丈夫だ。愈々最後の目的たる預け銀返還の請求にうつらねばならぬ。と策は見事に効を奏した。娘の持參金欲しさから、無理にも金を才覺して、元利合計相違なく拂戻してくれたのである。しかもその間

無用の交際費を使つたかといふとさうではない。「其後折節少しづゝ物をやれば返しをうけ、これ以て損のいかぬ事」と、返禮で埋め合せがつく事を敎へてゐる。誠に至れり盡せりの秘傳だ。上々の紬一匹には確かに十分相當してゐる。

その年の大晦日、門口から笑ひ込んで來た親仁の姿を見ては、かの秘傳を授けた男も、これでは愈々紬一疋はしめたものだと窃かに胸を躍らせた事だつたらう。だが親仁もさるもの、「こなたのやうな智惠袋は、仲間の重寶」と口先ばかりは煽て上げながら、御禮に持つて來たのは貧弱な紙子一疋、「これで我慢してくれ」とおしつけた上に、「中綿は正月になつてからの事」と言ひ捨てゝ歸つてしまつた。開いた口が閉がらぬとは、こんな場合にこそ用ひらるべき言葉であらう。「言捨てゝ歸りける」、この最後の一句も實に千鈞の重みがある。中綿は無論百年たつても貰へぬのだ。

二　訛言も只はきかぬ宿

萬人ともに月額剃て髪結ふて、衣裳着更て出た所は、皆正月の景色ぞかし。人こそ知らね年のとりやうこそさま〳〵なれ。內證の迚も埒のあかざる人は、買がかり萬事一軒へも拂はぬ胸算用を極め、大晦日の朝飯過るといなや羽織脇ざしさして、きげんのわるい內義に、物には勘忍といふ事がある、すこし手前取直したらば、駕籠にのせる時節もまたあるものぞ。夕べの鴨の殘りを酒いりにして喰やれ。掛どもをあつめて來たらば、先そなたの寅引錢一貫のけて置て、有次第に拂ふて、ない所はまゝにして、掛乞の良を見ぬやうに、こちらむきて寢ていやれと、口ばやにいひ捨て出行商人、何として身體つよくべし。一日々々物のたらぬこしらへ、おのれも合點ながら俄かに分別も成がたし。こんな者の女房になる事世の因果にて、子をもたぬうちに年をよらしける。一錢も大事の日、鼻紙入に豐歩二つ三つ、豆板三十目ばかりも入て、かゝりのない茶屋に行て、爰にはまだ得しまはぬかして、取みだしたる書出し千束のごとし。是皆ひとつにしてから高で二貫目か三貫目、人の家にはそれ〳〵の物入、われらが所は吳服屋へばかり六貫五百目、物好過たる奥樣に迷惑いたす。さらりと隙あけて、此入目を女郎ぐるひにいたすで御座る。去ながらさられぬ事は、三月からお中にありて、日もあるに今朝からけがつきて、けふ生るゝとてうまれぬさきの褐さだめ、乳母をつれてくるやら三人四人の取あげ祖母、旦那山伏が來て變生男子の行ひ、千代の腹帶、子安貝、左りの手に握るといふ海馬をさいかくするやら、不斷醫者は次の問に鍋を仕かけ、はやめ藥の用意、何に入事じややら松茸の石づき迄取よせて、姐が來てせはをやく。さても〳〵やかましい事かな。されどもこなたは內に御座らぬものといふを幸はひに、ふら〳〵爰へ御見廻申した。われらが身體しらぬ人は、もしは借錢こはれて出違ふかとおもふもあれば氣味がわるい。此島中に一錢も指引なしの男、ことに現銀にて子のできるまでの宿をかし給ふか。爰のさかなかけの鰤がちいさくてわれら氣にいらぬ、早々買給へと一かく投出せば、是はうれしや、亭主に隱しましてほしき帶よ〳〵と笑ひ、此年のくれには心よきお客の御出、來年中の仕合はしれた事、さて臺所はあまりしやれ過ました、ちと奥へと申。馳走も常に替りてすき、合點かといふ。樽の酒のかんするもおかし。其のちかゝは疊占おきて、三度までいたして同じ事、御男子さまに極まりましたと、かゞが推量と客の跡かたもなきうそとひとつに成け

【語釋】　○月額剃って髪結うて　この儘に解して勿論差支ないが、或ひは當時の童謠「京都見をとらまへて、月代剃って髪ゆう

て」といふ文句を思ひ浮べて筆をとつたのかも知れない。風俗文選卷三去來の鼠賦にも「新左衛門とつけるは月代すりての後なるべし」と見える。　○正月の景色　景色は氣色。正月らしい樣子。　○内證の云々　經濟上のやりくりがどうしてもつかぬ人。即ち迯も借金を返せる見込みがない人。　○内儀　妻のこと。　○手前取直す　くらし向きがよくなる。　○酒いり　酒煎。酒壺(サカシホ)で煮ること。　○掛　賣掛の畧。　○賣引錢　正月遊びの賣引に出し合ふ錢。　○まゝにして　そのまゝ打捨てゝおいて。　○身體つゞくべし　「身體づゞくべき」と有るべき所。　○一日々云々　日毎に窮乏に赴くやうなやり方で、その事は自分でも承知して居ながら、そこをどうして行けばよいのか、急に考へもつかぬ。　○鼻紙入　鼻紙袋ともいふ。雍州府志土產門「以二革或絹一縫二片囊一其内盛二丸散藥一或藏二耳爬石筆等之物一與二鼻紙一合而懷レ之、是謂二鼻紙袋一古疊紙之遺風乎。或鼻紙亦有下納二斯袋内一者上俗小片紙一帖竪折而懷レ之、或拭二鼻涕一又拭二不淨一始稱二懷紙一今專謂二鼻紙一」。　○壹歩　壹歩判金。　○豆板　豆板銀。豆狀の小粒の銀貨で量目は一定して居ない。小粒・豆銀・小玉銀等ともいふ。　○髮にはまだ云々　以下この男が茶屋の女房に言ふ詞。　○得しまはぬかして　買懸りの支拂をすまして仕舞へないと見えて。　○入目　入費。　○三月からお中にありて。　三月から姙娠してゐて。　○けがつきて　產氣づいて。　○生れぬさきの襁褓定め　あまり早手廻しの事にいふ諺だが、こゝは正にその文字通りにしやれたのである。　○取揚ばゝ　產婆。　○且那山伏　常に出入して居る祈禱師の山伏。　○變生男子の行ひ　女子を姙んで居てもそれを男子に生れ變らせようとすること。變生男子は正しくは變成男子と書くべきで、もと佛語。即ち五障の女身が、男子に變成して成佛する事をいひ、法華經に龍女が男子に變成した事等が見える。しかし是を出產の場合の祈りとした事は、すでに平家物語等にも見えて、古くから行はれてゐる。　○千代の腹帶　生れる子の長壽を祈るための腹帶であらうか。　○子安貝　腹足類に屬する貝で、古來安產のまじなひになると信ぜられた。女重寶記卷三に「子安貝といふ貝あり、この貝にはやめを入れ飲めば平產するなり」とあるが、單に出產の折手に握つてゐてもよいと信ぜられてゐたので、和漢三才圖會にも「相傳婦人臨レ產握二於掌一易レ產、故名二子安貝一、與二海馬一同レ功」とある。　○海馬　「たつのおとしご」の事で、その名稱からやはり平產の兇ひに用ひられた。女重寶記にもこれを產婦に握らせる事が見え、男色大鑑卷四にも、「右の御手に子安貝左の御手に海馬を握らせ參らせ」とあり、又和漢遊女容氣卷一にも「日本にては海馬と申す物を產屋のまじなひにさし置く事にて候」と見える。　○不斷醫者　常に出入して居る醫者。　○早め藥　分娩を早く催させるための藥。　○松茸の石づき　松茸の根もとをいふ。眞實伊勢物語卷一に「松茸のいしづきを糸にてつなぎ壁にかけて置きけるを、おの〳〵目につきて、あれは何の爲ぞと言へば、平產しける女の後腹痛むによき物といふ」とあるので、その功能は明かである。なほ女重寶記卷三參照。　○こなたは内に御座らぬもの　一般に昔女房の產する時に、男は產室をのぞいて見たりしない習はしであつた。　○この島中に　島は島原の略稱にもいふが、こゝは大阪での事と思はれるから、島之内であらう。島之内は當時白人(ハクジン)を買つて遊ぶ所であつた。　○指引　もと差引勘定の意であるが、こゝでは借金の意。　○さかなかけ　魚掛。　○一かく　一角。一歩判金のこと。長方形をしてゐるからかくいふ。　○心よきお客　歲末といへば誰しも始末心になるのに、早速一角投出すといふばつとしたはづみ方だから、氣分が勇みたつお客樣の御出でと言つたのである。　○盞所はあまりしやれ過ぎました　特に通を氣取る者は座敷でなく、盞所などでわざと酒を飲んだりしたものである。　○驅走も云々　「驅走も普通とちがつた好みだが、その點は承知して居るか」の意だらうが、「合點かといふ」からすぐ「樽の酒云々」とうつる文章は、少し唐突たるを免れない。　○疊算　疊の上に籌などを落して、その落ちた場所から疊の端まで編目を數へ、その丁半の數によつて吉凶を占ふこと。遊女などが客との首尾を占ふやうな場合によくやる事である。

「詐言も只は聞かぬ宿」といふ題は、暗示的で面白い。「萬人ともに月代剃つて」から、「皆正月の氣色ぞかし」までの

冒頭の一句も、この篇の主人公が内證は埒の明かぬ癖に、茶屋で潜上言つて正月顔して居る話への展開を先づ示したものであるが、以下の文句との關係に、緊密さを缺いて居る憾みがある。さて次に一切買懸りの借金を支拂はぬと度胸を極めた男の捨臺辭を寫したが、「機嫌の悪い内儀に」と言つたゞけで、先づその場の險悪な空氣を濃厚に感じさせる。「物には辛抱と云ふ事があるものだ。少し運が直つたらタクシーぐらゐは飛ばさせてやらぬものでもない。昨夜の牛肉の鋤燒の殘りでも喰つて居な。掛金を集めて來たら、まづお前の活動行きの小遣だけは取退けておいて、あとは金の有り次第に掛けを拂つて、無かつたらうつちやつて、借金取りに尻向けて寢て居たらいゝぢやないか」。今ならそんな風にでも言つた事だらう。そしてあわてゝ何處かへ出て行つてしまふのだ。口先だけで輕くごまかしてゐる、薄志弱行な男の口吻が宛然と描かれて居る。こんな男にかゝつては女房もたまらない。子も持たぬ中から苦勞のために年が老ける事だ。「子を持たぬ中に」の語は、次に生れもせぬ子を產ます伏線として設けたのかも知れぬ。

只かうして家を出遠つて逃げ出すだけの男はまだよい。一錢の金も粗末に出來ぬ大晦日といふのに、豈兩近くの金を持つて、借金の無い茶屋を見立てゝ出かけて行く。「かゝりの無い茶屋」といふので、この男が方々の茶屋に不義理をしてゐる事が自ら分る。さて自分の内證を知らぬ茶屋だと高をくゝつて、問はれもせぬ獨り語りに、うそ八百を並び立てゝよせいを張す。取亂したまゝにしてある書出しの束を見てそれを高で二貫目か三貫目だらうとけなしつけた上に、「人の家には身分に應じてそれだけづゝの物入があるものだね。お前の所ちやゞめたところで二三貫目、俺の方ちや呉服屋の拂ひだけでも六貫五百目はある。それはみな女房の物好きからの入費だから、そんな女房にはさらりと暇やつて、それだけの金で女でも買はう」と、氣障で堪らない金持ち顔をし出した。「物好過ぎたる奥樣に迷惑致す」とか「この入目を女郎狂ひに致すでござる」などゝいふ言ひ方は、上つ調子な大盡か幇間などの口吻である。さてそれから生れもせぬ子供を生れさせて、大晦日見かけての茶屋遊びの言譯をした。その中に男はすつかり大盡氣分になつて、早速噂に一角祝儀をはづむ。苟くも大晦日の一角だ。噂が「此年の暮には心よきお客のお出で」と喜び上つて、そら輕薄の追從たら〳〵なのも無理はない。そして置いたか置かぬか知れもせぬ疊算の事まで言ひ出して、結局噂と客とが同じやうに嘘をついてゐるのも面白い。

あそび所の氣さんじは大晦日の色三絃、誰はゞからぬなげぶし、なげきながらも月日を送り、けふ一日になかい事心にものおもふゆへなり。常はくるるを惜みしに各別の事ぞかし。女は勤とて心を春のごとくにして、おかしうないを笑がほして、ひとつ〳〵行年のかなしや。此まへは正月のくるをはねつく事にうれしかりしに、はや十九になりける。追付脇塞きてかゝといはるへし。ふり袖の名殘もことしばかりといふ。此客わるい事には覺えつよく、汝此まへ花屋に居し時は丸袖にてつとめ、京で十九といふた事大かた二十年にあまる、せんさくすれば三十九のふりそで、うき世に何か名殘あるべし、小作りにうまれ付たる德と、あたまおさへてむかしをかたれば、此女ゆるし給へと手を合せ、氣のつまる年せんさくやめて、うちとけて夢むすぶうちに、此女の母親らしきものの來てひそかによび出し、ひとつふたつ物いひしが、何の事はない、是が貌の見おさめ、十四匁の事に身をなげるといふ。此女泪ぐみて、今までうへに着たるぐんない島の小袖を、ふろしきづつみに手まはしはやくして、親にわたすありさま、いかにしても見かねて、又一かくとらせて戻し、心おもしろう聲高に

物いふを聞付、若衆のざうり取めきたる者二人つけこみて、旦那これに御座ります、御宿へけさから四五度もまいれど、お留守は是非なし。御目にかゝるこそ幸はひと、何やらつめひらきしてのち、銀有次第羽織わきざしきるものひとつ預かり、跡は正月五日までにといひ捨て歸る。此おきやくしゆびあしく、人にいひかけられて合力せねばならず、とかく節季に出ありくがわるひと、これにも分別がほして夜の明かたに髮を歸る。たはけといふはすこし脈がある人の事と、笑ふて果しける。

【語釋】 ○氣さんじ 暢氣で氣苦勞のない事。 ○色三味線 遊女などの彈く三味線。すべて色といふ言葉は、遊女や情事等に關した事について、他の言葉と熟していろ〳〵用ひられて居る。色糸(三味線の事)・色酒(遊女を侍らせて飲む酒)・色座敷・色茶屋・色づとめ等、色何といふ言葉は頗る多い。 ○投節 小唄の一種。明暦の頃柏屋又十郎抱への太皷女郎河内が創めたもの(一目千軒)で、寶永頃まで行はれた。唄の終りをヤンと投げるのでかく呼ぶ。 ○歎きながらも 當世投節(日本歌謠集成卷六所收)「歎きながらも月日を送るさても命はあるものを」。○今日一日に長い事 「けふ一日の長い事」とあつた方が分り宜い。 ○はねつく 羽根突く。 ○脇塞ぎて 脇を塞ぐとは着物の脇明を詰袖にすることで、又脇を詰めるともいふ。俗徒然卷四に「少年の時は脇明の袖下長く男子は十七の春定まつて丸袖になし、女子は緣につくもつかざるも、十九の秋塞ぐこと」とあるので、こゝの意味も自ら解されるであらう。 ○丸袖 袂の下部を丸味をつけて仕立てゝあるから言ふ。振袖の腋明なのに對して、これは詰袖になつて居る。 ○頭抑へて 高飛車に出て。上手から出て。 ○何の事はない 以下母親の詞。 ○ぐんない島 郡内縞。甲斐の郡内地方から產する郡内織の縞物。 ○若衆の草履取 若衆は一般に元服前の少年をもいふが、こゝは歌舞伎若衆で即ち男色を賣る少年俳優を言つてゐる。 ○つめひらき 詰開き。折衝、談判などの意で、道理を糺して相當の處置をすることにいふ。色道大鑑「兵法より出でたる詞也。爰にいふは物の差配、ことわりの是非を糺し、道理を盡す詞也。又詞の外に人々への音信音物などについて、そこそこへ氣を配るをつめひらきといふ」。 ○合力 金錢物品などを與へて、他人の窮乏を助けること。 ○たはけといふは云々 馬鹿者といふのはまだもう少し取柄のあるものゝ事で、これ位ひどくては全く話にならない。

「色三味線」と言つただけで、もうその座へ色女の侍つた事が分る。「女は勤めとて」と女が突然瀨を出したわけではないのである。投節は當時かなり流行した小唄で、「一目千軒」によると島原の投節、吉原のつぎ節、新町の羅節とて古來からの三名物だとある。「松の葉」などにも投節の唄は幾つかあげられて居り、なほ當世投節だけを集めた小册も刊行されてゐる。就中この「歎きながらも月日を送る」は、最もよくはやつたらしい。西鶴も投節といへばきつとこの歌を引いてゐるし、近松の作中にもちよい〳〵引かれて居る。

女がをかしうも無い笑ひ顏して、聞きもせぬに「振袖着るのも今年きりだ」と、まだ色盛りの年らしく見せかけるのはかうした女の見えすいた僞りが、寧ろいたましく感ぜられる。粹な通り者だつたら、それなりに濟ましてもよい所を、「穿鑿すれば卅九の振袖」と頭ごなしに化の皮をはいでしまつた。花屋といふのは京都の茶屋であらう。そこで既に十九の丸袖だつたので、爾來廿年間客の前では一つも年をとらずに居たものと見える。それどころか今度鞍がへしてからは更に若返りして、振袖姿になつて居たのである。「三十振袖四十島田」は唄の文句だけの事ではなかつた。しかしそれとても要するに生活の爲めだ。化の皮をはいだ男も、女を困らせようといふよりは、自分の目高な事を誇らうとする虛榮からの動機が多かつた。だから女が母親に自分の着物を脫いで渡すのを見ては、流石にだまつてもをれな

いで、又一角を與へた。男の嚢中殘る所はもう一歩一つに豆板三十目きりだ。女を助けるどころではないのに、やつぱり見えを張りたがる所が、この男の愚さである。のみならず母親の泣言さへも、實はしかけの手管かも知れなかつたのだ。

女を喜ばせて得意になつて、聲高く例の潜上を言つてゐる。それが最後の破綻を導く緒となつたのも面白い。若衆の草履取といふので、この男がかねて陰間茶屋にも不義理を重ねて居た事が分る。女若二道に尻も結ばぬたはけを盡して居たのだらう。さつき女の化の皮をはいだ天罰は覿面、今度は自分の化の皮はおろか、身の皮までも一枚はふんだくられて、それでも勘定に足らず、不足の分は正月五日までに拂つてくれといふ散々の不首尾。穴があつたらはひりたいといふのは、正にこの時の事であらう。しかもなほ子細らしい顔して「人に頼みかけられて合力せねばならず」と、見す〳〵借金のかたにとられたものを、友だちへの合力か何ぞんのやうに胡麻化さうとするのは、誠によく〳〵のたはけでなければならぬ。茶屋でもどうせかうなつたら無一物の男、今さら言掛つても仕方がない。嘲は嘲喜びのまゝに笑うて果す外はなかつたらう。

三　尤始末の異見

所務わけのたいほうは、たとへば千貫目の身體なれば、總領に四百貫目居宅に付て渡し、二男に三百貫目外に家屋敷を調へゆづり、三男は百貫目付他家へ養子につかはし、もし又娘あれば三十貫目の敷銀に、二十貫目の諸道具こしらへて、我相應よりかるき緣組よし。むかしは四十貫目が仕入して、拾貫目の敷銀せしが、當代は〳〵、炮烙は世の害の惣領なり」。これによると一盃は一倍の誤りで、其の意は炮烙のやうなものでも、賣れさへすれば一倍の利を得るといふ事と思はれる。しかし本文の用例から見ると、炮烙は「炮烙千に槌一つ」といふ諺もある通り、極めて碎け易いものだから、豫めその破損を見積つて、賣價を實費の倍になる位高くして置く意と思はれる。即ち揚屋や若衆宿の飲食費は特に高價だが、實は無銭遊興の食逃げが大分あるから、その損失を見積つてあるので、別に不思議は無いあたり前の事だの意。○さながらそれとて　さながらはしかしながら。かと言つてまさか揚代以外の料理代をいくら〳〵と言つて請求するわけにも行かず。○死分にして　死んだものとして。○煎鳥　料理物語「いり鳥。鴨をつくり、まづ皮を炒りて後身を入れ煎り、だしたまり加減して煮申し候」。○杉燒　同書「杉やき、鯛を厚く作り置き、だしにて味噌をこうだて鍋に入れ、煮え候時箱に入れまづ骨がしらを入れ煮る。身は入れ候うてやがてよし。どぶをさしてよし。牡蠣・蛤・豆腐・ねぶか其の外作り次第に入る也」。但し倭訓栞には「禁中料理にあり、杉の折に種々の物を包みたるをいふ」ともあり、もと魚肉に杉の香をうつすやうにして燒いたものをすべて言つたのだらう。料理物語に箱とあるのも杉の箱である。なほ詳しい事は嬉遊笑覽卷十上に見える。○くわつ〳〵と燃え上りて　餓鬼は水を見て飲まうとすると、其の水が火に變じて燃え上るといふ。○飛驒鳥　飛驒地方から產する紬の縞物。

初めに遺產相續法の標準をかゝげ、やがて持參金附の娘の事に及んで、我家の女房で滿足すべき事を說き、最後に同じ五百貫の遺產を相續した兄弟が、各々の心得一つで貧富の懸隔を來した事を述べてゐる。一見首尾照應條理整然たるやうであるが、その實決して「尤も始末の異見」といふ中心思想は徹底して居ない。通讀した後の感じは寧ろ遊女禮讚に近い。西鶴の町人物といつても、その底には常にこの好色本的の觀念が潜んで居る事を忘れてはならない。

今なら宴會場のシャンデリヤの輝く下だらうが、昔は百目蠟燭が最も明るいものだつた。その光りでは少し見せに

くい娘の顔を、一つ一つ善しなに言ひ直す筆致は、例によつて奇警を極めて居る。容姿に關する十難とか七難とかいふのは、別にかうしたきまつた數の缺點があるわけでなく、只い〻加減の數であらう。「諸分店風」に才槌頭・尾筒下り・猿眼・垂目・覗き鼻・高梁鼻・挫げ鼻・頬先の赤き・鰐口・嘯き口・頤無し・鑓頤・きくらげ耳・猪首・鉈首・荷持首・ぎつちやう腕（註左手利の事）杓子指・牛爪・鳩胸・庖丁腹・海老脊・もつけげ（註意不詳）・茄子尻・引張股・鰐足・鍬びら脛・猿躍と、無縁綴の名目を隨分澤山あげてある。約すれば三平二滿、數へ上げれば三十二相八十種好にもいやます事であらう。さて是等の名目の中、一つ有つても好ましからぬは人情なのに、ましてや十難揃つた花嫁。それも金が仇と觀念すれば、四人の口過ぎはゆるりと出來、その上内義は即ち自分の持參金で生活しながら亭主の機嫌を取る嫁子で、少しも如在なく留守を預つてくれる。もし美人が見たければ、その色里にちやんと專門の女が居て、いつ何時でも歡迎してくれる。それは〳〵面白い事だが、さて起別れの鐘の聲と共に揚代七十一匁を拂はねばならぬ。こいつは少々痛事だ。「それは〳〵面白うて」・「これは〳〵面白からず」、二句の相對が輕妙でしかも自然に出來てゐる。

遊女の揚代は時代によりまた場所により一定してない。七十一匁は語釋に述べて置いた通り、當時の島原の太夫の直段である。新町や吉原の太夫は島原より安い。島原も古くは五三と稱して太夫の揚代は五十三匁であつた。その後少し高くなり、且つ寛文以降は引舟と稱する圍女郎が必ず附く事になつた。延寶五年刊の「けしずみ」に、「五尺八寸の一尺八寸を引くは常ながら」とあるから、當時、すでに太夫五十八匁引舟十八匁となつてゐたらしい。即ち合計七十六匁の揚代である。「好色由來揃」には明かに「太夫揚錢五十八匁、外に引舟とて極つて鹿戀女郎一人づゝつるゝ故此代十八匁、合せて七十六匁」とあり、「元祿太平記」にも「太夫、引舟共に七十六匁」とある。其他元祿年間の諸書に

銀をよぶ人心なれば、ぬり長持に丁銀、雜長持に錢を入て送るべし。すこし娘子はらうそくの火にては見せにくい良にても、三十貫目が花に咲て、花よめさまともてはやし、何が手前者の子にて、ちいさい時からうまいものばかりでそだてられ、頬さきの握り出したる丸がほも見よし、又額のひよつと出たも、かづきの蓋ぶりがよいものなり、鼻の穴のひろきは息づかひのせはしき事なし、髪のすくなきは夏涼しく、腰のふときはうちかけ小袖を不斷めせば是もよし、爪はづれのたくましきは、とりあげばゝが首すじへ取つくためによしと、十難をひとつ〳〵よしなにいひなし、爰が大事の胸算用、三十貫目の銀を慥かに六にして預けて、毎月百八十目づつおさまれば、是で四人の口過はゆるり。内義に腰元、仲居、女物師を添て、我もの喰なから人の機嫌を取嫁子、みじんも心に如在も欲もなきお留守人、うつくしきが見たくば、其色里にそれにばかりこしらへて、夜でも夜中でも御座りませい、それは〳〵おもしろふて、起別るゝと七十一匁のかね聲、是は〳〵おもしろからず。つら〳〵おもんみるに、揚屋の酒小さかづきに一盃四分づつにつもり、若衆宿のならちや一盃八分づつにあたるといへり。是を氣を付て見れば各別高ひものながら、是土鍋の一盃とて何のやうなし。義理もかきて戀もやめて、喰にげ大じんにあふ事多し。さながらそれとて乞がたく、其客死分にしてさらりと帳を消し置て、おのれ後の世に餓鬼と成、料理ごのみして喰ふた煮鳥も杉燒も、くはつ〳〵と燃あがりて目におそろしく、食代すまさぬ事思ひしるべしと、亭主は火箸にて火鉢たゝきてうらみけるありさま、飛驒島の羽織もらふた時の顔つきに引かへておそろし。

【語釋】 ○所務分 所務はもと鎌倉室町時代に所領の義に用ひられたが、それが財産の意にも用ひられたと見え、江戸時代には遺産分配のことを所務分と言つた。 ○たいほう 大法。 ○敷銀 持參金。 ○我相應よりかるき 自分と相應より少し身分財産などの劣つた。 ○仕入して 嫁入仕度をして。 ○銀をよぶ 嫁より持參金に目をつける意。 ○丁銀 前出。 ○雜長持 前出。 ○手前者 手前の都合のよい者、即ち金持。 ○かづき 被衣。女が外出する時頭の上から被つて着一衣服。被衣を着る事は、江戸時代では專ら上方地方で行はれた風俗で、江戸では承應・明暦頃から後は全くこの風が廢れた。 ○うちかけ 小袖 地下の者武家の女は小袿の代りに小袖を打かけて着るな、打かけとも掻取ともいふ(安齋隨筆)。 ○爪はづれ 元來は手先などの有樣をいふのであらうが、一般に麁度樣子の意にも用ひられる。○十難 容色の缺點とすべき點を十、又は七つ數へ上げていふ。誌に「色の白いは十難(又は七難)隱す」。 ○六にして預け 月六分の利子で預け。 ○仲居 腰元・上女中と下女との中間に位する女中。中通りの女。 ○女物師 色道大鑑に「物仕、男によらず女によらず功者にして物ごとしなしのつゞまやかに整ふる人をさしていふ」とあつて、一般に物師とは物事に功者で分別のよい者をいふが、又仕送大臣に「女物師を物師と唱ふ」とある通り、特に裁縫專門の女のことをもいふ。御物師・女物師などゝいへば勿論後者の意味である。 ○それにばかり拵へて。 賣色專門にちやんと拵へて。 ○七十一匁 當時の島原の太夫の揚代。 ○かね屏 銀と鐘とかけてある。 ○若衆宿 男色を賣らせる茶屋のこと。 ○茶間 茶屋ともいふ。 ○奈良茶 奈良茶飯の略稱。料理物語に「奈良茶。抹茶を少しいりて袋に入れて小豆と茶ばかり煎じ候。扨大豆と米入れ候を半分づゝ煎り候うてよく候。大豆は引割り皮を捨てゝよし。又さゝぎ・くわゐ・燒栗なども入るゝよし。山椒の粉鹽加減有り」とあり、「本朝食鑑」にもほゞ同樣に記してあるが、後には普通の茶に豆腐汁・煮染等をそへた一膳飯の事も言ふ。もと奈良の東大寺興福寺の僧舍で製したからこの名があるといふ(本朝食鑑)。 ○土鍋の一盃 誌。嬉遊笑覽十一「乙州がそれ〴〵草にほろろくの一倍とて、賣れだにすれば利は有るものなり。古き前句附、一倍になる

徵して、當時島原の太夫の値段は七十六匁であつたに違ひない。——新町は引舟共に六十三匁、吉原は引舟無く癸二人で、且つ揚代を晝夜に分ち卅七匁づゝであつた。——隨つてこゝに七十一匁とあるのは、少し解し難いが、二代男にも「實の床に入りながら七十一匁の損して歸る」とあるし、なほ後考を俟つことにしよう。

惣じて遊興もよいほどにやむべし、仕舞の見事なるは稀なり。是をおもへば、おもしろからずとも堪忍をして、我内の心やすく、夜食は冷飯に湯とうふ、干さかな有あいに、借屋の親仁に板倉殿の瓢箪公事の咄しをさせ、ことはりなしに高枕して、腰元に足のゆびをひかせ、茶は寢ながら内義にもたせ置て手も出さずに飲けれども、面々の竈將軍、此内につゞく兵ものなければ、たれか外よりとがむる人なく、樂みは是で濟事なり。旦那うちにゐらるゝとて、表の若ひ者どもゝ八坂へ出かくる無分別をやめ、又御池あたりの奉公人宿へ、忍びの約束もおのづからとまりて、只はゐられず、江戸狀どもをさらへ、失念したる事どもを見出し、主人の德のゆく事有。捨る反古こよりにひねるでつちは、又内かたへきこゆる程手本よみて、手ならひするは其身の德なり。宵寢の久七も師つゝみたる菰をほどきて錢さしをなへば、たけは朝手まはしあしきとて蕪菜そろへける。お物師は日野ぎぬのふしを一日仕事程取ける。猫さへ眼三寸まないたを見ぬき、さかなかけごとりとしても鼠を出して守りける。旦那一人宿にゐらるゝ德、一夜にさへ何程か。まして年中につもりては大分の事ぞかし。すこしお内義氣にいらぬ所あらふとも、そこを了簡し給ひて、わけ里は皆うそとさへおもへばやむもの。爰見付る若世のおさまる所と、京都物になれたる仲人口にて、節季の果に長物がたり、耳の役に聞てもあしからぬ

事なり。

【語釋】 ○夜食 こゝでは夕飯のこと。 ○有あひ 有り合せに同じ。 ○板倉殿の瓢箪公事 板倉殿は京都所司代板倉勝重・重宗父子の何れかをさす。二人共名裁判官として知られ、明障子を隔てゝ原被兩告の訴を聞いたとか、心を靜めるため茶臼を廻いたとか、種々逸話が傳へられて居る。瓢箪公事(公事は裁判事件のこと)も何か名高い裁判の話であらうが、今それを詳かにする事が出來ない。 ○ことはり 斷り。 ○面々の メンメンの。 ○德將軍 德は一家の宣で、家内に於て最も威を振ふ主人の事。 ○此内に續く兵無ければ 一家中には主人より目上の者は無いから。 ○表 表の店の方。 ○八坂 若い手代などを相手の色宿があつたのである。この類の遊所としては、なほ清水邊・八軒屋・穴奥町などがあつた。 ○江戸狀 江戸から來た手紙。こゝでは勿論取引先きから來た注文狀などである。 ○内かた 店より奥の家族の住んでゐる部屋の方。 ○久七 下男の通名。久三・久三郎・久次郎・久助などともいふ。 ○錢さし 錢の孔を貫いて束ねる細い繩。○たけ 飯焚女や・下女の通名。おさんなどゝ同じ。 ○蕪柔 朝の汁の實にする蕪である。」 ○日野絹 和漢三才圖會「日野絹 日野上野邑名也。今上州安中・松井田・富岡之朝爲レ上」。 ○ふし 織糸の太く節立つた部分。 ○三寸廻を見拔く 眼識の鋭いことをいふ諺。こゝは猫だから特にこの諺が面白くきいてゐる。 ○わけ里 遊里 わけは舒色の意。 ○若世 若主人が家政を執る時代。又若主人を直接さしてもいふ。文意は「こゝの道理を見つけて悟るのが若主人の世に家運を傾けさせない所以だ」といふのである。

この一節の興味は主人一人の在宅のために、家政上どれだけの得があるかといふ事を、誇張して描いた所にある。板倉殿の瓢箪公事のことは識者の教へを乞ひたい。西鶴は「七矢數」の中にも、「これで身代ろくにすわつた。聞及ぶへうたん公事の埒明た」と用ひてゐる。八坂で茶屋女とふざけたり、御池あたりの奉公人宿を出合宿としてのあひびきなどは、當時の手代どもの樂しみだつた。しかし旦那は島原、店の者は八坂通ひでは、やがて内證に火の雨が降らう。そこをこらへる旦那の一存で、家運は萬々歳と治まるのである。因にこゝへ「立身大福帳」の一節を引いて、當時中分以下の者の遊び場所を示しておかう。

さすが都の自由さもず朱舞(註、島原の事)はいふに及ばず、また岡崎智恩院門前の下屋敷に、手生の花を植ゑ餌て、中人以上の樂しみとすれば(註、以下が中分より下の者の遊所)或は東は石垣町より始めて、綱手・祇園・こつぼり町・矢阪・清水・藪の下・下は稲荷、上は土手町、又は天神の御前・七本松、四方に色の網を張り、間々に舞子・白人、さては巾着などゝ言うて、白やら暗やら分際に應じ(註、白は白人。暗はくら者といふ私娼)、五條河原の石を枕とする遊び(註、これは辻君を買ふこと)まで、二朱豆板はいふに及ばず、錢でなりとも小判でなりとも、使はれぬといふことなし。かゝる戀の自由より起つて、ない銀まで使ひたくなり、跡先を忘れての仕過し、皆身體破滅の基ぞかし。

さしづめ本文の脚註にもなる。

「京都物になれたる仲人口にて」と、こゝに始めて冒頭からの長談義が、卅貫目附きの花嫁樣をとりもたうとする仲人が、理を分けて若い男に說いて聞かせる話だと分つた。尤も西鶴が始めからこゝで仲人口に落す計畫を立てゝ、筆をとつたのかどうかは疑はしい。恐らく筆の調子で持つて來たのだらうが、それをちやんと「節季の果に長物語、耳の役に聞きてもあしからぬ事なり」とをさめてしまつたのは、流石に凡筆でない。

さるほどに今時の女、見るを見まねに、よき色姿に風俗をうつしける。都の吳服棚の奥さまといはるゝ程の

人、皆遊女に取違へる仕出しなり。又手代あがりの内義は、おしなへて風呂屋ものに生移し、それより横町の仕たて物屋、縫はく屋の女房は、其まゝ茶屋者の風義にて、それ〳〵に身體ほどの色を作りておかし。せんぎして見るに、傾城と地女に別に替つた事もなけれども、第一氣がどんで、物がくどふて、いやしい所があつて、文の書やうが違ふて、酒の呑ぶりが下手で、哥うたふ事がならひで、衣裝つきが取ひろげて、立居があぶなふて、道中が腰がふらふらとして、床で味噌鹽の事をいひ出して、始末で鼻紙一枚づつかふて、伽羅は飲ぐすりと覺えて、萬に氣のつまるばかり、髪かしらは大かた似たものといへば、同じ事にいふも愚かなり。女郎ぐるひする程のものに、うときはひとりもなし。其かしこきやつが、此もうけにくい金銀を乞つめらるゝ借銀、目安付られし預かり銀のかたへは濟さずして、大分物入の正月を請合ひ、萬事の入用をはや極月十三日にことはじめとてつかはしける。よくよくおもしろければこそなれ。爰は分別の外ぞかし。烏丸通り厘々の兄弟に、有銀五百貫目づつ讓りわたされけるに、弟は次第に仕出し、程なく二千貫目と一門のうちからさす程なるに、兄は讓うけて四年目の大晦日に、天道は人を殺し給はず、今宵月夜ならば、むかしを思ひ出して是が賣にあるかるゝものか、闇て手くだがなる事と、紙子頭巾ふか〳〵とかふり、山椒の粉こせうの粉を賣まはりて、かなしき年を取、心うかうかと丹波口まで行うちに、夜は明がたになりぬ。世にある時の朝ごみ思ひ出してぞ歸りし。

【訂正】 ○身に覺えて（一七頁一二行） 覺えては自分で知つて居ての意で、例へば五人女卷四のお七が故意に毛貫の返すのを忘れたふりして持つて來る所に、「覺えて毛抜を取りて歸り」などゝ用ひて居る。身に覺えては、自分自身にもその事が分つて居ての意。即ち本文では「無理なれだり事をするといふ事は、自分にも分つて居る事で、殘念だ」の意。その他五人女卷三に「惡しき事は身に覺えて慱突打負けてもだまり云々」あるのなども、「それが惡いといふ事はちやんと自分にもわかつて居るので、慱突打ちは負けてもその事を人に言はず默つて居る」の意である。

【質　問】　○頴原諺師にお尋ね致します。一一頁御語釋の「江戸船」は佐藤鶴吉氏の近著元祿文學辭典によつて見ますと、「大きな屋形船の一種、遊行する爲めの船」とあつて、胸算用のこゝの所を引いてあります。それから四三頁の「集め汁」は同辭典にも先生の御解釋通りになつてゐますが、「言泉」には「五月五日に鰕豆麩豆腐ほしあはびなど種々の物を入れて煮たる汁」とあります。どちらが正しい解釋なのでせうか、御敎示を願ひます。（石川縣S生）

答、江戸船は「棠大門屋敷」卷一に大阪の江戸屋興茂四郎といふ商人が、江戸通ひの舟を作つて商賣をし、利益を得た話の所に「江戸ふれを造りて摠を積ば、三双倍のあがりを請、戻り船に干鰯（ホシカ）を買へば大阪の高いどうぶくらをしてやり」とあります。この江戸船は勿論貨物を江戸へ積み送る船の意で、遊び船ではありません。又「心中大鑑」卷三にも平野屋忠右衞門といふ大阪の醬油屋が、江戸までその販路をひろめた所に、「武藏野の原の江戸舟にも平野屋が名をつみけるより」とあります。かやうに當時の用例を見ると、遊行船の意に言つたと思はれるのは見當りません。集め汁（いい）の解は「料理物語」（寛永二十年刊）に「あつめ汁、中味噌にくしくはへよし、又すましにも仕候。大こん・ごぼう・いも・とうふ・竹の子・くしあはび・ひふぐ・いりこ・つみ入なども入てよし、其外色々」とあるのに大體よつたのです。「言泉」の解は何に從つたのか分りませんが、「料理物語」は汎く行はれて後摺も澤山ありますし、當時の料理用語の解としては最も信じて宜いものだと思ひます。なほ貞享三年刊の「料理獻立集」を見ますと、八月の料理に「あつめ汁　くづし　牛房、茄子、芋、豆腐、初茸」とあり、十二月之分にも「あつめ汁、　小あぢ鯛て、豆ふ、大根、牛房、芋、蕨」などゝあります。材料は少しづゝちがふやうですが要するに種々の野菜類を集めた汁の意でせう。更に念のため「料理大鑑」（料理珍書刊行會編、大正四・五年刊）中に翻刻された古い料理の本を色々見てみますと、皆「料理物語」の說明に近いものばかりです。特に「獻立集」でも分る通り、五月の料理などゝはきまつて居ません。（頴原）

【語釋】　○見るを見まね　諺。　○色姿　色めいた姿。こゝでは特に遊女の身なりをいつてゐる。　○呉服棚　呉服店は多く大商人である。　○遊女　こゝは特に島原の上級の遊女をさして居る。　○風呂屋もの　湯女（ユナ）のこと。浴客に色を賣つたので、江戸では早く禁ぜられたが、京阪では私娼としてかなり盛んであつた。　○纐纈屋　衣服などに纐纈（刺繍に金銀の糸を交へたもの）をする職業。　○茶屋者　京都では注月水・八坂・宂奥（コッポリ）等大阪では島之内等にある茶屋に勸めて、主に中流以下の人を相手とした私娼。　○色を作り　色めいた樣子をする。　○地女　素人女。　○どん鈍。氣がきかないこと。　○物がくどうて　物を處するにあつさりとさばけてない事。　○歌うたふ事がならいで　小唄など歌ふ事が出來なくて。　○道中が云々　遊女が客に呼ばれて宿から揚屋まで出かけるのを道中といふ。その時は腰をするて、外八文字内八文字などといふ足取りで歩くのである。地女の歩き方が下手なのを言つてゐる。　○伽羅　當時遊女はすべて客に接する身嗜みから伽羅を用ひたものである。　○髪かしらは云々　髪のやうすなどは、遊女も地女も大體似たものだと一口にいへばいふものの、實は決して同日の論ではない。　○うとき　氣のきかない事。　○乞ひつめらるゝ　借金の支拂を迫られる。　○目安つけられし云々　目安は一般に公文書もいふが、こゝは特に訴狀のこと。目安をつけるとは訴狀を提出する義で、全文は「かねて預かつて居る銀を返さないので、遂に預け人から返還の訴訟までされてゐるその銀は支拂はないで、大分費用のかゝる遊女の正月の入費を出してやると受け合ひ」の意。　○事始　正月の準備を始める事。日次紀事「十三日、　正月萬事之經營始修之、俗是謂二事始日一。正月所レ用之物亦多買レ之」。　○弟は次第に仕出し　弟は次第に金を儲け出し。　○一門のうちからさす　一族の間から評價される。　○天道は云々　以下「闇で手管がなる事」まで兄の詞。「天道は人を殺さず」は諺。　○闇で手管がなる　闇の夜で人に見られないからこそ、こんなやりくりも出來る事だ。　○紙子頭巾　紙製の頭巾。　○丹波口　島原の入口。　○世にある時　全盛だつた時代。　○朝ごみ　早朝大門が開くのを待つて遊廓に入込み、遊女を揚げて遊ぶ事。當時遊廓は夜の十二時の太鼓を限りとして大

門をしめ、朝の太鼓を合圖に又門を開いた。その間は嫖客の出入を許さないのである。

今も昔も女が眞似たいのは玄人筋の風俗である。遊女と役者はいつも流行衣裳の淵源をなして居る。特に遊里と歌舞伎が享樂の中心となつてゐた當時、彼等の社會におけるはでな風俗が、一般に及した影響は頗る大きいものだつたらう。好色貝合(貞享四年刊)にも「おしなべて今都の風一樣にかはりしもの、これ川原女形の風をうつしたり。十年あまり以前までは遊女ならでは墨にて眉はかゝざりしを、今は京の女皆遊女の眉づくり、惣づりのなげ島田、一重懸けの近江元結、さし櫛、袖のなり、裾のふかせやう、居腰の歩みぶり、一から十皆傾城になりたり」と言つてゐる。しかもその眞似樣の好みが、大商人の奥樣は奥樣、中商人の内儀は内儀、横町あたりの小店の女房は女房で、それ〴〵身分相應にちがつて居るのも面白い。先づ遊女の風俗、それは特に詳しく說くまでもなく、當時の小說を二三見たらすぐ分る事だが、こゝに西鶴が「一代女」の中に、微細に遊女のさまを描いた一節を拔いて見よう。

眉剃りて置墨濃く、小枕無しの大島田、一筋掛の醒し結び、細疊の平元結、後毛はかりにも鬢ひて拔き揃へ、二尺五寸袖の當世仕立、腰に綿入れず、裾廣がりに尻附大さに平たく見ゆるを好み、心無し大幅帶しどけなくつい結びて、三布なる下紐當の女よりも高く結びて、三つ重ねの衣裝着こなし、素足道中繰出しの浮け歩み、宿屋入の飛足、座敷附の拔足、階子登りの早め足、とかく草履は見ずにはきて先から來る人をよけず。

と、まづこんな樣子であつた。風呂屋者の風俗も同じく「一代女」には、

一夜を銀六匁にて呼子鳥、これ傳授女なり。覺束なくて尋ねけるに、風呂屋者を猿といふなるべし。此女の心ざし風俗諸國ともに大方變ることなし。身持は手の物にて日毎に洗ひ、押し下げて大島田、幅疊の元結を菱結びにして、その端をきり〴〵と曲げて、五分櫛の廻板程なるをさし。暮方より人にかづける顏なればとて、白粉に窪溜りを埋み、口紅用捨なく塗りくり、自ら薄鼠となり加賀絹の下紐を、小袖廻しに裾短く、柳に鞠五所絞り、或は袖石疊、思ひ〴〵のゆかた、腰うつつて裙短かに、龍門の二つ割を後ろに結び、番手に板の間を勸めける。

と寫して居る。なほ「好色訓蒙圖彙」(貞享二年)まで引いて見ると、

ふろ屋ものすゝ竹玉子色の木綿衣裝に黑い半襟、龜甲のさし櫛、つま高く袖ゆたかに、びんとししやんとして物いひも風俗やかまし。

といつたやうな風である。茶屋者に至つては、西鶴も「石垣戀崩」にあわたゞしい客のとりやうをうつしては居るが、衣裳つきまでには筆を及してない。「訓蒙圖彙」も同斷である。取立てゝ書くまでもない衣裳髮道具だつたからであらう。しかしやつぱり地女に比べると、どつかしやれた所があるので、女房連にはその風俗がとつて以て範とされたのである。

かうして躍起となつて地女どもが遊女の風俗をまねても、やつぱり地女はどこやら垢拔しない。女房はどこまでも經濟生活に立脚して居る以上、亭主の遊び相手として氣づまりであることは、止むを得ない。そこで髮かしらは大方遊女と似た女房を持ちながら、惡所狂ひに身を果す男が出來るのである。しかも色里で粹と言はれる程の男には、氣のきかぬ奴は一人もない筈だが、それでそこに目がさめないのは、よく〴〵面白いからであらう。思案の外とは全くこゝの事だ。

最後に仕出した弟と零落した兄との話をもち出したのは、冒頭の所務分の大法に照應させたやうな筆法だが、西鶴

自身にはそれだけの用意が始めからあつたか疑はしい。俳諧の揚句のやうな心もちで、輕く附け加へた題材と見るべきだらう。「世にある時の朝込思ひ出してぞ歸りし」、いつもながらうまい筆のをさめ方だと思ふ。

四　門柱も皆かりの世

惣して物に剛ては、もの翠をせぬものぞかし。都のあそび所島ばらの入口を、小うたにうとふ朱雀の細道といふ野邊なり。秋の田のみのる折ふし、諸鳥をおどすために案山子をこしらへ、ふるきあみ笠を着せ、竹杖をつかせ置しに、鳶烏も不斷燒印の大あみ笠を見付て、これも供なしの大じんと思ひ、すこしもおどろかず、のちは笠の上にもとまり、案山子を帥どかしにあはせける。されば世の中に、借錢乞に出あふほどおそろしきものはまたもなきに、數年負つけたるものは大晦日にも出違はず、むかしが今に借錢にて首切られたるためしもなし、有るものやらで置ではなし、やりたけれ共ないものはなし、おもふまゝなら今の間に銀のなる木をほしや、さてもまかぬ種ははへぬものかなと、庭木の片隅の日のあたる所に古むしろを敷、庖丁まなばしの切刄を摩付て、せつかく澁おとしてから小鰯一疋切事にはあらねども、人の氣はしれぬもの、今にも俄に腹の立つ事が出來て、自害する用にも立事もあるべし。我年つもつて五十六、命のおしき事はなきに、中京の分限者の腹はれ共が因果と若死しけるに、われらが買がゝりさらりと濟してくれるならば、氏神稻荷大明神も照覽あれ、僞はりなしに腹かき切て身がはりに立と、其まゝ狐付の眼して庖丁取まはす所へ、唐丸嘴ならして來る。おのれ死出のかどでにと、細首うちおとせば、是を見て掛乞ども肝をつぶし、無分別ものに言葉質とられてはむつかしと、ひとり〳〵歸りさまに茶釜のさきに立ながら、あんな氣の短かひ男に添しやるお内儀が、緣とは申ながらいとしい事じやと、おの〳〵いひ捨て歸りける。是ある手ながら、手のわるひ節季仕舞なり。何の詫言もせずに、さらりと埒を明ける。

【語釋】　○小唄に歌ふ朱雀の細道　朱雀の細道は京から島原へ通ふ田圃の間の道である。小唄の文句は今確かに考へ得ぬが投節に「通ひなれにし朱雀の野邊の露は物かはわが涙」などとある。嫖客などがこゝを通る時によく歌つたものと見え、他にも「小唄にうたふ朱雀の細道云々」といつた例は多い。　○燒印の大編笠　昔島原に遊ぶ者は丹波口の水茶屋で編笠を借りて冠つて行つた者である。「たきつけ草」(延寶五年)に「丹波口なる茶屋のがりかき入れしに、髮かき撫で帶仕直しなど、心うちつきたる風情世になく嬉し。さて忍び編笠の深くも着なし大路を出はなれ云々」とある。編笠を冠る風習は吉原などでも同樣であつた。武士等が身分を憚つたりするのに起つたのだらうが、後世は京、江戸ともにこの風習は廢れた。一日千軒(寛政十三年刊、島原の案內記)に「昔は此廓へ通ふ人編笠を着て行きけるにより、中比丹波口に是をかしける。今はやうやく一軒有り、此編笠に燒印あり、さるによつて燒印編笠ともいふ。今これを着て此里へ通ふ人きゝ侍らず」とある。　○大じん　遊里で豪遊する客をいふ。大盡・大臣・大神等の字を用ひ、語源についても諸說ある。色道大鑑には「大臣、傾城買の上客をさしていふ。夫大臣は天下の三公にして尤職重ければ尊敬し又欺きて(嘲りての意)いふ異名なり」と說いて居る。　○帥どかし　すゐは粹・帥・推・水・睟等の字を宛て、語源についてもまた區々の說があるが、要するに色道諸般の事に通じて圓熟老巧な事をいふのである。帥どかしはすつかり粹人として取被つて、向ふにそれを否定させないやうに仕向けること。　○負ひつけたる　負債をしつけた。借金しつけた。　○出違はず　出違ふとは借金取と入れちがひに家を出て留守にする義。　○昔が今に　昔から今に至るまで。　○思ふま

ゝなら　思ふ儘になるなら。　○蒔かぬ種は生えぬ　諺。　○まなばし　眞魚箸。魚肉を料理するに用ひる鐵製の箸。今は鐵式的の料理でなくては使はないが、昔の料理人は平素用ひた。和漢三才圖繪「魚箸、以ゝ鐵作ゝ之、長六寸柄四寸許而左挾ゝ肉抑持也」。○澁落してから　錆を落したところで。　○人の氣はしれぬもの　人の心もちは分らぬもの。　○中京　ナカギヤウ。　○腹はれ　腹ふくれともいふ。金持ちの事。海錄一の一九に「俗に家富めるものを腹ぶくれといふ事も古くいへる諺也云々」とある通り、すでに信長記等から見える語。　○若死しけるに　「若死するに」と言つてよい所。過去にしたのは例の西鶴の筆癖。　○狐付　狐憑。　○唐丸　雞の一種で體肥大し冠が厚い。　○細首　廚屢などと同じく、只首の意。　○むつかし　面倒だ。　○茶釜のさきに立ちながら　内儀の働いて居る前に立つて言ふのである。　○いとしい　可愛想な。　○ある手ながら云々　よく行はれる手段ではあるが、あまり面白くない節季じまひの方法である。

編笠の案山子に驚かぬ烏原の雀や烏から、一轉して借錢乞を屁とも思はぬ圖々しい男を描いたのは、奇警な着筆である。掛乞を恐がる程の者はまだ取柄がある。これはおわびの挨拶でも言ふ事か、最初からおどしつけるつもりでの作り狂言、わざと氣違じみた所作をして、掛乞共をしてさはらぬ神に祟なしと、自然退却させようといふ謀である。「昔が今に借錢で首切られたためし」はないと高を括つた上で、「有る物をやらないで置くではなし、やりたくても無いものはない」と嘯かれては始末におへぬ。庭の隅で狂言するにも、日當りのよい暖い所を選んだのは、流石に餘裕綽々たる趣がある。「腹かき切つて身がはりに立つ」と臺詞だけでも凄い所へ、まるで狐つきのやうな目つきをして、いきなり唐丸の首を打落したのでは、掛乞連中も逃腰にならざるを得ぬ。生々しい血の滴る庖丁を逆手にして居ては、かなり膽玉の太い奴でも一寸近寄れないだらう。かと言つて早速逃げ出すのもあんまり馬鹿々々しいし、茶釜の前で内儀に遠まはしなそしり口をきいて歸つてしまつた。かうして詫言一つ言ふ世話もいらずに、うま〳〵策戰は圖にあたつたのである。しかし西鶴は「これある手ながら手の惡い節季仕舞なり」と、終に批評の言葉を挿んで、讀者のこの男に對する憎惡の情を迎へる事を忘れなかつた。

其かけごひの中に、ほり川の材木屋の小者、いまだ十八九の角前がみ、しかもよはよはとして女のやうなる生れ付にて、心のつよき所有若ひ者なりしが、亭主がおどし仕かけのうちは、かまはず竹縁に腰かけて、袂より珠數取出して一粒づつくりて、口の中にて稱名となへて居しが、人もなく事しづまつて後、さて狂言は果たさうに御座る、わたくしかたの請取て歸りましよと申せば、男盛りの者どもさへ了簡して歸るに、おのれ一人跡に殘り、物を子細らしく、人のする事を狂言とは。此いそがしき中に無用の死てんどうと存じた。其僉議いらぬ事。とかくとらねば歸らぬ。何を。銀子を。何ものがとる。何もの取が我等が得もの。傍輩あまたの中に、人の手にあまつてとりにくいかけ斗を、二十七軒わたくし請取、此帳面見給へ、二十六軒取濟して、爰ばかりとらでは歸らぬ所、此銀濟ぬうちは内普請なされた材木はこちのもの。さらば取て歸らんと、門口の柱から大槌にて打はづせば、亭主かけ出で堪忍ならぬといふ。是々そなたの虎落今時は古し、當流が合點まいらぬそうな。此柱はづして取が、當世のかけの乞やうと、すこしもおどろくけしきなければ、亭主何ともならず詫言して殘らず代銀濟しぬ。

【語釋】　○ほり川　京都の堀川。　○角前髪　元服前の少年が前髪立の額の角を入れた（額の隅の生際の髪を剃ること）ものをい

ふ。 ○よはよは 弱々。 ○かまはず それに取りあはず。 ○稱名となへ 念佛をとなへ。 ○人もなく 他の掛取どもも 歸ってしまひ。 ○了簡して 聞き分けて。 ○死てんがう てんがうはふざける事、いたづら、戯談などの意。俚言集覽には 癇癪から出た語かと言つてゐるが、恐らく手向ひで人に反抗する義から轉じたのであらう。腕てんがう、口てんがう、てんがう かく等と言ふ。死てんがうは戯談に死ぬまねする事。 ○何もの取るが我等がえもの 解し難い文句である。たゞ「借錢を取るのが自分の得意だ」といふのを、前の「何者がとる」といふ言葉をうけて、口拍子に「何者取るが」とつゞけたのであらう。 ○かけ 賣掛。 ○わたくし請取 この請取はうけもつての意。 ○内普請 家屋の内部の改築。 ○虎落 無理を言つてねだる事。 ○當流 當世風。 ○かけの乞やう 借金を返して貰ふ方法。

手ごはいと思はれた連中も皆この狂言で追拂はれたのに、たつた一人平氣でまだ緣側にすわりこんでゐる男がある。これにびくともしないのなら、腕におぼえの荒男かと思ひきや、女のやうな弱々しい角前髪である。讀者はまづ事の意外に、かなり好奇心を動かさずには居られない。しかも亭主がおどし狂言をやつてゐる間、珠數取出して念佛を唱へて居たといふ次の叙述に至つて、こいつは中々一筋縄では行かぬ代物だなと思はせる。果せる哉亭主との押問答の末、愈々埒が明かぬと見極めると、門の柱を打外しにかゝつた。柱を打外さうとはあまりにも思ひまうけぬ事である。流石の亭主もこの人を食つたやり方に氣を呑まれて、遂に胃を脱いでしまつた。

亭主と材木屋の小者との問答が、原文では隨分入りくんで分りにくい。今「さて狂言は」から以下を引用符づけで口譯して見よう。小者「さて狂言もすんだやうですな。それぢや私の方の掛を受取つて歸りませう」。亭主「男盛りの人たちさへ了簡して歸つたのに、お前が一人あとに殘つて、鹿爪らしく、人のする事を狂言などとはけしからぬ」。

小「狂言ですとも、この忙しい最中につまらぬ死眞似のふざけと私は見ました」。亭「狂言だとか狂言でないとか、その詮鑿をお前などにして貰ふ必要はない。いらぬ事だ」。小「詮議はとにかく何にせよ取るものを取らねば私は歸りません」。亭「何を取つて歸ると言ふんだ」。小「おかねをです」。亭「何者がそのかねを取るんだ」。小「私です。借錢を取るのが私の得意です。 一しよに奉公してゐる大勢の友達の中でも、人の手はあまつて取りにくい掛ばかりある廿七軒を、私が特に受けもつて取りに出たのです。この帳面を見て下さい。もう廿六軒はとつてしまつてこゝ一軒だけ、殘つて居るのです。それを取らないでは歸れません。この借錢を拂はぬ内は内普請なすつた材木はまだ私の方のものです。ではその材木を頂いて歸りませう」。まづこんな調子の應待である。

銀子請取て申分はないけれども、いかにしてもこなたにしてもこなたの横に出やうがふるい。隨分物にかゝりしやが、それでは御座らぬ。お内儀によくよくいひふくめて、大晦日の晝時分から夫婦いさかひ仕出し、お内儀は着ものを着かへ、此家を出て行まいでは御座らぬ、出て行からは人死が二三人もあるが合點か。大事じやぞ、そこな人。是非いねか、いなずにいんで見しよといはるゝとき、何とぞ借錢もなして、跡々にて人にも云出さるゝやうに、人は一代名は末代、是非もない事、今月今日百年目、さて〳〵口かしい事かなと、何でもいらぬ反古を大事のものやうな貌つきして、一枚々々引さゐて捨るを見ては、いかなる掛乞もしばしは居ぬもので御座るといへば、今まで此手は出しませなんだ、おかげによつて來年の大晦日は、女房ども是で濟す事じや。さてもさてもこなたは若ひが、思案は一越こした年のくれ、たがひの身祝ひなればとて、最前の鷄の毛を引て、是を吸ものにして酒もりてかへして後、來年の事までもなし、毎年夜ふけてからむつかしい掛乞ども

來るぞとて、俄かにいさかひをこしらへ置、よろづの事をすましける。誰いふともなく、後には大宮通りの喧嘩屋とぞいへり。

【語釋】 ○横に出やう 無理の押通しかた。 ○物にかゝり者 訴訟とか金錢に關する事とか、すべて少し理窟でも並べ立てるやうな事に關係するのを、物にかゝりといふ。そんな事に經驗をつんだ者。用例、類船集「入札の請とり背請、其外物にかゝり利口なくてはかなはず」。風流曲三味線二「近所に物にかゝりの德助とて、ならびのない素人もがりを頼み」。(素人もがりは今の三百代言などの類)。なほ參考として更に俚言集覽を引用しておく。

物にかゝり 〔世中百首〕世の中に物ぐさくして物しらで物をばもたす物にかゝりて〔ヒソメ草、倭訓栞〕モノニカヽル世諺に何事にもあれ彼方此方かけて一筋ならぬをいふ。

○それでは御座らぬ そんなやり方ではいけない。 ○いなずに、いんで見しよ 去らずに居るものか、去つて見せよう。即ちいなずに」で一旦切れた語勢である。 ○借錢もなして 借錢も拂つて。 ○人は一代名は末代 諺。 ○引きゐて。 引裂いて。 ○此手 この方法。 ○思案は一越云々 思案は自分の年より一段上である。 ○年のくれ 一越した年齢から年の暮に言ひかけてある。 ○身祝ひ 自分々々の身にとつて祝ふ事。 ○毛を引て 毛をむしつて。 ○酒もりて 酒を盛つて。酒を振舞つて。

「銀受取つたからは何も申分はありませんが」、と前置きして、小者は更に上手の掛乞追拂法を敎へてくれた。それは夫婦喧嘩の方法である。內儀は着物までちやんと他所行きに着かへて、血相かへた調子で「此家を出て行けないと思つて。出て行かないでもないわ。出て行くからには大騒ぎがおつぱじまつて、人死にが二三人もあるのは承知だね。さうなつたら一通りぢやすみませんよ。お前さん。それでもぜひ出て行けといふの。出て行かずに居るものか、見事出て行つて見せるよ」とがなり立てる。亭主は少し首うなだれて、「どうか借錢もすつかり拂つて仕舞つて、後々では人にも立派な最後だと人に言出されるやうにしたいもんだ。人は一代名は末代つていふからね。だがそれも是非ない事ぢや。どうせ借錢は拂へないし。今月今日こそは思案に盡きた百年目。さて〳〵殘念な事だわい」と捨臺詞宜しく、そこらの反古を死後に殘しておいてはならぬ大事な書類か何ぞの樣にして引破る。今にも女房は出る、亭主はあとで切腹とでもいひさうな不穩の形勢である。ぐづ〳〵して掛り合ひにでもなつたら大變だ。忙しい師走節季に奉行所へ呼ばれる、證人に引張り出される。そんな事にでもなつたら一兩や二兩の金には換へられぬ。さはらぬ神に祟りなしだと早々にして引上げるは必定である。すれつからしの狂言師も、この靑二才には全く參つてしまつた。しかし酒振舞つて歸して後、即日僕授の實行に取りかゝらうとは、流石の角前髮も考へ及ばなかつた事だらう。

この一篇は割合にまとまつた作となつてゐる。終始厚かましい喧嘩屋の主人が中心から逸れて居ないのは、西鶴としては珍しい方だらう。しかしそれだけ何だか筆がしばられて、自由を缺いて居るやうな氣がする。所詮西鶴はそれからそれと、自由に奔放に筆が移り行く所に、彼の眞面目は存するのだ。

胸算用　大晦日は一日千金　卷三

一、都の顏見世芝居

○それ〳〵の仕出し羽織
○大晦日の編笠はかづき物

二、餅はなは年の内の詠め
○掛取上手の五郎左衛門
○大晦日に無用の仕形舞

三、小判は寢姿の夢
無間の鐘つく〳〵と物案じ
大つごもりの人置のかゝ

四、神さへお目ちがひ
堺は内證のよい所
大晦日の因果物がたり

一　都の貞見世芝居

今日の三番三所繁昌と舞おさめ天下の町人なれば京の人心何ぞといふ時は大氣なる事是まことなりこれ常に胸算用して隨分始末のよき故ぞかし過し秋京都に於て加賀の金春勸進能を仕りけるに四日の棧敷一軒を銀十枚づつと定めしに皆借切て明所なくしかも能より前に銀子渡しける此度大事ある關寺小町するといへば是一番の見物と諸人勇みて鼻笛を吹けるに皷に障る事有て關寺の能組かはりぬそれさへ木戸口は夜のうちに見る人山のごとし中にも江戸の者われひとり見るために銀十枚の棧敷を二軒とりて猩々皮の敷もの道具置の棚をつらせ腰屏風枕箱其後ろに料理の間さま〳〵の魚鳥髭籠に折ふしの水菓子次の棧敷に風爐釜を仕かけ、刈蓋の杉手桶に宇治橋音羽川と書付してならべ醫者どふくや儒者唐物屋連歌師など入まじり其うしろの方には島原の揚屋四條の子供宿都にしれたる末社按摩取兵法つかひの牢人迄ひかへたり棧敷の下は供駕籠かり湯殿假雪隱何にても不自由なる事ひとつもなきやうに拵らへ榮花なる見物此心は何となく豊かなり此人大名の子にもあらず只金銀にてかく成なれば何に付ても銀もうけして心任せの慰みすべしかゝる人は跡のへらぬ分別しての樂しみふかし。

【語釋】　○顏見世芝居　日次紀事「此月(十一月)初四條河原狂言並傀儡棚之役者入易後各施藝諸人改見俗是稱二顏見一或謂二足揃一是使二見人知二役者顏面一又揃二調拍子遲速一之義也到二臘月二十日許一止之」。　○三番三　三番叟。能かゝ出て芝居では顏見世や初春興行の始めに、太夫元の第渡があつてから舞ふ。幕の序開として「所繁昌」などゝ目出度舞ひをさめるのである。

○勸進能　元來は勸進のために興行する能を言つたのだらうが、こゝは稽古能に對して、表向公けに觀覽料をとつて見せる能をいふ。　○銀十枚　銀一枚は四十三匁。　○大事ある　關寺小町には能として重い習物（ナラヒモノ）があるので、それを一樣に期待したのである。　○鼻笛を吹く　鼻笛は口笛と同じく鼻を鳴らすこと。鼻笛を吹くとは得意なさまの形容にいふ。小相撲（寛文七年刊）序「人どとに上手もなし下手もなきと、面々自讃して鼻笛をふき鎗おとがひをとがらすのみ」。なほ正德二年刊の笠附集「家の風」に、「てもはも、兩方の鼻で二重切」とあつて、撰者が「一重切を兩方の鼻にあてゝ吹笛寶あり」と註してあるから、その頃は實際鼻で笛を吹くのを藝としたものなどもあつたと見える。　○それさへ　それでさへ。　○二軒　二間。　○腰屏風　腰の高さ程の低い屏風。　○枕箱　枕を入れておく箱。種彦の「用捨箱」枕草筍の條に、元祿六年刊「京大坂茶屋雀」に載する上記のやうな圖を引いてある。詳しくは「用捨箱」參照。なほ元祿十六年刊笠附集「浮世笠」に「つき出して、たばこ取出す枕ばこ」とあるから、煙草なども一寸入れて置いたものと見える。　○髭籠　端を組みあまして髭のやうにした竹籠。　○水菓子　水分の多い菓實類をいふ。　○風炉　茶の湯に用ひる炉。それにかける釜が風炉釜。　○刺蓋　二枚合せてかぶせるやうにした蓋。一枚の蓋を半分づゝに割つたやうだからいふ。　○杉手桶　杉材で作つた手桶。　○宇治橋云々　古來宇治の橋詰から三間目の橋杭の邊は、最も茶の水によいなどといはれて、茶人に賞用された。その宇治川の水や音羽瀧の水などをわざ〳〵取寄せた贅澤のさまである。　○唐物屋　舶來品を賣買する商人。　○子供宿　子供は歌舞伎妓芝居の藝子（少年俳優）。この藝子を買つて遊ぶ宿が子供宿。

枕箱

當時能は東山などで屢々催されたが、表向觀覽料をとると願出なんかゞ面倒なので、大概稽古能といふ名義で簡單に行はれた。だから勸進能といへば、能役者も一流揃ひで、規模も大がゝりなものに限られ、隨つて見物の人氣も大いに湧立つたのである。さてこそかうしたこれ見よがしの贅澤ぶりを發揮する連中も居たわけである。たかゞ一人見るだけの能の棧敷代に、銀二十枚、小判にして約十五兩も費した上、料理の間、假湯殿、假雪隱までもしつらへると、は、少々馬鹿氣すぎた沙汰であるが、こゝが元祿人の氣質である。さうして「此人大名の子にもあらず、只金銀にてかくなるなれば、何に付けても銀まうけして心任せの慰みすべし」とは、當時の町人の低いけれどもとにかく理想といふものであつた。

身體さもなき人霜さきの金銀あだにつかふ事なかれ九月の節句過より大ぐれまでは遠い事のやうに思ひ萬人渡世に油斷をする事ぞかし十月はじめより日和定めがたく時雨風のはげしく人の氣も是につれておのづからそう〳〵敷諸事を春の事とてのばし當分のまかなひばかりにくれければ花車商ひ諸職人の細工も思案替りてやめける次第に朝霜夕風人皆冬籠の火燵に背寢してそれ〴〵の家業外に成行さしつまりて迷惑する事なり其後法華寺の御影供淨土宗の十夜談義東福寺の開山忌參り一向宗のおとりこし又は玄猪の祝義に夜のあそび稻荷のお火燒の比河原の役者入替りて、良みせ芝ゐの時分は同じ人また珍らしく見る人もまたうき立けふは其座本明日は此太夫本其次は誰が座に大坂の若衆がたが出るなど沙汰して水茶屋〻かねて棧敷とらせ內證より近付の藝者に花をとらせ旦那お出といはるゝまでの外聞に無用の氣をはりける提重酒がとりのぼして我宿へはすぐに歸らず石垣町の二階座敷の切狂言の踊をうつし王城の辰巳あがりなる聲してえい山へも響きわたる程のさはぎ京に

人も見しる程の者にしてあればたれ樣の御ふく所となたの掛屋などいふさへ惡所のさはぎは奢りらしく見えけるましてやはした銀の商賣人たとへ氣延しに芝居見るともとなりに蓑笠のまぬ所を見すまし圓座かりて見て役者わか衆の名覺えぬ者か

【語釋】 ○霜さき　霜の降る寒中の前といふのであるが、實は師走の節季前といふ意で常に用ひられる。榮花咄「霜さきの男何とぞつなぎ置かば、正月の遣ひ物になる事もと」といふのは、節季を見かけての男だから、何とか關係を絶たずにおけば、正月の費用の幾分でもせびり出せると遊女の胸算用である。　○九月の節句　九月九日重陽の節句。　○大ぐれ　大晦日。年の暮。　○さうくしく　騷々しく。心の落ちつかぬさま。　○春の事とて云々　萬事明けて正月になつてからの事だと延ばし。　○當分のまかなひ　一时差當つてのやりくり。まかなふは物事を取計らふ、處置する、取繕ふ、糊塗するなどの意。　○花車商ひ　花車とは上品・優雅等の意で、花車商ひは風流な品や贅澤品などを賣る商ひ、永代藏に「鮫・書物・香具・絹布、かやうの花車商ひはかざりの手廣きがよし」とあるのは直ぐこの言葉の說明になる。　○さしつまりて　おしつまりてと同じ。大晦日になつて困る事だの意。　○御影供　十月十三日日蓮上人の忌日をいふ。正しくは御影講「ミエイカウ」といふべきを、弘法大師忌の御影供に混じて言はならはしたのであると。又御命講（オメイカウ）ともいふ。これはミエイをメイと發音し、それに更にオをつけた訛言である　十月十二日から十三日に亙り日蓮宗の寺院では法會を營む。　○十夜談義　日次紀事、十月五日の條「自二今日一至二十五日一、是十夜。入レ夜宗門男女群集、各高聲唱二彌陀號一。凡淨土宗寺院有二法談一。」これは無量壽經に「於レ此修レ善十日十夜、勝二於他方諸佛國土爲一善千歲」とあるに基いたので、京都黑谷の眞如堂で行つたのを始めとする。　○東福寺の開山忌　十月十七日、東福寺の開山聖一國師の忌日。　○御取越　日次紀事、十月「此月中一向宗門徒於二私第一修二親鸞忌一、是謂二御取越一。俗俗毎年先二共期一而修レ之、謂二取越一。一向宗專崇二其法一、毎レ物以レ御稱レ之。十一月正當忌本願寺修レ之。故其外此月修レ之」。　○玄猪　十月亥の日に餅を搗いて上下共に祝ふ風習が古くからある。その起りについては諸說あつて定かでない。この日民間では夜家々の門口で祝言の歌などを歌つて、餅を乞ひ遊び歩く俗習があつた。　○御火燒　日次紀事、十一月「此月毎神社祭日、積二柴薪於二神前一、供二御酒一、然後投レ火而燒レ之。見者各口唱某神御火燒一而拍レ之。氏子家亦以二其生土神之緣日一、修二火燒一。蓋助益來復之神氣者乎。」稻荷神社の御火燒は八日であつた。　○河原の役者云々　前出「顏見世」の語釋參照。河原は四條河原で、當時の劇場は皆四條河原にあつたのである。　○同じ人又珍しく　同じ役者でも番附が變ると珍しい氣がして。　○座元、太夫元　芝居の興行主。　○若衆方　芝居で美男などに扮する年少俳優。　○水茶屋　色茶屋に對して普通の茶屋をいふ。但しこゝのは芝居の觀客が仕度をしたり休憩したりする特殊の茶屋たる事はいふまでもない。　○藝者　すべて一藝ある者をいふ。今妓女をいふのとは全く異ふ。こゝは役者をさしてゐる。全文は「茶屋などから內々に知合ひの役者に祝儀を與へておいて、愈々芝居見物に出かけたをり、その役者から且那いらつしやいと言はれるまでの虛榮の爲めに、つまらぬ氣を張る」の意。　○提重酒　提重は花見芝居見物等の折さげて携へ行くやうにした重箱。その重箱に仕込んだ酒。　○石垣町　はイシカキ又はイシガケともいふ。四條附近の鴨川の兩岸をいひ、區別しては東石垣・西石垣といふ。石垣には遊女も居たが、特に西には子供茶屋が多かつた。こゝは芝居を見て歸りに子供茶屋の二階座敷に歌舞妓子を呼んで、そこで又切狂言の踊を踊らせて遊ぶのである。　○辰巳あがり　語源については諸說あるが、とに角語尾を甲高く大聲に言ふことをいふ。「王城の」は四條石垣町は京都のほゞ東南に當るから、「辰巳」とつゞけるため枕詞見たやうに添へたので、更に次の「叡山」の緣語ともなつてゐる。　○さはぎ　騷ぎ。　○京に人も云々　京都で人からも見知られて居る位の立派な商人であれば。　○吳服所　大名高家の御用達をする大きな吳服商。　○かけ屋　大名武家などの御用金を調達する富商。　○惡所　色里。　○はした銀の商賣人　僅かの資本金でやる中流以下の商人。　○隣に蓑笠云々　隣に烟草をのむ人があると、自分の烟草を一服所望さ

れたりして損ぜるからである。○覺えぬ者か　かは反語。小商人は氣保養のために芝居見物するにしても、なるべく金のかゝらぬやうにして見るべきで、さうして見た所で役者若衆の名が覺えられぬといふ筈もない。見るだけはそれでも十分見られる。

前節にはそれだけの贅澤が出來る金持ちの榮耀な能見物を述べた。それからこの節には小商人が不相應なさわぎを戒め、次の節でその實例を示してゐる。莪然たる段落がついて居るやうだが、實は例によつて一篇の中心は絶えず移動して居る。この一節にしても、九月の節句すぎてからの年中行事につれて、人心も押迫つて行くといふのから、石垣町の騒ぎへ移ると、自ら讀者の興味も二分される。

與次兵衛が貞みせの初日に、ひだりがたの二軒目の敷敷に、勘當切らるゝ事などかまはぬ貞付の若ひもの、五六人も、風俗作り藝子に目をつかはせ、下なる見物にけなりがらせける。此若ひ者ども、見しれる人ありて評判するを聞ば、内證しらぬ事、皆川西のやつらなり。中京の衆と同じ事に、大きな貞がおかしい。知らぬ人は歴々かと思ふべし。黒ひ羽織の男は、米屋へ入縁して欲ゆへの老女房、年の十四五も違ふべし。母親には二斗入の碓をふませ、弟にはそら豆賣にあるかせ、白柄の脇差がおいてもらいたい。其次の玉むし色の羽織は、牛涎屋をどこの牛の骨やらしらいで、人のかぶる衣裳つき、家は質に入て、借銀に目安付られ、東隣へは無理いひかゝつて、さい目論もすまぬに、遊山に出るは氣ちがひの沙汰也。三番めのぎんすゝたけの羽織きたる男は、利をかく銀を五貫目かりて、それを敷銀にして家具ぬしの所へ養子に行て、後家親をあなづり、養父の死れ三十五日もたゝぬに芝居見る事、作法にはづれたる男目、米薪は其日〳〵に當座買の身上して、酒の相手に色子ども、かはいや神ならぬ身のあさましさは、銀成容とおもふべし。いかないかな此四五年、買がかり濟したる事なし。あの中に染島の羽織着たる男、ちいさき錢見出して居けるが、兄に三井寺の出家を持けるが、是から合力請て、そこ〳〵にも行先の年を越べきか。其外にひとりも京の正月するものは有まじと指さして笑へば、うら山しがるかと思ひ、かひ敷の椿水仙花に、きんかん二つ三つ延紙に包みてなげ越ける。明て見て又笑ひて、本客ならば此きんかんひとつが、銀拂ひ時二分宛にもなるべきに、皆喰れ損になるはしれた事といひ捨て、芝居は果て立歸りける。其のち毎日の河原通ひに、同し着物に色もかはらぬ羽織に、色茶屋氣を付て銀の事申せど、分も立ず道切てこざりければ、さいそくするにかひなく、程なふ大晦日になりて、獨は夜拔けふるしとて賣ぬけにして行方しれず、又ひとりは狂人分にして座敷籠、又ひとりは自害しぞこなひてせんさくなかば、最前引合したる太鼓もちは、盗人の請に立けるとて町へきびしき斷、茶屋は取つく島もなく、夢見のわるひ實舟、尻に帆かけてにげ歸り、兼ての算用には十五兩の心あて、預置れしあみ笠三がいのこりて、大晦日のかづき物とぞ成ける。

【語釋】　○與次兵衛　大阪の俳優荒木與次兵衛。元祿十三年十二月歿。　○風俗作り　髪かたち衣裳などをめかして。　○藝子は少年俳優。その若衆たちにちよい〳〵自分たちの機敷へ秋波を送らせて。　○けなりがらせける　羨しがらせた。けなりいは羨しい義、今も京阪では用ひる語。　○内證しらぬ事　「人の内證といふものは分らぬものだ、こんなに威張つてゐるが實をいふと」といふ程の意。　○川西　鴨川の西に沿つた部で、そこらに住む商人は皆中流以下の小商人だつた。「川西の奴ら」といふのは、即ち「小商人」と輕蔑した意である。　○中京　こゝは一流の大商人の多い所。　○入縁　入

聾、入夫。 ○鷲豆賣 蜆・納豆等と同じく貧家の少年少女がよく賣歩いたもの。 ○白柄 白柄卷の伊達な脇差で、よしや組といふ男伊達などが用ひたものである。 ○おいて貰ひたい そんな贅澤は止めてほしい。 ○玉虫色 玉虫の羽のやうな色。 ○牛滋屋を にかは屋であるのに。 ○かぶる 買ひかぶる。 ○借錢に目安つけられ 借金返還の訴狀を提出され。 ○さい目論 さい目は境目で土地の境界。さい目論は境界爭ひである。 ○ぎんすゝたけ 銀煤竹。染色の名。 ○利をかく 利子を出す。かくは汗をかく。賃をかく等のかくと同じ用法。 ○家具ぬし 家具は椀家具で今いふ家具商といふのとは少しちがふ。 專ら膳椀類を商ふのをいふ。家具ぬしはその店主。 ○男目 男奴。目は宛字だが西鶴はいつもこの宛字を用ひてゐる。 ○色子 色若衆、歌舞伎子。こゝの全文の意は「米薪はその日〳〵に當座買する位な貧世帶でありながら、贅澤にも酒の相手に色子どもを呼んでゐるが、その色子どもは可愛想に神ならぬ悲しさには、この貧乏人どもを銀の工面が十分出來る客と思つてゐるのだらう」。 ○染島 染縞。 ○鑢見世 小規模の兩替屋。 ○かい數 食物を器に盛る時その下に敷くもの。 多く植物の花葉を用ひる。 ○きんかん 金柑。 ○本客 本當に金のある客。 ○河原通ひ 四條河原の芝居見物。 ○分も立てず 支拂もすまさず。 ○最前引合したる云々 最前は只以前の意。本人たちは皆畫拔けしたり、座敷牢に入れられたり、自殺しそこなつたりといふさわぎで、とても遊興費を拂つて貰へさうにもないし、せめて最初この連中を紹介した太鼓もちにでも文句を言はうと思ふと、その太鼓もちまでが盜人の證人に立つたといふので、町内へ嚴重なことわりが來てゐる。請は請人。ことわりは理由を明かに言ひ通ずること。こゝは幇間が逃亡などせぬやう、その住んでゐる町の年寄などに、被害者側から嚴重に交渉しておいたのである。 ○島、寶舟、帆かけて 皆緣語でつゞけた筆拍子。 ○編笠三がい殘りて 百貫のかた(抵當)に編笠一蓋といふ諺によつた文。 ○かづき物 笠は被(かづ)く物だからその意と、損失を被る意とにかけていふ。

黑と玉虫と銀煤竹と三色の羽織の主を捉へて、ならぬ贅を張る者どもの、身のなれはてを寫した。都の顏見世芝居といへば、實際かうした內證かまはず騷ぎ廻る連中も少なくなかつたのだらう。さればこそ毎日同じ著物に色も變らぬ羽織の扮裝で、毎日芝居通ひをやつてゐるこの四五人に、色茶屋も早速目をつけたのである。だが怪しいと思つて茶屋の拂ひを請求した時はもう遲かつた。そして大晦日の決着は、一人は畫拔けして行方不明、一人はさしづめ準禁治產格の精神薄弱で座敷牢、一人は金策に困つた揚句が自殺をはかつて三面記事、せめて幇間にでも不足を言はうとすると、それさへ町內に監禁といふ有樣。茶屋はどこに取付かうやうもなく、金柑一つが銀二分にもなる事と心當てに算用した十五兩が、預けおいた編笠三蓋の代になつてしまつた。

この一篇は顏見世芝居の客と茶屋を中心にして、その大晦日の窮狀を寫したのではあるが、芝居の方が主となつてゐるために、大晦日の胸算用氣分は比較的濃厚でない。

二、年の內の餅ばなは詠め

善はいそげと、大晦日の掛乞手ばしこくまはらせける。けふの一日鐵のわらんじを破り、世界をいだてんのかけ廻るごとく商人は勢ひとつの物ぞかし。數年功者のいへり、惣じて掛は取よい所より集めて、埼明ず屋としれたる家へ仕廻にねだり込、言葉質とられて迷惑せぬやうに、先〻腹の立やうに持てくるとき、なほ物靜かに義理づめに外のはなしをせず、居間あがり口にゆるりと腰かけて、袋持に灯挑けさせて、何の因果に掛商人には生れきました、月額剃て正月した事なく、女房共は銀親の人質になして、手代に機嫌をとらせ、身過は外にも有へき事と、科もなき氏神をうらむ。御內證は存ぜねども、是の御內義樣は佛々、天井うらにさしたる餅ばなに春の心して、地鳥の鴨いりこ串貝、いづれ人の內は先さかなかけが目につく物じや。お小袖もなされ

ましたで御座りましよ、今は世間に皆紋所を葉付のぼたんと四つ銀杏の丸、女中がたのはやり物、其時々にならばして着たい、女房に衣裳、おまつお仕きせは、定めて柳すゝたけにみだれ桐の中がたで御座ろ。同じ奉公でもこんなお家に居合すが其身の仕合、かたわきには今に天人からくさ目にしむなどと、内義にものをいはすやうに仕かけて隙を入ければ、外の借錢乞のない間を見合、此くれには何方へも拂ひいたさね共、こなたは段々ことはりに至極いたした。來春女ぼう共が參宮いたすつかひ銀なれども、此とをりは進ずる、殘りは又三月前には帳を消して、笑ひ貌を見ますぞと、百目のうちへ六十目はわたすものなり。

【語釋】 ○善は急げ 諺。 ○今日の一日 大晦日たる今日の一日。 ○いだてん 韋駄天。 ○數年功者 數年掛取に經驗をつんだ者。 ○埒明かず屋 借金の埒が明かぬうち。即ちなか〳〵拂ってくれぬうち。 ○先より云々 先方から掛取が腹の立つやうに言葉を言掛けても、その場合には一層おちついて靜かに理窟づめに物を言ひ云々。 ○袋持 掛取が丁稚などに掛金を集め入れる袋を持たせ、供につれて歩くのである。 ○提灯消させ 急に立去らぬ樣子を見せるのである。 ○銀親 資本主。女房共は云々」といふのは萬一損でもして銀主へ金が返せぬ時は、その代りに女房を年期切つて奉公にやるなどゝ約定する類であらう。 ○お過 生業。 ○地鳥 その地で捕獲した鳥。他から買込んだ鳥より新しくて甘いわけである。 ○いりこ 煎海鼠。なまこの腸をとつて煮干しにしたもの。 日次紀事に「凡今日(元日)良鹿調味多用三鰤魚鯨魚數子煎海鼠(イリコ)串石決明(クシアハビ)並牛蒡大根等」。 ○ならば 出來るならば。 ○おまつ 下女の名。 ○柳煤竹 染色の名。 ○中形 模樣の中形なもの。小形よりいきである。 ○かたわきには 片脇か肩脇か。この語解しがたい。 ○天人唐草 模樣の名であらう。松竹梅を唐草にくづした模樣だともいふ。「傾城仕送大臣」(元祿十六年刊)巻六に、久藏といふ男が馴染の惣嫁に仕送る品々の中に「天人から草帶一筋」と見えるから、あまり上等のものではなく、中分以下の者の用ひるものと思はれる。 ○こなたは段々云々 お前の方は段々理由を聞いて見て成程道理至極に思ふ。 ○此通りは進ずる これだけの分は仕拂ふ。 ○三月前 三月の雛の節句前。

袋持に提灯消させてからの掛取の言葉が、少し解しにくいから口語譯をやつて見る。「何の因果でこんな掛商賣をする商人には生れましたらう。まだ月代でも剃つて人並の正月をした事もなく、家内は銀主に何時でも只奉公させねばならず、手代には又銀主の機嫌をとらせる氣苦勞が絶えません。こんな事をしなくても、商賣は外にも有りませうに」。次は「御内證は存じませんが、御宅の御内儀樣は私共の女房に比べたら佛樣ですよ。どんなに氣樂な事でせう。天井裏にさした餅花にはや正月の氣分がして、それにいづれ人の家では臺所の看掛が目につくものですが、御宅の看掛には地鳥の鴨にいりこ串貝、いかにも福々しいお看。この分ではもう正月小袖もお作りなさつたでせう。今は世間で紋所といへば、皆葉附の牡丹と四つ銀杏の丸とが、女中方の流行となつて居ます。誰しも出來るならば、その時々の流行模樣で着物を作つて着たいものです。女房には衣裳、下女にはおあてがひのお仕着せ、そのお仕着せもお宅などでは、定めしいきな銀煤竹に亂桐の中形模樣でございませう。同じ奉公でもこんなお家に居合すのがその身の仕合せです。肩や脇の天人唐草模樣なども、今でも目にしみていゝ柄です(かたわき以下は一寸解しかねる。今かりにかう解して見た)」。まづこんな調子であらう。かう口上手に持ちかけられては、おめ〳〵それでも拂へぬとは一す言へない。誠に數年功者の傳授ぶりである。

むかしは賣がけ百目あれば八十目すまし、此二十年ばかり以前は、半分たしかに濟しけるに、十年此かたは

四分拂いになり、近年は百目に三十目わたすにも、是非惡銀二粒はまぜてわたしける。人の心次第にさもしく、物かりながら迷惑はいたせど、商ひやめる外なく、又節季わすれて掛帳に付置ける。よろづ時世に替るもおかし。前々はならぬことはりを聞とゞけて、大晦日の夜半かぎりに仕廻、中比は又夜明方迄まはりて、掛乞といへば喧嘩をせざる家一軒もなし。此一兩年は更行まであるきはすれど、たがひに辭をたてず、ひそかにしまふ事に氣をつけて見るに、ないといふと無いに極まり、内證の事が兩隣へきこえる事もかまはず、借錢は大名も負せらるゝ浮世、千貫目に首きられたるためしなし。あつてやらずにおかるゝものか、此大釜に一歩一ばいほしや、根こそげにすます事じや、金銀ほど片行のするものはない。何としてか銀ににくまれした。一たびは榮へとうたひて、木枕鼓にして横に寐る男には、何とも取て付所なし。義理外聞を思はぬからは、埒のあかぬ事見定め、古掛は捨て當分のさし引、それをたがひに了簡して、腹たてずにしまふ事、人みなかしこき世とぞ成ける。

【語釋】 ○四分拂 百目の借金なら四十目しか拂はぬのである。 ○惡銀 品質の劣った銀貨。 ○物かりながら この下に「濟まさねば」等の語を補って見ねばならぬ。即ち掛で買つて居ながら、請求すると支拂ってくれないので。 ○迷惑致せど この下にもさうかといつて、「掛賣を一切止めにすれば」といふ意を補って解しなければならぬ。 ○ならぬことわり 支拂が出來ぬといふ申譯。 ○ひそかにしまふ云々 内密でかたがついてしまふので、變だと思ってその理由に氣をつけて見ると。 ○片行 一方にのみ偏する事。即ち金の有る所には益々金がふえ、無い所は益々貧乏になる事。 ○一度は榮え 謠曲杜若の文句「然れども世の中の一度は榮え一度は衰ふる理の」。 ○古掛は捨てゝ云々 古い掛金は帳消してしまつて、新しい近頃の分だけを勘定し。

人心が日と共に狡智に赴くさまを、昔と中頃と當世と比較して述べてゐる。近年は百目の賣錢が惡銀まぜて三十目しか取れぬとなれば、掛商賣も誠に經營難である。昔は埒の明かぬものは明かぬと正直に聞屆け、中頃は喧嘩口論しない家は一軒もないと言ふが、實は喧嘩する迄はまだお互に誠意がどこかにある。相手が取つて附く所もなくどろりと横にふて寢すれば、こちらも口きくだけ損と、古い掛はさらりと消して、當分の借金だけ勘定して要領よくすませて行く。かうなると五十目のものは百目にも掛帳につけて置かぬとおつゝかないだらう。特に何より掛取に廻る男が信用出來るものでないと困る。三分の支拂の上に掛取手代にまでごまかされては、それこそあがつたりだ。次節の内容は自らこゝに孕まれて來る。

つら〳〵世間を思ふに、隨分身になる手代よりは、愚かなる我子がましなり。子細は自然とまことあらはれ、銀集まれば皆わがものとおもふから、そこ〳〵にさいそくせず、身の働に私なし。扨また召つかひの若ひ者、よく〳〵親かた大事に思ひ、身の上を覺悟して、天理を知るは各別、大かたは主の爲になるものは稀なり。一日千金の色所にあそび、十分請取銀あれば、其内に不足こしらへ、あるひは小判のしかけ、又は銀子請取、掛を内へは錢つかふて歸るなど、親かたのたしかにしらぬ賣がけは死帳に付捨、さま〴〵にわたくしする事、いかに氣のつく主にても、それ程にはならぬものぞかし。又小商人の小者までも、いそがしき中にかけあらましにして、布袋屋のかるた一めん買て、道あるき〳〵八九どうに心覺へするもの、親かたに徳は付ぬ事也。掛乞にも色々の心ざし、よきものすくなし。人は盜人火は燒木の始末と、朝夕氣を付るが、智算用のかん

もんなり。

【語釋】 ○身になる 自分の身の爲めになる。 ○思ふから 思ふ故に。 ○そこ〳〵に云々 掛金をいゝかげんに催促せず、取れるだけは取らうとする。 ○親かた 主人。 ○頭の上を覺悟して云々 自分が家來たる身分を十分自覺し、天理を知つてこれに從ひ主人に忠を盡す者は格別の事。 ○一日千金の色所 多くの金銀を費す遊里。 ○小判のしかけ 小判の耳をとつたりしてごまかす事。 ○銀子請取掛を云々 こゝは解し難い。文面から察してどうも脫文があるらしい。强ひて脫文を補つてみると、「内へは」の下に「取らなかつたと言つて、實はその受取つた」などいふ意の文があるべきだらう。 ○死帳 損失に歸した金額を記しておく帳面。 ○わたくしする 私利をはかる。 ○かけあらましにして 掛金の取立はよい加減にして。 ○布袋屋のかるた 當時カルタを賣る店としては布袋屋が最も名高かつた。 ○八・九・どう カルタの札を裏から見ても分るやうにどこか心覺えになる點を見ておくのである。 ○色々の心ざし 種々の考があつての意。 ○人は盜人火は燒亡(ジヤウモウ)」といふ諺にかけて言つたのである。 ○かんもん 肝文。最も大切な事。

掛乞の種々相である。かう考へて見ると成程怜悧な手代より、馬鹿な我が子の方がましである。而して要は誠意の有無に歸する。人を使へば苦を使ふで、主人たるものゝ心勞も一通りでない。「銀子請取云々」の文句は解しがたいが、これは確かに西鶴の脫漏である。西鶴の頭は屢々言ふ通り、あまり早く次から次へと働きすぎるので、つい筆がそれに追附かないでしまふといふ場合がある。それが彼一流の簡勁無比な文體を作つたのではあるが、彼の草稿をそのまゝ出版した場合には、脫漏が補はれないで、かうした晦澁をも招致する。そんな例は彼の生前に出版されたものでも、決して少くない。「五人女」などは特に分らぬ所が多い。さうかと思ふと「一目玉鉾」などには重複した個所もある。どうも西鶴の頭は天才的であるだけ、やゝ狂的な所もあつたらしく思はれる。隨つて通じ難い文面を强ひて何とか解しようとするのは、實に寧ろ無意味である事を知つて置かねばならない。

骨牌の事が一寸出て來たからついでに言ふ。骨牌に關する智識は江戸時代の文學をよむ上に、屢々必要を感ずる事であるが、ものが賭博に關する事だけに、古くからその使用法などを說いたものがない。それで實はこの八・九・どうなどもどんな札でどんなに使はれるのか、詳しくは知り難い。しかしこれはウンスンカルタから出ためくりカルタらしく、とにかく重要な札であらう。布袋屋のことは、懷硯にも「舟人が櫓米櫃より布袋屋骨牌の十馬八九の足らぬ取集め物を出しければ」とあり、傾城禁短氣によれば「布袋屋の骨牌代一匁二分」とあるから、小者丁稚の小遣にしては一匁二分のカルタ代はかなり大きい。なほ當時のカルタ屋は「俳諧引導集」(貞享元年刊)に「今時のかるた屋、布袋屋・松葉屋・笹屋」とあつて、三軒が最も知られて居たらしい。松葉屋のカルタは「五人女」の八百屋お七の條にも見えるから、江戸にも支店があつたのだらう。

爰に請取普請の日用がしらに、ふるなの忠六といふ男、常にかるロたゝき、町の藝者といはれて、月待日まちに物まねして、人の氣に入ける。此大晦日しまひかね、さる方へ銀五百目申上げれば、やすい事と請合給へば、夜に入御見まひ申し、あゝらたのしや、今宵琴の音をきけば、年のよらぬ仙家の心地、當地ひろしと申せども、此御内かたならでは外になし。金銀まん〳〵として、四方に實藏、かくれみのかくれ笠、うち出の小槌は針口の音、福々旦那とひろ敷にかしこまる。やうありそうなる忠六、此事かと五百目包なげ出せば、かたじ

けなしといはふて三度おしいたゞき、御蔭でとしを鶏がなく、おいとま申してさらばとて、門口まで出かけるが、ちよこ〳〵と立歸り、奥様へ有がたがりましたと、よろしくたのみたて奉る、腰元衆といふ時、仲居のきちが、何と忠六どの、よろこびの折なればといふ。一まひ舞ましよと、目出たいづくしを長々といふうちに、北國より重手代歸りて、只今二百貫御くらやしきへわたすぞ。米は追附のぼると仕合、かねよ〳〵、けふ奥にも琴の小うたの所か、さあ銀のせんさくせよといふとき、忠六あがり口に置たる五百目包をとりあげて、是はたくさんなる銀子、何のために捨置事ぞ。高は二百貫目入ぞそれほど手前に有かないか。なくば手わけして才覺せよ。かねよ〳〵と氣をいらちければ、忠六不首尾せんかたもなく、長居はおそれありといふて、手ぶりで歸りける。

【語釋】 ○請取普請　棟梁にうけ負はせてやらせる普請。 ○日用がしら　日傭人足のかしら。 ○ふるなの忠六　おしやべりだから舌第一の富樓那を渾名につけたのである。 ○町の藝者　町内での藝人。 ○月待日待　月祭日祭の轉訛だといふ。江戸時代にはこれが一の娯樂日となり、町内で順番に、當番の家に集つて、酒食したり藝盡しをやつたりして樂しんだのである。 ○銀五百目申上れば　銀五百目の無心を申上げると。 ○あゝら樂しや　以下一寸平安朝時代の庚申見たやうな風であつた。 ○銀百目の無心を申上げると。忠六が例の輕口の追從口である。 ○針口の普　當時の天秤は平衡を得る爲めに針口を小槌で叩いたので、それを打出の小槌に見立てゝ言つたのである。 ○廣敷　臺所の上り口につゞいた板敷の間をいふ。 ○やうありさうなる忠六、此事か　且那の調○いはふて　祝うて。 ○としを鶏がなく　年を取るにいひかく。 ○喜びの折なればといふ　喜びの折だから何か一つ藏をして行けと言ふ。 ○御藏屋敷　大名の米藏を管理する屋敷。大名の領地から産する米や重要産物はこゝに收められたので、諸大名の藏屋敷は皆大阪堂島にあつた。 ○米は追附のぼると仕合云々　二百貫目の代金と引換に大阪から米が上ると、その米で儲かるのだ。だからまづ金だ〳〵。 ○長居はおそれ　諺。 ○手ぶり　素手、手ぶら。

この一節は主人のためになる手代の話であるから、前段と自ら關係をもつてゐるわけではあるが、全く獨立した興味をもつた一挿話となつて居る。そして一篇中こゝが一番西鶴も乘氣になつて書いてゐるやうだ。忠六のおつちよこちよい、旦那の鷹揚、仲居のきちが物馴れ顔、それから手代の大久保彦左衛門式な苦手ぶり、それらの面目が短い中によく活躍してゐる。輕く筆をとめた結末は、例によつてうまいものだ。

三　小判は寐姿の夢

夢にも身過の事をわするなと、是長者の言葉也。思ふ事をかならず夢に見るに、うれしき事有、悲しき時あり。さま〴〵の中に、銀拾ふ夢はさもしき所有。今の世に落する人はなし。それ〳〵に命とおもふて、大事に懸る事ぞかし。いかな〳〵万日廻向の果たる場にも、天滿祭りの明る日も、錢が一文落てなし。兎角我はたらきならでは出る事なし。さる貧者世のかせぎは外になし、一足とびに分限に成事を思ひ、此まへ江戸にありし時、駿河町みせに、裸銀山のごとくなるを見し事今にわすれず、あはれことしのくれには其銀のかたまりほしや、敷革の上に新小判が、我等が寐姿程有しと、一心によの事なしに紙ぶすまのうへに臥ける。比は十二月晦日の明ぼのに、女ぼうはひとり目覺めて、けふの日いかにたてがたしと、身體の取置を案じ、窓より東あかりのさすかた見れば、何かはしらず小判一かたまり、是はしたり〳〵、天のあたへとうれしく、こちの人〳〵と呼起しければ、何ぞといふ聲の下より、小判は消てなかりき。扨も惜やと悔み、男に此事を語れば、我江戸で

見し金子、ほしや〳〵と思ひ込し一念、しばし小判類はれしぞ。今の悲さならば、たとへ後世は取はづし、ならくへ沈むとも、佐夜の中山にありし無間のかねをつきてなりとも、先此世をたすかりたし。目前に福人は極樂、貧者は地ごく釜の下へ燒ものさへあらず、扨も悲しき年のくれやと、我と惡心發れば魂入替り、すこしまどろむうちに、黒白の鬼車をとゞろかし、あの世この世の境を見せける。

【語釋】 ○今の世に　下に「金を」の二字を補うて見ねばならぬ。落する人は文法上誤りだが、西鶴には此種の四段活用の連體形を上二段や下二段の連體形と同樣に誤用した例はなほ多い。 ○萬日廻向　ある數日間の廻向が萬日の廻向に當るなどゝ言つて大きい寺院で時々法會を儀す事があつた。その折には大勢の參詣人が群集するのが常であつた。 ○天滿祭　大阪天滿神社の祭禮。毎年六月二十五日に行はれ、御旅所夷島まで神輿が舟で渡御する。大阪の夏祭としで最も盛んなものであつた。 ○世のかせぎは外になし　生業に骨折ることは打捨てゝ。 ○駿河町みせ　駿河町には銀座があり兩替店も多かつたので、そこに新吹(新鑄造)の貨幣が積んであつたのを見たのである。 ○よの事　餘の事、他事。 ○いかにたてがたし云々　今日の大晦日をどうして暮す事が出來よう、とても借金は拂へないしと、經濟上のやりくりを考へ。 ○こちの人　妻が夫を呼ぶ樣。 ○しばし小判　下に「と」字を脱したのである。 ○ならく　奈落、地獄。 ○佐夜の中山に云々　遠州佐夜の中山北光明山の鐘を撞くと、現世では福德を得るけれども、後世は無間地獄に墮ちるといふ傳說がある。 ○釜の下　地獄の釜にかく。

狂人の夢も一心凝つては、遂に女房の目に幻とうつるまでになつた。それは馬鹿氣た空想の夢ではなくて、現實に迫つた物凄いあがきである。何かしら恐しい鬼氣を感ぜずには居れない。西鶴の筆の力がそこにあるのだ。

女房此有さまを猶なげき、我男に教訓して、世に誰か百まで生る人なし、然ればよしなき願ひする事愚かなり。たがひの心替らずば、行末に目出たく年も取べし。わが手前を思しめしてさぞ口おしかるべし。されども此まゝありては、三人ともに渴命におよべば、ひとりある躰が後々のためにもよし、奉公の口あること幸はひなれ、何とぞあれを手にかけてそだて給はゞ、末のたのしみ、捨るはむごい事なれば、ひとへに賴みますと泪をこぼせば、男の身にしては悲しく、とかふのことばもなく目をふさぎ、女房良を見ぬ所へ、墨染邊に居る人置のかゝが、六十あまりの祖母さまをつれだち來て、きのふも申通り、こなたは乳ぶくろもよいによつて、がらりに八十五匁、四度の御仕着せまでかたじけない事とおもはしやれ。雲つく樣な飯たきが、布迄織まして半季が三十二匁、何事も乳のかげじやと思はしやれ。又こなたがいやなれば、京町の上にも見立て置ました。けふの事なれば、またといふ事はならぬと云。內義きげんよく、何をいたしますも身をたすかるためで御座ります、大事の若子さまを預りましても、何と御座りましよ。私はなる程御奉公の望といへば、男には物をいはず、すこしもはやくあなたへと、となりの硯かつて來て、一年の手形を極め、殘らず銀渡して、彼かゝ手ばしかく、後といふも同じ事、是は世界が此通りの御定と、八十五匁數三十七と書付のある內、八匁五分りんと取て、さあおうばどの身ごしらへまでない事とつれ行くとき、男も泪、女は赤面して、おまんさらばよ、かゝは旦那さまへ行て、正月に來てあそぶぞよといひ捨て、何やら兩隣へ賴みて又泣ける。人置は心つよく、親はなけれど子はそだつ、うちころしても死ぬものは死ませぬぞ、御亭さまさらばとばかりに出て行。此かみ樣世を觀じ、我孫のふびんなも、人の子の乳ばなれしかはゆやと見歸り給へば、それは銀がかたき、あの娘は死次

第と、其母おやがきくもかまはずつれ行ける。

【語釋】 ○我男　わが夫。 ○誰か……なし「誰か……あらむ」と反語にすべきを、すぐ「なし」と否定にしてしまふのは例の西鶴特有の語法。 ○わが手前を思召して　私（即ち女房）の手前をはづかしく思つて。 ○湯命　飢渇。 ○ひとりある云々　一人の息子の將來のためにもよいし、幸ひ私の奉公口があるからそこへ奉公しませう。あなたは何卒乳呑子を養育して下さい。そしたら末の樂しみになります。今くらしに困つて乳呑子を捨てるのは酷い事ですから、私の考へ通りにひとへに賴みます。 ○とかふ　とやかくの。 ○女房顔を　女房の顔をの誤であらう。 ○人置　遊女奉公人等の周旋をする口入屋。多くは中年過ぎた女がやつた。 ○がらりに　給銀をすつかり前拂ひにして渡すこと。好色貝合下「凡そ色女の給分今は衰へて三百目より八十匁までのがあるなり。わけて見よいのはかしらに給銀皆取るがらりといふ也。」 ○こなた　この奉公口。 ○京町　伏見の町名。 ○今日の事なれば云々　今日すぐに極めなければならぬ奉公口だから、今いやと言つておいて、後で又と頼む事は出來ぬ。 ○大事の若子樣を云々　大事の坊ちやんをお預りしましてもどんな物でせう、どうせ無調法者とは思ひますが、私は斷じて乳母奉公にあがりたい氣です。 ○一年の手形　一年間奉公するといふ證文。 ○八十五匁數三十七　細粒銀の數が三十七で合計八十五匁あるのである。 ○りんと取て　りんとは天秤に貨幣をかけて量る時、一分一厘のちがひもなくきちんと量るさまに言ふ語。一八匁五分きつちりと受取つて」の意。 ○おうばどの　お乳母殿。 ○おまん　子供の名である。 ○親はなければ子は育つ　諺。 ○此かみ樣　かみ樣とは色道大鏡に「地下人の妻女を上樣といふ」とあり、俚言集覽にも「人の妻をカミサンといふ」とあるが、西鶴時代の用例から見ると、いつも後室や隱居の母を言つて居る。このかみ樣といふのは人置屋がつれ立つて來た六十あまりの組母樣の事で、乳母につける子の組母である。 ○世を觀じ　世のあはれを觀じ。 ○我孫の云々　自分の孫が可愛いゝのも。人の子の可愛いゝのも同じ事で、自分の孫のためにあの子が乳離れするのは可愛相だ。 ○銀が仇　諺。金錢は仇敵のやうなもので、そのために苦しまねばならぬとの意。金が有るために苦しめられる場合にも、無くて身を賣るやうな場合にも、いづれにもいふ。

金のため奉公に身を賣られて行く、そして夫や子供との生別れといふ寧ろ月並な悲劇の場面だが、働きのない亭主その亭主に誠を盡す可憐な女房、慈悲や情はどこかへ置忘れたやうな人置嬶、それらの口吻が極めて巧に描かれて居る。後にといつてもどうせ拂ふ口入料だ、世間の定め通り一割の手數料を今貰ひますと、早速八匁五分とつてしまふのなどは、いかにも强欲らしい。當時すべて養子緣組奉公口等の周旋料は、その敷銀若くは給銀の一割と定まつてゐた。それで十分一銀とも言ふ。永代藏卷一に「十分一銀出して嫁呼ぶ方へ遣しけるは、內證心もとなし」とあるのはそれである。さて最後に「それは銀が仇、あの娘は死次第」と捨臺詞して行くに至つては、徹底した無人情ぶりである。隱居の祖母は一寸不用な人物らしいが、こゝに人置嬶の捨臺詞を點出させるだけの用をつとめてゐる。

程なふ大晦日の暮がたに此男無常發り、我大分のゆづり物を取ながら、胸算用のあしきゆへ江戸を立のき、伏見の里に住けるも、女房共が情故ぞかし。大ぶくばかりいわふて成とも、あら玉の春にふたりあふこそ樂しみなれ。心ざしのあはれや、かんばし二ぜん買置しが、棚のはしに見えけるを取て、一ぜんはいらぬ正月よと、へし折て鍋の下へぞ燒ける。夜ふけて此子泣やまねば、となりのかたといよりて、摺粉にぢわうせん入て燒かへし、竹の管にて飲す事をおしへ、はや一日の間に、思ひなしかおとがひがやせたといふ。此男扨も是非なしと、心腹立ちて手に持たる火ばしを庭へなげける。お亭さまはいとしや、お內義樣は果報、さきの旦那殿がき

れいなる女房をつかふ事がすきじや。ことに此中おはてなされた奥様に似た所がある、本にうしろつきのしほらしき所が其まゝといへば、此男聞もあへず、最前の銀は其まゝあり、それをきいてからはたゝへ命がはて次第と、かけ出し行て、女ぼう取返して泪で手を取ける。

【語釋】 ○大ぶく　大福茶。又大服とも書く。日次紀事「以二此湯一（此湯とは若水を煮た福茶をさす）點レ茶、或漬二鹽梅於茗椀之内一、而合家飲レ之、又献二賀客一、是謂二大服一、用レ梅高年後面皮生レ皺而欲レ倣二鹽梅之皺面一也」。○いわふて　祝うて。○心ざしのあはれや　女房が夫と共に雑煮を祝はうと、雑煮箸を二人前買つて置いた心ざしを思ひやつた言葉。○かん箸　雑煮箸。又太箸（フトバシ）ともいふ。年始に用ひる箸はすべて若通より太く作るからである。かんは熨で雑煮のこと。（前出二〇頁、かんは神かと釋した説は取消す）。○といよりて　訪寄りて。○摺粉　母乳のない兒に飲ませるために米を粉末に磨り碎いたもの。○ぢわうせん　地黄煎　飴の一種、元來地黄の汁を用ひて練り製したものであるが、後には只の水で練つてこしらへた。摺粉に甘味をつけるためこれを加へてたき返すのである。（地黄煎の事は薩州府志土産門に詳しく見える）。○心腹立ちて人相手でなく自分だけで腹が立つこと。

働きのないくせに情には脆さうな男である。箸一膳へし折つて暗然たる氣持に沈んで行く。そこへ子供は乳を求めて泣く。「はや一日の間に思ひなしか頭が痛せました」と言はれては、扨も是非ない世と、誰を恨むともなく火箸を投げ出して身の不遇を慨歎した。それでも腹はかへられぬ、女房が奉公に出てくれたればこそ、大枚手取七十六匁五分の銀で年が取れるといふものだ。だが「ほんに御亭さまはお氣の毒、それとかはつてお内儀様は仕合せです」こと。奉公先の旦那殿が美しい女を召使ふ事がすきで、特にこちの御内儀はこの頃なくなられた奥様によく似た所がある。ほんに後妾のしとらしい所などは奥様にそのまゝですもの。嘸旦那殿に可愛がられる事でせうよ」とそこまで聞いては、元來女房にまゐつてゐる男のこと、女房を人に可愛がらせては死んだがましと、早速かけ出した。この結末もうまい。惣じてこの一篇は生活苦の陰惨なかげが、特に濃く漂つてゐる。

四　神さへ御目違ひ

諸國の神々毎年十月出雲の大社に集り給ひて、民安全の相談あそばし、國々への年徳の神極め、春の事どもを取いそぎ給ふに、京江戸大坂三ケの津へのとし神は、中にも徳のそなはりしをゑらみ出し、奈良堺へも老功の神達、又長崎大津伏見それ〳〵に神役わけて、さて一國一城の所、あるひは船着山市はんぢやうの里々を見たて、其外都にはるかに島住、ひさしの一つ屋までも、餅つきて松たてつる門に、春のいたらんといふ事なし。しかし年徳も上方へは面々に望み、田舎の正月は嫌い給ふぞかし。いづれふたつ取には、萬につけて都の事は各別也。世の月日の暮るゝ事流るゝ水のごとし、程なく年波打よせて、極月の末には成ける。されば泉州の堺は、朝夕身の上大事にかけ、胸算用にゆだんなく、万事の商賣うちばにかまへ、表向は格子作りにしまふた屋と見せて、内證を奥深う、年中入帳の銀高つもりて世帯まかなふ事也。たとへば娘の子持ては、疱瘡して後形を見極め、十人並に人がましう當世女房に生れ付と思へば、はや三歳五歳より毎年に娌入衣裳をこしらへける。又形おもはしからぬ娘は、おとこ只は請とらぬ事を分別して、敷銀を心當にかし商ひ事外にいたし置縁付の時分さのみ大義になきやうに、覺悟よろしき仕かたなり。是によつて棟に棟次第にたちつゞき、こけら

葺のやねもそこねぬうちにさしぐれしたり、柱も朽ぬ時より石で根つぎをして、軒の銅樋數年心がけて、德を見すましていたせし手紬の不斷着、起居せはしからねば是きるゝ事なく、風俗しとやかに見へて身の勝手よし。諸道具代々持傳えければ、年わすれの茶の湯振舞、世間へは花車に聞えて、さのみ物の入るにもあらず、年々世渡りをかしこうしつけたる所なり。よきくらしの人さへかくあれば、まして身體かるき家々は、そろばん枕に寢た間も、のびちゞみの大節季を忘るゝ事もなく、臺碓の赤米を紅葉の秋と詠め、目まへの櫻鯛は、見たがるの者に見せよと毎夜魚荷にのぼし、客なしには江鮒も土くさいとて買ぬ所ぞかし。山ばかりの京には眞鯉も喰、海近き爰には磯ものにて埼を明ける。

【語釋】 ○年德の神　歲德神、その年の吉方(エハウ)を司る神。 ○三ケの津　津は人の多く集る場所の意。京・江戸・大阪は江戸時代の三大都市として、特に三ケ津と呼ばれた。 ○とし神　年德神。 ○奈良堺へも云々、長崎大津伏見云々　これらの地も要路にある都會若くは貿易港として、特に殷賑であつたのである。 ○一國一城の所　城下町。 ○山市　山間の都市。 ○はんぢやう　繁昌。 ○ひさしの一つ屋　「濱庇の一つ屋」などの誤であらう。 ○ふたつどりには　二者の中いづれか一方を選ぶならば。即ち田舍か都會かどつちかといふなら、いづれ都は田舍と格別のちがひでよいとの意。 ○年波打よせ　年月の經るのを波の打寄せるのに喩へた言ひ方。 ○しまうた屋　嬉遊笑覽「商ひせざる町人をしもたやと云はしまうたやを約めて云ふなり」。商賣をやめた家の意。 ○入帳　收入の金額を記入する帳面。 ○人がましう　人並らしく。 ○當世女房　當世風の女。この女房は只女の義。 ○男只は受取らぬ　持參金でもうんと持つて來ないと嫁にとる男がない。 ○りかし　利貸。こゝの全文は「持參金とするつもりで、別に利足貸しの商ひ事をしておいて」の意。 ○こけら葺　こけら(柿、薄くへいだ木片)で葺いた屋根。 ○さしぐれ　くれは榑板。古くなつた柿をさしかへる事か。江戸八百韻に「鈴鹿を守りし軒のさし板」とあるさし板も同じものか。 ○石で根つぎ　丈夫なことの喩へにいふ諺。 ○德を見すまして致せし　この一句は元來上につゞく文句だらう。銅樋は普通の樋より高價ではあるが、永く保つので結局德になるといふことを、數年氣をつけてためして見て、すつかり樋を銅樋にしかへるといふ意と思はれる。 それを例の西鶴のテムポの速い筆法から、すぐ下へつゞけてしまつたのであらう。 ○手紬　手織の紬。 ○風俗　衣裳つき。身なり。 ○年忘れ　歲末に親戚朋友を會して宴を設け、年の行くを送ること。 ○花車　上品、優雅。 ○さのみ物の入るにあらず　そんなに費用のかゝる事でもない。 ○のび縮みの大節季　金銀がふえたりへつたりする大晦日。 ○臺碓　地に埋めないで臺を附けて動かぬやうにした碓。 ○赤米　赤味を帶びた下等米。大唐米などの類。 ○目まへの櫻鯛　堺のすぐ前の海でとれる櫻鯛。櫻は前の紅葉に對した語。 ○魚荷にのぼし　魚荷として京へ上し。 ○江鮒　鮒に同じ。 ○磯もの　海岸近くでとれる小魚などをいふ。 ○いたらん(補)至らぬ。ぬをんとした例西鶴にはなほ多い

年德神の振分け方に筆を起して、堺が三ケ津についで重んぜられて居る事を述べ、さて堺の商人氣質をこまゝゝと說いた。堺は室町時代からの貿易港であつたので、江戸時代になつても內福な商人が多かつたのである。そして萬事を內端にして派手ではないが、手堅く利殖をはかるといふ風であつた。永代藏にも「人の身しとやかにして、十露盤うつゝにも忘れず、內證細かに見かけ綺麗に住みなし、物每義理を立てゝ隨分花車なる所なり。然れども年のよる所にて外より行きて住家はなり難し」と評して居る。さうした內福な家の多い堺に、二つ取ならと應募した年德神も多かつた事だらう。堺の町ならどこへはひり込んでも相當の待遇は受けるべき筈だ。なまじ京大坂の塵末の家などに祭られるより、よつぽどうまい目に會ふだらうと、神ならぬ身ではない神なる身さへが、お目違ひしようといふのだ。

なか〳〵油斷のならぬ世の中である。

惣じての事燈臺元くらし、大晦日の夜のけしき、大かたに見せ付のよき商人の宿へ、年德の神の役なれば、案内なしに正月仕にはいつて見れば、恵方棚は釣ながらともしびもあげず、何とやら物さびしく、氣味のあしき内なれども、爰と見立て入ければ、又外の家に行て相宿もうれしからず、何といはねけるぞこ、しばらくやうすを見しに、門の戸のなるたびに女房びく〳〵して、まだ歸られませぬ、さい〳〵足をひかせましてかなしう御座ると、いづれにも同じことはりいひて歸しける。程なく夜半も過、明ぼのになれば、掛乞とも爰に集まり、亭主はまだかまだかと、おそろしき聲を立る所へ、でつち大息つぎて歸り、旦那殿はすけ松の中程にて、大男が四五人して松の中へ引込、命が惜くばといふ聲を聞捨てにして、逃て歸りましたといふ。内義おどろき、おのれ主のころさるゝに、男と生れて淺間しやと泣出せば、かけ乞ひとり〳〵出て行。夜はしらりと明ける。此女房人歸りし跡にて、さのみなげくけしきなし。時にでつちふところより袋なげ出し、在郷もつまりまして、やう〳〵と銀三十五匁六百取つまていつたといふ。まことに手だてする家につかはれければ、内のものまでも衒同然になりける。亭主は納戸のすみに隱れゐて、因果物がたりの書物くり返し〳〵讀つゞけて、美濃の國不破の宿にて、貧なる浪人の年を取かね、妻子さし殺したる所、ことに哀れに悲しく、いづれ死もしさうなるものと、我身につまされ、人しれず泣けるが、掛乞はみな了簡していにましたといふこゑに、すこし心定まりて、ふるひ〳〵立出、さて〳〵けふ一日に年をよらせしと、悔みて歸らぬ事をなげき、餘所には雜煮をい

はふ時分に、米貫燒木とゝのへ、元日も常の飯たきて、やう〳〵二日の朝、雜煮して佛にも神にも進じ、此家の嘉例にて、もはや十年ばかりも元日を二日に祝ひます、神の折敷が古くとも堪忍をなされとて、夕めしなしにすましける。

【語釋】 ○燈臺元くらし 諺。燈臺は燭臺に同じ。 ○大かたに見せ付のよき 大がい店の樣子も宜さゝうな。 ○恵方棚 歳德神を祭る棚。 ○爰と見立てゝ。 この家に入らうと見立てゝ。 ○相宿 外の年德神と一しょに宿する意。 ○何とやら物さびしく、氣味のあしるぞ どんな風に自分を祭つてくれるだらう。けると過去形にしたのは西鶴の例の筆癖。 ○さい〳〵 度々。 ○いづれにも誰にも。 ○すけ松 堺附近の松原の名であらう。 ○命が惜くば 强盜の言葉。「命が惜くば金を出せ」といふ言葉を昔まで聞かずに逃げて來たといふのである。 ○しらりと 白々と。 ○在郷も云々 在郷は田舍。田舍も金融逼迫で。 ○因果物語 鈴木正三の著、寛文元年刊。因果應報の物語を集めたもの。但しこの浪人の話は一寸見當らないやうである。 ○すこし心定まりて 少し心が落付いて。 ○折敷 片板(ヘギイタ)で作つた食器をのせる方形の盆。

「燈臺元くらし」といふ一句は上文の、海近い堺の人が海の魚を食はないで、山ばかりの京の人が却つてこれを食ふといふ事を承け、更に年の吉方を司る神が、自分の運は分らずに貧家にはひり込んだ事を言ひ起して居る。丁稚に言含めての狂言は、即ち大晦日の苦しいやりくりだが、納戸に隱れて因果物語に涙を落す亭主は、案外氣が小さい。まづこれは内儀のたくんだ狂言らしく、隨つてこの亭主もどうせはたらきのなささうな男だ。「此家の嘉例で元日を二日に祝ひます」とは、さて〳〵苦しい言譯、古い折敷はまづ堪忍もしようが、夕飯なしにすまされては、神も正月早々ひもじい目にあはされた事だ。

神の眼にも是程の貧家とはしらず、三ケ日の立事を待かね、四日に此家を立出て、今宮の恵美酒殿へ尋入り、さても〳〵見かけによらぬ悲しき宿の正月をいたしたと、うき物語あそばしければ、こなたも年こしをしてこしめす程にもない事哉、人のうちの見たて、めしあはせの戸の白からず、内義が下女のきげん取て、疊のへりのきれたる家にては、年をとらぬもので御ざる。廣ひ堺中でかゝる貧者は四五人の所へ、不仕合の神棚、われは世界の商人が心ざしの酒と掛鯛にて、口を直して出雲の國へ歸らせ給へと、馳走して留させられしを、十日ゑびすの朝とく參詣したる人、内陣のおものがたりを聞て歸りける。神にさへ此どとく貧福のさかいあれば、況人間の身の上定めがたきうきよなれば、定まりし家職に油斷なく、一とせに一度の年神に、不自由を見せぬやうにかせぐべし。

【語釋】 ○今宮　大阪今宮の戎神社。攝津の西宮と共に戎神社として最も名高い。 ○こなたも云々　あなたも年來年徳神として家々で正月を迎へ、世を送つて來た程にもない事だ。上の年こしは正月を迎へること。下のこしは年月を經る意。めすは敬語。 ○めしあはせの戸　兩方から引合せて閉すやうにした二枚立の戸。 ○われは世界の云々　こゝは脫文があるのだらう、このまゝでは文脈がつゞかぬ。強ひて解すれば、「自分は世間の商人達が志として差上げた酒と掛鯛で滿腹してゐる。あなたもその酒と掛鯛で口を直して云々とでもいふべき所。 ○十日戎　毎年正月十日に西宮・今宮などの恵比須に參詣するのを十日えびすといふ。又十月廿日に參るのを廿日えびすともいふ。 ○内陣　神社佛閣で結界より奥の方の神佛を祭つた所。

人の家の見立ては、年徳神より恵美須樣の方が上手であつた。召合の戸が黑く疊の縁の切れてゐるのは、内證のつまつた證據で、内儀が下女の機嫌をとるに至つては、給銀不拂の結果と見て差支ない。「神にさへ此の如くの云々」といふ最後の一節は、すいも甘いもかみ分けた西鶴の、落ちついた異見を聞くやうである。

胸算用　大晦日は一日千金　卷四

目錄

一、闇の夜の惡口
世に有人の衣くばり
地車に引隱居銀
二、奈良の庭竈
萬事正月拂ひそよし
山路を越る數の子

三、亭主の入替り
下り舟の乘合噺
分別してひとり機嫌

四、長崎の柱餅
禮扇子は明る事なし
小見せものはしれた孔雀

一　闇の夜のわるロ

所ならはしとて、關東に定置て大晦日に祭り有。津の國西の宮の居籠り、豐前の國はやともの和布刈、又丹波のおく山家に緣付をする里有。むかしは年のくれに靈祭りして、いそがしき片手に香はなをとゝのへ、神の折敷と麻がらの箸と取まぜてのせはしさに、其ころのかしこき人、極樂へことはりなしに七月十四日に替ける。今の智惠ならば、春秋の彼岸のうちに祭るべし。末々の世まで何ほど德の行事もしれがたし。大坂生玉のまつり九月九日に定め置れ、幸はひ家々に給燒ものもする日なり、我人の祝儀なれば客人とてもあらず、年々に此德つもりて大分の事ぞかし。氏子の粧をかんがへ、神も胸算用にてかくはあそばし置れし。又都の祇園殿に、大年の夜けづりかけの神事とて諸人詣でける。神前のともし火くらふして、たがひに人貌の見えぬとき、參りの老若男女左右にたちわかれ、惡口のさま〳〵云かちに、それは〳〵腹かゝへる事なり。おのれはな、三ケ日の内に餅が喉につまつて、鳥部野へ葬禮するわいやい。おどれは又人寶の請でな、同罪に聚田口へ馬にのつて行くわい。やいおのれが女房はな、元日に氣がちがふて、子を井戸へはめおるぞ。おのれはな、火の車でつれにきてな、鬼のかうのものになりをるわい。おのれが父は町の番太をしたや。つじやおのれがかゝは寺の大こくの果てじや。おのれが弟はな、街云の挾箱もちじや。おのれが伯母は子おろし屋をしをるわい。おのれが姉は福せすに味噌買に行とて、道でころびをるわいやい。いづれ口がましう、何やかや取まぜていふ事つきず。中にも二十七八なる若ひ男、人にすぐれて口拍子よく、何人出ても云すくめられ、後には相手になるものなし。時にひだりの方の松の木の陰より。そこなおとこよ、正月布子したものとおなじやうに口をきくな。見れば此寒きに、綿入着ずに何を申ぞと、すいりように云けるに、自然と此男が肝にこたへ、返す言葉もなくて、大勢の中へかくれて、一度にどつと笑はれける。是をおもふに、人の身のうへに、まことほど耻かしきものはなし。とかく大晦日の闇を、足もとの赤ひうちから合點して、かせぐに追付貧乏なし。

【語釋】　○關東に定め置きて大晦日に祭有り　この祭といふのは、何祭をさすのか不詳。後考を俟つ。　○居籠り　和漢三才圖會、西宮の祭に「祭正月十日、村民自二九日朝一至レ夜閉レ戸不二出入一、謂二之居籠一、亦一異也」とある。攝陽詳談にも「武庫郡西宮

村社、毎歳正月九日神拜姪兒祭廣田の社に臨幸、容相の異なるを惡み給て、人倫の所レ見恥給ふの諺となつて、村民戸を閉て不レ出二外に一、門松を逆に建、忌籠(イゴモリ)の祭と云」とあるから、これは西鶴が普通の年籠と混じて誤つたのであらう。○早稲の和布刈　長門赤間關和布刈神社の神事として、除夜の夜半神主が炬火を擧げ鎌を携へて神前の石燈を下りて海中に入り、和布を刈つて來てこれを神前に奏する式がある。○年の暮に靈祭りして　報恩經に亡者が十二月晦日の午時に來て元日の卯時に歸るといふ説があるのから、昔は大晦日に魂祭をしたのである。枕草子にも「樸葉の(中略)しはすつごもりにしも時めきて、なき人のくひ物にも敷くにやとあはれなるに」とあり、中古時代までは一般に行はれて居たが、後だん〳〵すたれて室町時代には稀かに關東地方にその風の遺つて居た事が徒然草に見える。○麻がらの箸　盆の精靈祭には麻がらの箸をそなへる。○何程德の行くも知れがたし　どの位德になる事か分らぬ。○生玉の祭　大阪生玉神社の祭禮、九月九日に行はれる。○我人の祝儀なれば云々　我も人も同じく祝ふ日だから、他から客に來る人もない。○大年　大晦日。○削掛の神事　日次紀事「今夜(大晦日の夜)子刻祇園社神前燈燭之外悉滅火暗中參詣人咨レ口而斥二言他人根葉一、假令雖レ聞二其聲一知レ其人一、不レ爭レ之不レ恨レ之、是懺悔義而勸善懲惡意乎」。又山城四季物語「晦日の夕は祇園の社に(中略)此わたりのわらはべのしわざに八九寸ばかりの木を削りて手毎に持ち、これを削掛と言ひて、人の耳逆ふる事をいひのゝしり、夜半過ぐるまでに人の門たゝきありくが、年の名殘もとよひばかりと思へるにや、さらに防ぐ人もなし」。削掛の神事といふのは、東西の欄内に削掛の木を建てゝおいて、これを同時に燒き、その烟の靡く方によつて丹波・近江二國の豊凶を占ひ、又削掛の火で元日の神供を調へたりするから稀するので、なほ詳しい事は日次紀事・滑稽雜談等に見える。○くらふして　暗うして。○おどれ　おのれと同じ、他を罵つていふ二人稱。○人賣の請　人身賣買の保證人。○粟田口　江戸時代に刑場のあつた所。人身賣買は嚴禁されてゐたからである。○かうのもの　香物。漬物。○番太　自身番に使はれ、町内警衛のために夜廻りなどする役で、一種の賤民とされて居た。番太郎ともいふ。○大こく　大黒。梵妻。僧侶の隱し妻をいふ。語源については好色貝合には「内方を大黒といふ事はね(子と寢とかけた洒落)祭一種のおもはく故也」といひ、風流曲三味線二には「そも〳〵出家の女房を大黒といへるいはれは、運慶の作の大黒に槌を振上げ、萬の寶を打出さるゝ尊像あり。その振上げ給ふ槌右の御目の際まであがりて、正面より拜めば右の御目隱れて拜まれさせ給はぬ故、是を目かくしの大黒といへり、それより寺方の内儀たちを妻(メ)がくしの大黒と申しぬ。是本説なりさきる寺の和尚高座の上にて述べられたり」と少々こぢつけらしい説が述べてある。更に傾城仕盡大臣四には「寺方に勤る女を大黒と云義、いかなるいはれにやいぶかしく、推(スキ)に尋ねければ、則ち字面の通と申しぬ。しからば大きに黒しと云ふ事にや心得がたし。出入目に立てば袋をかたげ洗濯物など持參の樣に人に思はするしかけなれば、いつとても袋を持たぬといふ事なし、故に大黒とは申すなるべし。又さる推の申しけるは、大黒といふものは、棚の隅に上げ置けば人知らず、寺の納戸に隱れて居る故の名なるべしと申しぬ」と長々と語源説を述べ立てゝあるが、まづは「貝合」の説などが本當の所であらう。○挾箱持家來といふ程の意。詐欺漢の下男といふのだから、ひどく罵つたわけである。○子おろし屋　墮胎業。墮胎も禁ぜられて居る事であつた。○褌　きやふ、脚布。女の腰卷の事。○正月布子　正月に着る新調の布子。○すいりよう　推量。○まことほど恥しきものはなし　事實程他に對して憚られるものはない。恥しとは憚られる意。○大晦日の闇を云々　大晦日の闇なる事を(大晦日は毎年必ずやつて來るとの意)早くから覺悟して。　闇と足元の明いとは緣語。○かせぐに追附く貧乏なし　諺。

大晦日に行はれる諸國の行事をあげて、特に祇園の惡口言ひといふ妙な風習を詳しく説いた。それも始めからさういふつもりで書出したといふよりは、段々書いて行く中に、それが一番面白くなつて、つい筆が辷り過ぎたといふ形だ。魂祭りでも、生玉祭でも、興が乘つたらもつと書いたかも知れない。しかし削掛の神事を書く考だけは勿論始め

からあつたので、その悪口を二つ三つ書いてゐる中に、自分ながら大いに面白くなつて來たらしい。實際西鶴自身も、一度位は悪口の言合をやつて見た事があるのかも知れない。西鶴の口なら確かに祇園境内の牛耳を執りさうだ。かうしてこの一段は悪口言ひが中心となつてしまつた觀がある。だが「正月布子したものと同じやうに口をきくな」ときめられた一言から、すぐ大晦日に綿入一つ着ないで居る不覺悟を喩す言葉に逆戻りして、胸算用の境地を全く脱線させなかつた。水際立つた技巧である。

さても花の都ながら、此金銀はどこへ行たる事ぞ。年々節分の鬼が取て歸るもので御座ろ。ことに我等は近年銀と中たがひして、箱に入たるかほを見ませぬと、世のすぼりたる物がたりして、三條通りを歸れば、山がたに三星の紋ぢやうちん六つとぼして、車三輛に銀箱をつみ、手代らしきもの二人跡につきて、咄して行をきけば、世界にない〳〵こいへど、有ものは金銀じや、此銀子は隱居の祖母への寺參り銀とて、親旦那が分置れ、明暦元年の四月に藏入して、又取出すは今晩、此銀箱が世間を久しぶりにて見て、氣のつきを晴すべし。おもへば此銀は、うつくしき娘をうまれ〳〵出家にしたやうなものじやは。一生人手にわたりてよい事にもあはず、後は寺のものになる程にと大笑ひして、けふ此銀を出す次而に、向ひ屋敷の内ぐらを見れば、寛永年中の書附の箱ばかりも山のごとし。一代にあのごとくたまるものかよ、惣じて世上分限、第一しはき名を取て、何ぞいちもつなふては富貴には成がたきに、我等が旦那は萬事大名風にして、一代桑花にくらし、其上の此仕合、そなはりし福人。されば今迄は惣領どのに隱居したまへども、二男の家をもたれければ、又氣を替てそこへの隱居の望み、何事も御心まかせにとて、霜月はじめごろより萬の道具をはこび、けふ此銀がうちどめなり。面屋よりわかりて、隱居付の女十一人、猫も七ひき乘物にのりて人並に越れし。此二十一日に例年の衣くばりとて、一門中下人どもかれこれ集めて、男小袖四十八、女小袖五十一、小だち中だちの小袖二十七、合て百貳十六、笹屋にて調のへ、それ〳〵に給はりける。此小袖代をもてば、商ひの元手があるぞ。又若旦那よりはきのふも初芝居がならぬといふて、さる太夫が機嫌を見合なげきしに、金子五百兩かし下さるゝ。京の廣ひ事をしらぬゆへ、掛乞が百錢をよみける。我々が見て此かた、旦那兄弟金銀手にもたれたる事なし。まして我分限の高をしられず、九人の手代まかせなりと語りつゞけて、大きなる家作りに入て、御隱居樣のお銀がまいりましたと、内ぐらに納めける。

【語釋】 ○世のすぼりたる　世の中が不景氣になつた。 ○紋提灯　定紋をつけた提灯。 ○氣のつき　退屈。 ○生れ〳〵　生れるとすぐ。 ○寛永年中の書附の箱　寛永年中に封印した目附のある銀箱。 ○しはき名を取て　吝嗇だとの評判を得て。 ○何ぞ一物無うては　何か心中に一たくらみなくては。 ○そなはりし福人　天性金持に生れついた人。 ○惣領どのに隱居　長男の家に隱居して居たが。 ○面屋より分りて「分りて」は正しくは「分ちて」。 ○衣配り　歳末に正月の料として親戚朋友又は召使等に衣裳を贈り與へる事。 ○小だち中だち　小だちは小兒の衣服の裁ち方。中だちは本裁と四つ身との中間の裁ち方で、十二三歳位の子供の服。 ○笹屋　呉服屋の名。 ○初芝居　正月に興行する芝居。 ○機嫌を見合せ云々　若旦那の機嫌のよいをりを見はからつて歎願したところが。 ○百錢をよみける　當時は九六錢といつて九十六文を百文に通用させたのであるが、中には九十六文よりもつと少くしてごまかす者もあつたので、百錢を受取つた掛乞が一々その數を數へるやうな事もあつ

たのである。芝居の太夫に五百両もかすやうな大氣な人もあるのに、僅か百文の錢を一々數へる尻の穴の狹さを笑つたのである。よむは數へる。

「さても花の都ながらから」以下は、前段と殆んど離れた話になつて居る。強ひて言へば正月布子一枚も着れぬ男もあるのに、小袖百廿六も調へる富豪もあると對照した點に、連絡はあるわけだが、少くとも全體としては決して一の中心點に結びつけられた作とは言へない。西鶴は元來一つの題目の中に、強ち一の中心を作らねばならぬといふ考はなかつたのである。度々言ふ事だが、この篇などは全く連句のすゝみ方と同じ心もちがある。大晦日の行事、生玉祭、削掛の神事、悪口競べ、正月布子も着ぬ男、三條通りを歸る紋提灯、百萬長者の主人の噂と、これらの題材を長短句に仕立てゝ、月花の句でもまじへたら、そのまゝ連句になりさうだ。そして貧富二者の大きな對照がまた、連句らしい統一を保つて居る。かうして西鶴の小説を、附合の心もちで辿つて見ることは、彼の作品を正しく理解する上に、極めて必要な事であると思ふ。

此家の年男、神々へ燈火あげて後、お銀ぐらへも燈明と申せば、旦那指さして笑ひ、さても初心な年男どの、藏に燈明などといふは總か千貫目の事也。二十五六も燈明とぼすかと申されし。さても大分有銀と、此家をうらやましく見るうちに、方々より大分の銀箱廣庭につみかさね、兩替の手代らしきものども手をつかへ、此家のおも手代にさま〳〵きげんをとり、何とぞ此銀子ども御くらへおさめ申たきといへば、例年申渡し御ぞんじのごとく、大晦日の七つさがり候へば、銀子いづかたから參りてもうけとり申さぬと、かね〴〵申わたし置しに、夜に入て此はしたがね、事やかましといひてうけとらぬを、色々わびごと追匠いひて、三口合して六百七十貫渡して、請とり手形おしいたゞきて立歸る。もはや御藏はしめけるとて、大がまのうしろにかさね置ける。此銀は庭にて年をとりける。まことに石かはらのごとし。

「語釋」　○年男　節分新年の諸儀式をつとめる男。豆を打ったり若水を汲んだり、神佛に燈明をあげたりするのである。日次紀事「汲二若水一人謂二歳男一」　○大分有銀と「大分有る銀と」とよむ。　○兩替　兩替屋の略。　○七つさがり　午後四時すぎ。　○追匠　追從。　○請とり手形　金の受取證。　○大がま　臺所の大釜。　○庭　臺所の土間をいふ。

大晦日といへば一文の錢でも取込みたい時であるのに、銀六百七十貫目といふ大金を、はした金で面倒だといふのだから、まるでお話にならぬ。金をもつて來た方から詫言いうて、やつと受取つては貰つたものゝ、もう銀藏はしめてしまつたからと、臺所に積重ねて目もかけない。廣い京にもかほどの分限はまさか有つたわけでもあるまいが、小袖百二十六、三口合して六百七十貫目と、一々實數をあげて示すと、何だかそんな金持も實際有りさうに思へて來る。この數を正確にあげる事は、西鶴の叙述を印象深くする點に、常に最も有效にはたらいて居る。

二　奈良の庭竈

むかしから今に同し顔を見るこそおかしき世の中。此二十四五年も奈良がよひする看屋有けるが、行たびに只一色にきわめて、銷より外に賣事なし。後には人も銷賣の八助とて、見しらぬ人もなく、それそれに商ひの道付て、ゆるりと三人口を過ける。されども大晦日に錢五百もつて、終に年をとりたる事なし。口喰て一盃に雑煮いはふた分なり。此男つね〳〵世わたりに油斷せず、ひとりある母親のたのまれて、火桶買ふて來るに

も、はや間錢取て只は通さず、まして他人の事には、とりあげ祖母呼で來てやるけはしき時も、茶づけ食を喰ずには行かぬものなり。いかに欲の世にすめばとて、念佛講仲間の布に利をとるなどは、まことに死がな目くじろの男なり。是程にしてもあのざまなれば、天のとがめの道理ぞかし。そもそも奈良にかよふ時より、今に鮹の足は日本國が八本に極まりたるものを、一本づつ切て足七本にしてうれども、誰か是に氣のつかぬ事にて賣ける。其あしばかりを、松ばらの煮うり屋にさだまつて買もの有。さりとはおそろしの人どころぞかし。物には七十五度とて、かならずあらはるゝ時節あり。過つる年のくれに、あし二本づつ切て、六本にしていそがしまぎれに賣けるに、これもせんさくすろ人なく賣て通りけるに、手貝の町の中ほどに、表にひし垣したる内より呼込、鮹二盃うつて出る時、法躰したる親仁ちろりと見て、碁を打さして立出、何とやらすそのかれたる鮹と、あしのたらぬを吟味仕出し、是はどこの海よりあがる鮹ぞ、足六本づつは神代此かた何の書にも見えず。ふびんや今まで奈良中のものが、一盃くうたであらふ。魚屋貌見しつたといへば、こなたのやうなる大晦日に碁をうつてゐる所ではうらぬと、いひぶんしてぞ歸りける。其後誰が沙汰するともなく世間にしれて、さるほどにせまい所は角からすみまで、足きり八すけといひふらして、一生の身過のとまる事、これおのれことろからなり。

【語釋】 ○一色に極めて 者一種とさめて。 ○八助 鮹の足の八本に緣をもたせた名前。 ○三人口を過ぎける 三人の家族の口を糊した。 ○口食うて一杯 糊口以外に餘裕のない事。 ○母親の頼まれて 頼まれのれは受身でなく敬語。但し文法的には「母親の」のをにと直して、れを受身と見た方がよい。 ○間錢 手數料。賣買の間に利する錢の意。こゝは廿文で買つて來たものを廿五文したと言つて、五文だけ着服するやうな事。 ○とりあげばゞ 產婆。 ○けはしき時 急な時。 ○念佛講 講に加入した者がかねて定時に金を出し合せておいて、加入者中死んだ者があつた時、その遺族に定額の金を贈る規約の講。多く老人達の仲間である。さういふ念佛講仲間で用ひる曝布を頼まれて、奈良から買つて來る時でさへ例の間錢をとるといふ意だらう。 ○死ねがな目くじろ 死んでくれたらいゝ。そしたら目までくじり取つてやらうといふので、貪欲非道な事にいふ諺。 ○物には七十五度 物にはきりがあるといふ意の諺。 ○手貝の町 奈良の町名。 ○裾のかれたる かれたるとは物淋しいの意。足が二本も足らぬからである。 ○いひぶん 言分。一理窟こねる事。

これもまた賢に中心のない一篇である。蛸賣八助、正月の行事、暗峠の强盜と三つの話がそれ〴〵獨立した興味で、一篇の中に收められてあつて、只それらが皆奈良を背景としてゐる點で結び付けられてゐるに過ぎない。しかし讀者の方でも、鑑賞上强ひてこの全體を一團の說話と見なければならぬ必要はないので、一段づゝに移り行く西鶴の筆の動きのまゝに。味はへばよいのである。ともあれこの一段は蛸賣八助だけの話として、その貪欲さがいかに力强く恐ろしく描かれてゐるかを見ればよい。さう見た時にこの一段は一段として、一つの纏つた立派な作品である。要するに西鶴の作は常に一代男の縮小されたものであり、又奈良の庭竈の延長されたものである。

されば大としの夜の有さまも、京大坂よりは各別しづかにして、よろづの買がかりも有ほどは隨分すまし、此節季にはならぬとことはりいへば、掛とり聞とゞけて、二たび來る事なく、さし引四つ切に奈良中が仕舞て、はや正月の心、いそ〳〵に庭いろりとて、釜かけて燒火して、庭に敷ものして、その家內旦那も下人もひとつに樂居して、不斷の居間は明置て、所ならはしとて、輪に入たる丸餅を、庭火にて燒喰も、いやしからず

ふくきなり。さてまた都の外の宿の者といふ男ども、大乘院御門跡の家來因幡といへる人の許にて、例にまかせて祝ひはじめ、富々富々といひて町中をかけ廻れば、家ごとに餅に錢そへてとらせける。是を思ふに、大坂などにて厄はらひに同じ。漸々夜も明がたの元日に、たはらむかへ〳〵と賣けるは、板にをしたる大こくどのなり。二日の明ぼのに、惠比酒むかへとてうりける。三日の明がたにびしやもんむかへとてうりける。毎朝三日が間、福の神をうるぞかし。さて元日の禮儀、世間の事はさし置て、先春日大明神へ參詣いたすに、一家一門するゑ〳〵の親類までも引つれてざゝめきける。此とき一門のひろきほど外聞に見えける。何國にても富貴人こそうらやましけれ。

【語釋】○有る程は隨分すまし　金の有るだけはそれに隨つて借金を拂ひ。　○ならぬことわりいへば　支拂が出來ぬといふ理由を言へば。　○さし引四つ切に　貸借勘定を午後十時限りに仕舞つて。　○いそ〳〵に　家々に。　○庭圍炉裏　庭竈ともいふ。説明は即ち本文の通りである。　○ふくき　福貴。　○宿の者　夙の者。　賤民の稱。　奈良だけでなく近畿地方で此の名稱を用ひた所はなほ多い。　○たはらむかへ　俵迎へ。大黑は俵を踏まへて居るからいふ。　○板におしたる　印刷した。　○外聞に見えける　外聞がよく見える。

この一節は奈良の正月行事の種々を紹介しただけで、別段小説的興味は何もない。且つ胸算用の境地からも大分遠い。しかし題目の「奈良の庭竈」は、即ちこの部分によつてゐるわけで、案外西鶴にはこれらの風習が興深く感ぜられたのかも知れない。そしてこの後で出てくる「長崎の柱餅」など〻同じく、いろ〳〵ちがつた土地の話をして見たいといふ欲求もあつたやうに思はれる。元來庭竈の事は「日次紀事」にも「置火爐於庭上、合家鋪レ席而圍座、是謂庭竈」とあつて、京都でも行はれた事らしい。「叡慮にて賑ふ民の庭竈」といふ芭蕉の句もある。貞享五年(元祿元年)の俳書「五節句」には、「庭竈、在家に常の竈の外に庭に新しき圍爐裏の大きなる樣に拵る、寸法大小家の勝手あり、不定なり。家來ども寄集り薪を燒き、茶酒餅蛤等を喰て三ケ日遊ぶ事なり云々」とあるから、西鶴の時代までも必しも奈良に限つて行はれた事ではない。しかし京大阪ではあまりかうした俗に從ふものがないのに反して、奈良だけでは嚴重に行はれて居たものであらう。なほ宿の者の祝儀や福神迎への俗については、「日次紀事」にも本文とほゞ同樣の記述があるから、重複するやうだけれども參考のためにあげておかう。

△南都宿者。　今曉宿者大敲二條院坊官二條寺主法眼幷大乘院坊官因幡法眼之門戸、唱富々、則與酒食、歸路敲北屋之戸、唱富、凡北京南都屠人幷乞人之所聚居、曰宿、其人曰宿者。

△守福神。　南都市中毎年自吉野來賣守福神之札、元日曉巡市中、高聲謂須迎辨財天、若有求之人則賣辨財天之札、二日曉又謂須迎多門天、則賣毘沙門天之札、三日曉又謂須迎惠美須、猶京師元日曉天賣弱惠美須之札。

本文の元日が大黑、二日が惠比須、三日が毘沙門といふのと少しちがふやうだが、どちらが本當だが一寸決し難い。

商賣のさらし布は、年中京都の吳服屋にかけうりて、代銀は毎年大ぐれに取あつめて、京を大晦日の夜半から我先に仕舞、次第にたいまつとぼしつれて、南都に入こむさらしの銀何千貫目といふ限りもなし。すでに奈良へ歸れば、皆々夜あけになれば金銀くらにうちこみ置、正月五日よりたがひにとりやりのさし引する事例年なり。此銀荷を心ろがけて、大和の片里にしのびてすみける素浪人ども、年とりかぬる事のかなしさに、いの

ちを搖て四人内談して追剝に出しに、みな三十貫又は五十貫の大分にて、のぞみほどのはした銀なければ、それかこれかと見合すれども、終に酒手と云かねて、此道かへてくらがり峠に出て、大坂よりの歸りをまちぶせし所に、小おとこのかたげたる菰づつみを、心にくしおもきものをかるう見せたるは、隱し銀にきわまる所とて、おさへて取てにげされば、此男こゑを立て、明日の御用にはとても立まい〳〵と申す時に、四人してあけて見ればかずのこなり。是は〳〵。

【語釋】 ○さらし布　奈良の名產である。和漢三才圖會「曝布出於和州奈良布之上品也」。 ○かけうりて　掛賣にして。 ○大ぐれ　大節季。 ○たいまつ　松明。 ○取り遣りの差引する　貸借の差引勘定をする。 ○銀荷を心がけて　銀荷を奪はうと心がけて ○素浪人　素寒貧の浪人。 ○大分にて　大分の金高で。あまり深山の金ではあとで詮議が嚴しいから、少額の金を望んだのである。 ○酒手　酒代。金錢を强奪する時「酒代をよこせ」といふのはきまり文句である。 ○くらがり峠　奈良から生駒山の中腹を越して大阪へ通ずる路の峠。 ○心にくし　菰包みた心にくい何か中に包んでありさうだと思つて。 ○にげされば　逃去れば。 ○かずのこ　數の子。

最初にも言つた通り、この一節は又强盜の失錯といふ事が、興味の中心として描かれて居る。大の男が四人も揃つて居ながら、見す〳〵三十貫目五十貫目の大金は見逃して、はした金に心がけるのも、いかにも貧故の盜みに出かけた新米の盜賊らしい。遂に手が出せないので、今度は河岸をかへて暗峠と出て見たら、恰度おあつらへ向きらしい獲物がかゝつた。しかも相手は小男だ。これなら大丈夫と抑へて取るにはとつたが、それでも逸足出して逃げ去つた。取られた小男の方が、よつぽど落着いてゐたらしい。あわてた盜賊めさ心にをかしく、「明日の御用にはとても立つまい〳〵」と注意を與へた。强盜共も小男に敵意がないと知つたのか、些か落附いて、百文繻が一山もころげ出るかと菰包を解いて見ると、中は數の子。是は〳〵とばかり開いた口が閉がらなかつた。それにつけても、よく〳〵金に緣なのない身の上と、すつかり無常を感じて、四人とも手ぶらですご〳〵歸つた事であつたらう。

三　亭主の入替り

年の波伏見の里にうちよせて、水の音さへせはしき十二月二十九日の夜の下り船、旅人つねよりいそぐ心に乘合て、やれ出せ〳〵と聲々にわめけば、船頭も春しりがほにて、われも人もけふとあすとの日なれば、何がさて如在は御座らぬと、頓て纜ときて京橋をさげける。不斷の下り船には、世間の色ばなし、小うた、淨瑠りゝはや物がたり、諧に舞に役者のまね、ひとりも口たゝかぬはなかりしに、今宵にかぎりてものしづかに、折々思ひ出し念佛、又は長ふもないうき世、正月々々と待てから、死ぬるを待ばかりと、世をうらみたる云分。其ほかの人々は寐入もせず、みなはらたちそふなる顏つきなるに、人の手代らしき男が、おやま茶屋でうたひならひしなげぶしを、息の根のつゞくほどはりあげて、あいの手を口三味線の無拍手に、頭をふり廻してつらにくし。程なふ淀の小ばしになれば、大間の行燈目あてに、船を艫より逆下しにせし時、分別らしき人目をさまして、あれ〳〵あれを見たがよい、人みなあの水車のごとく、晝夜年中油斷なくかせぎければ、大節季の胸算用違ふ事なきに、不斷は手をあそばして、足もとから鳥のたつやうに、ばたくさとはたらきてから、何の甲

麥なしと我ひとり智恵有顔にいひける。

【語釋】 ○下り船　伏見から大阪へ下る夜船。 ○春知り顔　正月の近い事を心得た樣子。 ○今日と明日との日　年内餘す所今日と明日だけの意。 ○如在　手ぬかり、遺漏、油斷。 ○京橋　伏見の船の發著所。 ○不斷の　平常の。 ○早物語　即座に話をこしらへていふ頓作話の事か。 ○思ひ出し念佛　ふと思出したやうに念佛すること。 ○待つてから　待つたところで。 ○はらたちそふなる　腹立ちさうなる。 ○おやま茶屋　色茶屋。おやまとは遊女のこと。 ○投節　前出。 ○合の手　伴奏。 ○大間の行燈　すべて淀川を航行する舟は、淀の御城内に尻を向けぬやう、その附近では一時舟を逆行させるのを例とした。夜間は城内の大間にともした行燈を目當として、その附近だけ逆行するのである。 ○水車　名高い淀の水車である。 ○かせぎければ　「かせげば」とあるべきを、例によつて過去形にしたのである。 ○足もとから鳥の立つやうに、不意に事が起つて、周章狼狽する意の諺。 ○働きてから　働いたところで。

歳晩の淀の夜舟の情景である。只でさへ乘合船は浮世の縮圖であるのに、もう今年も今日と明日と押迫つた日の三十石船には、特に變つた人生の種々相が見られた事であらう。胸算用の題材として、必ず逸してはならぬものである。果して西鶴はこゝに廿九日の下り夜舟を捉へて來た。常と變つた人心のあわたゞしさ、思出し念佛に不機嫌な顔、妙に靜まつた船中の光景は、いかにも押しつまつた歳末のさまを思はせる。その中にたつた一人、さも氣樂げに唄うたふ男がある。これこそは大晦日の苦勞もしらぬ仕合者めと、暗に船中の人々から羨しくも小憎くも思はれたにちがひない。そこへ話の緒を繰出すために、分別男をもう一人眼さまさせた。水車を捉へての直觀教授には、皆今となつて胸にこたへる事とて、神妙に傾聽せざるを得なかつた。

船中の人々耳をすまして、是尤と聞ける中に、兵庫の旅籠屋町の者乘合けるが、只今のお言葉にて、われらが身の上の事に思ひあたりました。浦住居の徳には、生肴のつかみどりの商賣して、世わたり樂々としてから毎年の仕舞には少づつたらず。此十四五年も迷惑して、大津に母方の姨有けるが、わづか七拾目か八拾目か百目より内の御無心申せしに、年々の事にて姨もたいくついたされて、當くれの合力はならぬといひ切られ、置たものを取て來るやうなる心あて違へば、里に歸りてから年の取やうなしとかたる。又ひとりの男は、さしわたして弟をつれて、此たび四條の役者に近付ありて、是をたのみにして藝子に出して、前銀かりて此節季を仕舞ふ心がけにてのぼりけるに、おもひのほかなる事は、我弟ながらかたちも人にすぐれて、太夫子にもなるべきものと思ひしに、耳すこしちゐさくて、本子には仕たてがたしとうけとらねば、是非なくつれて歸る。さて〳〵世間に人もあるものかな。十一二三の若衆下地の子どもの、隨分々々色品よきを、毎日二十人三十人つれきたりて、人置がさゝやくをきけば、牢人の子もあり、醫者の子も有、さのみ筋目もいやしからぬ人なれども、ことしのくれを仕舞ひかね、奉公に出せしに、十年切て錢壹貫から三十目までにて、好なる小共取ける。色の白き事かしこき事、上方者にはとても及びがたし。つかひ銀を損して歸ると語りける。又ひとりの男は、親の代より持傳へし日蓮上人自筆の曼陀羅を、かねく宇治に望みの人ありて、金銀何程成ともと申されしに、其ときは賣おしく、當くれ手前さしつまり、はる〳〵うりはらひに參りしに、此人いかなるゆへにや、分別替りて淨土宗になられければ、此名號手にも取られず、思ひ入ちがひまして迷惑いたすなり。外に當所もなければ、宿へ歸りてから借錢乞にせまられ、其相手になる事もむつかしければ、大坂よりすぐに高野參りの心

ざしを見通しの弘法大師、さぞおかしかるべし。又ひとりの男は、春のべの米を、京の織物屋中間へ毎年のくれに借入の肝煎して、此間銀を取、定まつて緩々と節季を仕舞けるが、壹石につき四十五匁の相場の米を、三月晦日切にして五十八匁に定め、年々借けるに、諸職人内談して、壹石に十三匁の利銀、三ケ月に出す事は、いかにしてもむごき仕かけ、年は何やうにもとられ次第、此米借なと言合せ、折角鳥羽までつみのぼしたる米を、其まゝに預けて歸るといふ。船中の身のうへ物がたり、いづれを聞てもおもひのなきはひとりもなし。

【語釋】 ○つかみどり 生肴をつかむに言ひかけてある。 ○毎年の仕舞 毎年歳末の決算。 ○當くれ 當年の年の暮。 ○置いたものを取つて來るやうな 確かな事の喩。 ○里に歸りてから 鄕里に歸つたところで。 ○さしわたして弟をつれてこれだけ地の文で「此たび」以下を詞と解した方がよい。さしわたしての解はあとで詳說する。 ○藝子 少年俳優。 ○前銀かりて 藝子の給銀を前借して。 ○太夫子 少年俳優中將來立女形にもなるべきものをいふ。 ○本寸 本式の俳優となるべき歌舞伎子。 ○若衆下地 この若衆は色若衆で即ち少年俳優。その若衆に成るだけの素質がある事。 ○人置 口入紹介業。 ○牢人 浪人。 ○十年切つて 勤の期限を十年間と定めて。 ○小供 子供。 ○つかひ銀 旅中の入費。 ○賣をしく 賣るのが惜しくて。 ○手前さしつまり 自分の經濟狀態が迫迫して。 ○思ひ入 考へ。 ○むづかしければ 面倒だから。うるさいから。 ○心ざしを見通しの 「心ざしであるが、それを見通しの」といふべきをすぐに續けた文勢。 ○春延の米 延米とは一時金を立てかへて貰つて買ひ込んでおく米の事で、その代り金を支拂ふ迄の間の利子を見込んで、普通の値段よりも高く買ふのである。春延の米とは正月の米を右のやうに代金後拂ひとして買込むこと。 ○肝煎 周旋。 ○間銀 手數料。 ○むごき仕かけ 酷いやりかた。 ○年は何樣にも云々 年はどうでも取る事が出來次第にとればよい。こんな高い利子のついた米は借るな。

獨り智惠有り顏な分別男の說敎に感動して、先づ兵庫の者が問はず語りの身上話を始めた。一人が口を切ると、今まで默つて苦り切つて居た連中も、それ〳〵にならぬ師走の工面話、聞いて見るといづれ一人ゆるりと年をとれさうな者もない。叔母に合力をことわられて手ぶらで歸る男、弟を藝子に賣り損ねて旅費だけの損になつて歸る男、家實を賣る心當がちがうて高野へでも逃げて行かうといふ男、さては延米の契約はづれて年とりかねる男、いづれも他人ばかりを心當てにして節季を仕舞ふ合點だつたのが、とかく越中褌と何とやらで、向ふからはづれ勝ちなのが世の常である。考へて見ると皆それ〳〵の覺悟の惡いから起つた事で、誰を恨まうやうはない。「あの水車の如く晝夜年中油斷なく」といふ一言が、さてこそ各々の身上話を引出した所以となつたのである。

文中「さしわたして弟をつれて」とあるのは、普通の用例に從へば「さしわたしの弟をつれて」又は「さしわたした弟をつれて」とあるべきで、恐らく誤り書いたものであらう。さしわたしは直接といふ意で、かういふ場合では「極めて親近の」といふ程の意である。用例を少しあげて見ると、和漢遊女容氣二「さしわたしの從弟」、東海道仇討一「さしわたしの從弟」、曲三味線「さしわたしたいとこ」等がある。なほ立身大福帖二「直ぐにさしわたしたる挨拶」、眞實伊勢物語「人賴みするまでもなくさしわたして言ひけるは」等は、動詞として用ひられたので、「直接の挨拶」、「直接に言ふ」の意である。胸算用の本文では「さしわたして」が「つれて」につゞくやうに解しても、文法的には別段差支はないが、前記の用例から見ると、やはり「弟」の形容句と見るべきであらう。隨つてよりのかたの方が穩當である。この語義については研究家の間にやかましく論議された事があるから、些か附說した次第である。

此舟の人々、我家ありながら、大晦日に内にゐらるゝはあるまじ。常とはかはり我人いそがしき中なれば、人の所へもたづねがたし。晝のうちは寺社の繪馬も見てくらしけるが、夜に入て行所なし。是によつて大分の借錢負たる人は、五節季の隱れ家に、心やすき妾をかくまへ置けるといふ。それは手前もふりまはしもなる人の事、貧者のならぬ事ぞかし。宵から小うたきげんの人、定めて内證ゆるりと仕舞おかれしや、うら山しやとたづねければ、此おとこ大笑ひして、皆々は大晦日に我人のためになり、内にゐる仕出しをいまだ御ぞんじなさそふな。此二三年入替りといふ事を分別して、これにてらちをあけゝる。たがひにねんごろなる亭主入替りて留守をいたし、借錢乞のくるときを見合、お内儀わたくしの銀は外の買がかりとは違ひました。亭主の腹はたをくり出して、らちをあくるといへば、外のかけこひどもは中々すまぬ事に思ひ、みなかゑりける。是を大つもごりの入かはり男とて、近年の仕出しなり。いまだはしゝにはしらぬ事にて、一盃くはせける。

【語釋】　○我人　我も人も。　○行所　ユキドコロともよまれるが「行く所」の方がよい。「知人」はシリビトでなく「知る人」である。　○繪馬も見てくらしける、妾をかくまへ置けるはいづれも例の慣用の過去形。　○手前も振廻しもなる　手前の都合も金の融通も何とか出來る。　○我人のためになり　自分のためにも人のためにもなつて。　○内にゐる仕出し　方々へ逃げ隱れしないで、うちにちやんと居る新工夫。　○見合　「見合はせ」とよむ。　○腹はた　腹綿。腸。　○中々すまぬ　腸でも繰出して埒を明けるといふ程の手強い掛乞が居ては、自分等の方への支拂はとても出來まいと思つて。　○かゑり　歸り。

他の人々の憂ひ腹立ち顏もかまはず、一人投節の口三味線、さも氣散じな男をさきに一寸點出しておいた。これのみが節季知らぬ仕合者だらうとは、最初に讀者も感じた事であつたらう。乘合の人々も身上話に各々同情し合つた最後に、遂々「定めて内證ゆるりと仕舞ひおかれた事であらう。羨しや」とばかりこの男に羨望の眼を向けた。然るに豈はからんや、これこそは大晦日の入かはり男といふ新案に高をくゝつて、借錢乞の恐しさも知らぬ大膽者、ゞうゝしい上を通越した挨拶には、船中一同これは〳〵。

歳末の乘合船といふ最も恰好な題材を捉へたわりには、その内容が何だか物足りなさを感ぜさせる。特に最後が落語式の輕味に終つてゐる事は、こゝに辛酸な世相の縮圖を窺はうする期待を、すつかり裏切つて居る。入替り男の工夫だけで落ちをとるつもりなら、强ひて乘合船でなくてもよい。少くとも結末をかうして輕く取扱つた事が、この一篇から文藝的價値を減殺し去つた重要な原因であると思ふ。

四　長崎の餅桂

霜月晦日切に、唐人船殘らず湊を出で行ば、長崎も次第に物さびしくなりぬ。しかし此所の家業は、よろづからもの商なひの時分、銀まふけして、年中のたくはへ一度に仕舞置、貧福の人相應に緩々とくらし、萬事こまかに胸算用をせぬところなり。大かたの買物は當座ばらひにして、物まへの取やりもやかましき事なし。正月の近づくころも、酒常住のたのしみ、此津は身過の心やすき所なり。師走になりても人の足音いそがしからず。上方のごとく節季候もこねば、只伊勢ごよみを見て春のちかづくをわきまへ、古代の掟をまもり、極月十

三日に定まつて煤をはき、其竹を棟木にからげ、又の年のすゝはきまで置事ぞかし。餅は其家〳〵の嘉例にまかせてつきける。殊におかしきは柱もちとて仕舞一うすを大こく柱にうちつけ置、正月十五日の左義長のとき、これをあぶりて祝ひける。萬につけて所ならはしのおかしく、庭に幸はひ木とて横わたしにして、鯛、いりこ、串貝、鴈、鳧、雉子、あるひは塩鯛、赤いわし、昆布、たら、鰹、牛房、大こん、三ケ日につかふほどの料理のもの、此木につりさげて、竈をにぎあはせ、すでに大晦日の夜に入れば、物もらひども貌あかくして土で作りしゑびす大こく荒壇臺にのせ、當年の恵方の海より潮が參つたと、家々をいはゐまはりけるは、船着第一の所ゆへぞかし。惣じてとし玉は何國にてもかるひ事に極まりて、男は豐夜に五拾本づつの數あふぎ、女はせんじ茶を少づつ紙につゝみて、けいはくらしき事、こゝの總並なればおかしからず。兎角住なれしところ都の心ぞかし。

【語釋】 ○唐人船　當時唐人船、唐船などゝ言つたのは、必しも支那船のみをさすのではない。暹羅・カンボヂヤ・ジヤガタラ等から來る船も言つたのであるが、こゝでは蘭船までも含んでゐる。和蘭船は毎年六七月の頃に渡來し、十月中旬から十一月の初めにかけて長崎を出帆する事になつてゐた。日次紀事六月の條「此月得二西北風一則番船輒湊肥前長崎港一、故京師江戸泉界大阪其外諸國商賈赴二長崎一、各買二其所レ求之諸物一、阿蘭陀人重陽以後必解レ纜歸國、其餘任レ心開レ帆」。○唐物商　この唐物も必しも支那品のみに限らず、すべて舶來品をさしてゐる。○年中の貯へ云々　一年間の生計を支ふべき貯蓄を、一度の貿易によつてちやんと儲けておき。○綏々とくらし　生活に餘裕がある意。○物前　節季前。○節季候　日次紀事十二月二十二日の條「節季候、自二今日一乞人笠上挿二貧首蓬一、以二赤布巾一覆レ面、繞出二兩眼一、二人或四人相共入二人家一、庭上催レ躍乞二米錢一、是謂二節季候一、則告二節季歲暮之詞也一、俗俗假字代二也字一用レ之、至二廿七八日一而止」。○伊勢暦　陰陽家土御門家の暦の稿本により、伊勢神宮から諸國に頒布した暦で、伊勢の大經師佐藤伊織が板行した。毎年歲暮には伊勢の御師などがこれを民家に配るのを例とした。○十三日に煤をはき　十二月十三日を事始の日といひ、その日からすべて正月の仕度をするので、古くは煤拂もこの日に定つてゐた。○仕舞一日　最後の一日。○大黒柱　桁梁が四方から湊つた點を支へて居る、太い柱。丁度家の中心部になる所にあつて特に大事にされる。○左義長　又どんどゝもいふ。和漢三才圖會、止牟止（トンド）の條「（上略）凡民間十五日朝收二取每家飾菓松竹一集二一處一燒レ之、爲二止牟止一、（下略）」。左義長は三毬打の宛字であるといふ。○幸木　長崎市史風俗編「廿八九日頃より幸木と稱して長さ一間餘の棒に長さ一尺餘の繩を適宜の間隔を設けて十二ケ所（潤年は十三ケ所）に結び注連飾の如き飾を施して之を臺所の壁に取付け、その繩に鹽鰤、鹽鯛、雁、鴨、鳧、鷄等魚鳥の類、及鰹節、大根、牛蒡、昆布等山海の產物を垂れ、正月中家内の雜煮其他に使用し、或は來客馳走の設けに備ふ」。○いりこ　熟海鼠。○荒鹽臺　不詳。鹽は四方の宛字で粗末な四方臺の意であらうか。四方は三方に類したもので脚の四方に目があるものをいふ。○いはゐ　祝ひ。○かるひ　輕い。○數扇　數扇、數鏡、數役者、數羽織等すべて數何々といふのは、ありふれた數の多いものをさしていふ。即ちあまり上等でないのである。○せんじ茶　煎じ茶。○けいはく　輕薄。○こゝの總並なれば　長崎ではすべて誰もやる事だから。

この冒頭の一節は、まづ長崎の歲時記といつたやうな所である。柱餅の風習は「長崎市史風俗編」によれば、今なほ大黒柱に寶袋の形をした柱餅を、ヘギに取附けて飾る風習は遺つてゐるといふ。西鶴は一體實際長崎に遊んだ事があつたか甚だ疑はしい。長崎について記してあるのは、こゝだけでなく彼の作中になほ多く見られるが、どうも直接の見聞はなささうに思はれる。實際に唐人屋敷を見たり、丸山遊廓に足を入れたのであつたら、もつと活き〳〵した

描寫がきつとある筈だ。一代男の最後にもち出した丸山でも、

宿に足をもためず、直ぐに丸山に行きて見るに、女郎屋の有様閑及びしよりは勝りて、一軒に八九十人も見せかけ奏、唐人は隔りて女郎かはりけるとかや。懇慕深く中々人の見る事も惜み、晝夜共に其藥をのみては(中略)。紅毛は出島に呼うで戯れ、上方の町宿へも自由に取寄せ、豊かなる事どもこそあれ。

といふ通り一べんの紹介にすぎない。「好色盛衰記」を彼の作とすれば、――私は西鶴の作と推定してゐる。――それも

寶の島といふをいづくかと思へば長崎の事に極まれり。唐人船の大湊、錦の山、白糸の瀧、流れ木の伽羅を筏に組み、麝香犬は和朝の猫より見え渡り、丁子は葉茶の煮殼の如く捨てありきて、金銀掴み取の所、二夜に長者ともなりぬべし。

といつたやうな、寧ろ内容感の空疎な描寫たるにすぎない。しかもその描寫すらが、八文字本の作者輩には金科玉條とされて、長崎の事とし言へばこゝが引張り出されてゐる。色三味線・傾城玉子酒・和漢遊女容氣などには、そのまゝ全文が剽窃されてゐる位である。其磧等が西鶴に比べていかに小さいかは、これだけでも十分に分る。筆がやゝ逸れたが、とに角西鶴が長崎の實際を知らなかつた事は、彼のために惜むといふより、わが近世文藝のために淋しい感を深からしめる。私はかつて長崎を描いた近世文藝の事を少ししらべて、ある雜誌にのせた事があるが、いづれも皮相的な紹介か概念的な描寫に止つてゐる事を遺憾に思つた。

なほ長崎市史によると長崎にもやはり節季候は來たとあるし、又貌を赤く塗つた物貰については、師走中旬煤取の頃、煤取惠美須と言つて、烏帽子を冠り釣竿を携へ惠比須神の扮裝をした非人共が、市中家々の門口に立つて錢を乞うたとあつて、西鶴の記述とは些か異ふ。これらも西鶴が人傳の耳學問だつたから誤つたのではなからうか。尤も長崎市史もその說の據り所を示してないし、且つそれが江戸の各時代を劃した記述でもない。多くは江戸中期以後の資料によつて居るらしいから、西鶴の方が却つて參考資料として有力なのかも知れない。

されば諸國の商人、手まはしはやくして、わが古さとの正月にあふ事を世のたのしみとせしに、京の細もとでなる糸商賣の人、此二十年も長崎くだりして、萬事人にすぐれてかしこく、京都を出たち喰て、旅用意歩行路船路にて、中々錢豊もんも外なる事につかはず。長崎に逗留の内、終に丸山の遊女町のぞかず、金山が居すがたのりこんなやら、花鳥が首すじの白いやら、夢にも見ずして枕に算盤手日記をはなたず、何とぞして唐人のおろかなるをたらし、よきあきなひ事もがなと、あけくれこゝろにかくれども、今ほどの唐人は、日本のことばをつかひおぼえ、持あます銀があるとも、家質より外に借す事なし。又は歩にあふ家かふておくを、よい事と合點しければ、各別なる事は唐さへなし。まして日本の智恵ぶくろは世俗にかしこく、よい事ばかりはさせぬなり。利發にて分限にならば此男なれ共、こきの運きたらず、仕合がてつだはねば是非なし。おなじころより長崎にくだり、同じ糸商賣する京の人、大分の手前者となり、今は手代をくだして、其身は都に安樂にして、しかも物見花見女郎狂ひも相應にして、分限なる人數しらず。これはいかなる事にて、かくは成けるぞとたづねしに、それはみな商人心といふものなり、仔細は世間を見合、來年はかならずあがるべきものを考へ、ふんどんで買置の思ひ入あふ事より、拍子よく金銀かさむ事ぞかし。こゝのふたつものがけせずしては、一生

替る事なし。此男は長崎の買もの京うりの算用して、すこしも遠ひなく跡先ふまへて、たしかなる事ばかりにかゝれば、算用の外の利を得たる事一とせもなくて、皆銀の利にかきあげ、人奉公して氣をこらしける。毎年大晦日を橋本旅籠屋に定宿こしらへ置、爰にて年をさるが、我等が家の嘉例といふは、大拂の借錢すましかねるゆへなり。同じくは吉例やめて、京の我宿にて年とるやうにいたしたきものぞかし。

【語釋】 ○細もとで 小資本。 ○糸商賣 糸は生糸の事。昔はわが國内の養蠶業がまだ振はなかつたので、多量の生糸を輸入し、京都・堺・長崎などの商人が主としてこれを買取つたのである。 ○出たち 旅に出發する際の食事。普通朝、宿を立つ時の朝食を言つてゐる。 ○旅用意云々 旅中の用意を細かにして、陸路海路共に無用の事には一文も使はず。 ○金山、花鳥共に丸山の遊女の名。 ○りこん 利根。利口さうなこと、氣がきいてゐる事。 ○手日記 手元に備へておく日記。手帳。 ○たらし だまし。 ○今ほど 今頃、今時。 ○家賃 家屋を借金の擔保にする事。 ○歩にあふ家 屋賃の方がその家屋代に當る金の利廻りより割合のよい家。 ○かふておく 買うて置く。 ○各別なる事 格別に利を得るやうな事。 ○利發にて云々 利發なだけで金持になるものなら、この男こそがその人であるけれども、時の運が來ず、仕合が手傳はなければ仕方がない。即ち利發なだけでは金持になれぬ。運と仕合が必要だとの意。 ○安樂にして 安樂にしてゐて。 ○ふんどんで 踏込んで。はまり込んで。 ○思ひ入 豫想。 ○ふたつものがけ 甲に非れば乙、乙に非れば甲との義で、一か八か、のるかそるかなどの意に用ひる。 ○跡先ふまへて云々 十分見込をつけてから、確かに利を得ると見極めた事だけにかゝるものだから、その豫算した以上の利益を得た事は一年もなくて、その利金は皆借入れた資本金の利息に拂つてしまひ、人のために骨を折つて精神を使ふだけの事になる。 ○橋本 淀の南方、八幡の附近の地名。橋本の下にの字が有つた方が普通の文章としては穩かに聞える。

○大拂 大節季の拂。

長崎の歳暮新年の歳時記から糸商人の話にうつつた。二十年間長崎下りして、少しの拔目もなく一錢の浪費も吝み、それで結局借入れた資本金の利に追はれるだけの者も有り、物見花見女郎狂ひまでして、しかも手代任せに商賣してゐても金のへらぬ者もある。その理由として運と仕合せを說くのはあたり前だが、しかも長崎商ひが少からず投機的性質を持つて居るが故に、特に運が物を言ふ。世間の情勢を察し、來年は値が上ると思つたら、思切つて買置をして置く事だ。豫想が外れたら無一文になる代りに、うまく當つたらそれこそ一攫千金だ。石橋を叩いて渡る式では、算用だけの利は取外さぬかもしれないが、どか儲けなどは思ひもよらぬ。長崎くんだりまで商賣に下つて、大晦日に京へも歸れず橋本で年をとらねばならぬとは全く情無い。かうした見方は確かに商賣上の一の眞理にちがひない。經濟學博士が決して金持でないやうに。

金山・花鳥は當時丸山遊女の中最も名高かつたのであらう。延寶九年刊「長崎土產」によれば、金山は豐後屋五郎兵衞内の太夫で

容顏容儀云ふばかりなく、末世には稀なる者にて、例へていはん方なし、彌生はじめの初櫻の雨を含んで咲出でたるを、かの顏ばせになぞらへ見んには、なほ美はしく匂深き方はおくれてぞあるべき云々

と詞を盡して稱讚してゐる。又早き物の品々、聞てよき物、强き物等の中にも、屢々金山は數へ上げられてゐて、名聲第一であつた事を思はせる。花鳥は同書の傾城名付を見ると、同名の者が數人有つていづれか分らない。しかし同じ豐後屋内にも花鳥の名が見えるから、やはりこの花鳥であらう。とにかく延寶時代までは金山程名高くなかつたも

のと思はれる。西鶴は「永代蔵」巻四心を疊み込む古筆屏風の條にも、花鳥といふ丸山の太夫をかいて居る。こゝの花鳥と同人であらう。

此男つら〳〵世を見合、元こまへに怪我はなけれども、皆人沙汰せらるゝ通り、利を得る事なし。當年は何によらず、我商ひの外なる事に一思案して、銀もうけせずばあるべからずと、心中極めて長崎にくだり、さま〴〵分別せしに、銀でかねもふくる事ばかりにて、只とる樣な事はひとつもなし。とかく來春の小芝居、何ぞ替つたみせものもがな、京大坂の細工人も、手をつくして色々仕出し、何かめづらしからねば、からものにも しも有べしとせんさくして、大かたの物にては錢は取がたしと吟味するに、定まつてよいものは、今まで見せぬ蟠龍の子又火喰鳥など、いまだ見せた事なし。これは長崎にも稀なれば、自由に手に入がたし。ひそかに唐人をかたらひ、何と異國にかはりたるものはないかといへば、鳳凰も雷公も聞たばかりにて見た事なし。とかく伽羅も人蔘も、日本に稀なるものは唐にもすくなし。ことに銀たいせつとおもへばこそ、百千萬里の風波をしのぎ、命を銀と替る商ひにのぼりけるにて、世に銀ほど人のほしきものはないと、合點いたされよとかたりける。これ尤とおもひ、身のかせぎに油斷なく、色々のわたり鳥調へて、都にのぼりしに、みな見せて仕舞し跡なれば、ひとつも錢に成がたく、人の見付たる孔雀はまだもすたらず、漸く本銀取返しぬ。是を思ふにしれた事がよしとぞ

【語釋】 ○こまへ 小前。小規模。こゝの全文の意は「成程手狹に商賣をして居れば、まちがひはないけれども、誰も評して居る通り、それでは大した利益を得る事はむづかしい」。 ○我商の外なる事 自分の專門たる糸商賣の外の事。 ○銀で銀儲る 「金が金を儲ける」ともいふ。資本があつて始めて金も儲かるの意。 ○みせもの 見世物。 ○京大阪の細工人も云々 京阪の細工人も色々手を盡して新案の見世物を出してゐるので、ありふれた物では何が珍しからうか、さても珍しいといふ物はないから、舶來品だつたらもしかすると珍しい物が有るかもしれないと詮索して、なみ大抵の物ぢや錢儲けは出來まいからと吟味すると。 ○蟠龍 本草綱目によれば龍の角の無いのを蟠龍といふと。これは熱帶產の大蛇をいふのであらう。 ○火喰鳥 走禽類の一種。和漢三才圖會、食火鷄の條に「按阿蘭陀人賣二咬噠吧(ジヤガタラ)國火鷄一、彼人呼曰二加豆和留一(カズワル)、肥州長崎或畜レ之、形略類レ雞而大高三四尺、能食二火燼及小石一、其糞乃炭或石也」。 ○わたり鳥 舶載して來た鳥。 ○見付けたる 見顯れた。 ○本銀 鳥を買入れた元金。

大晦日を橋本の旅籠屋に暮すのもあまり自慢の嘉例でもないと、一念發起して商ひの外の一と儲にかゝつて見た。しかし何をしても資本なしでは始まらない。そこで何か珍しい見世物でもと思ひついたが、さてその見世物も蟠龍の子とか火喰鳥などいふ極めて珍貴なものは、やはり高い金を出さなくては手に入りにくい。濡手で粟は出來ぬ事と合點しても、とにかく見世物の思案を實行に移して、舶來の鳥を仕入れて見た。けれども安い金で高く儲けようとは、中々うまく問屋が卸さぬ。もう人がちやんとそれでは儲けてしまつたあとだ。都に上り小屋がけして、「代は見てのお戻り」と囃し立てゝ見ても、「もうそんなものなら一昨年見た」と素通り、やつと見なれた孔雀だけに相應の人入があつて、元金だけは取戻したが、結局これも骨折損の草臥儲け、そして儲からぬは金。

胸算用　大晦日は一日千金　巻五

目錄

一、つまりての夜市
文反古は恥の中々
いにしへに替る人の風俗
二、才覺の軸すだれ
親の目にはかしこし
江戸廻しの油樽
三、平太郎殿
かしきしのお祖母を返せ
一夜にさま〳〵の世の噂

四、長久の江戸棚
きれめの時があきなひ
春の色めく家並の松

一　つまりての夜市

萬事の商なひなふて、世間がつまつたといふは毎年の事なり。たとへば十匁に相場極まりて賣買いたせし物を、九匁八分にうれば、時の間に千貫目が物も買手有。又十匁に買ば即座に貳千貫目がものも賣手有。是をおもふに、大場にすめる商人の心だま各別に廣し。賣も買もみな人々の胸さんようぞかし、世になきものは銀といふは、よき所を見ぬゆへなり。世にあるものは銀なり。其子細は諸國ともに三十年此かた、世界のはんじやう目に見えてしれたり。昔わら葺の所は板びさしと成、月もるといへば不破の關屋も、今はかはら葺に白土の軒も見え、内ぐら庭藏大座敷のふすまにも、砂粉はひかりを嫌ひ、泥引にして墨繪の物ずき、都にかはる所なし。又灘の鹽やきはつげの小ぐしもさゝでこ誦しに、かゝる浦人も今は小袖どのみして、上方にはやるといふ程の事を聞あはせ見おぼえ、千本松のすそ形もふるし、當年の仕出しは夕日笹のもよふとぞと、いまだ京大坂にもはし〳〵はしらずして、中がたのしのぶ小桐の衣裳きるうちに、はやいなかに京ぞめはしやれたり。むか

しもようの肩さきから染込の郭公の二字、又はふどうだなの所々につるはの赤ねの染入おかし見し時は格別ぞかし。

【語釋】 ○なふて　無うて。 ○大場　大場所。大都會。 ○心だま　心。 ○月洩るといへば云々　月が洩るといへば、すぐ引合に出される不破の關屋もの意であらう。新古今「人住まぬ不破の關屋の板廂荒れにし後は只秋の風」によつて、板廂から不破の關屋につゞけたのである。 ○内藏、庭藏　住宅の軒續きに建てた藏、住宅から離れて庭に建てた藏。 ○泥引　金銀の泥(デイ)を塗る事。 ○灘の擂やきは云々　伊勢物語「芦の屋の灘の鹽焼いとまなみ黄楊の小櫛もさゝず來にけり」。 ○小袖どのみ　小袖に物好みする事。 ○裾形　裾模樣。 ○當年の仕出し　今年の新意匠、新形。 ○もよふ　模樣。 ○はしゝ〳〵　端々、場末。 ○中形の忍小桐　葱草や桐の中形模樣。 ○いなか　田舍(ヰナカ)。 ○ぶどうだな　葡萄棚。 ○つるは　蔓葉。 ○おかし見し時は　こゝの文のつゞきはやゝ紛はしいが、「赤れの染入をかし。見し時は云々」といふのであらう。「背模樣の肩先から郭公の二字を染込んだのや、又は葡萄棚の模樣で所々に蔓葉を茜染にしたのなどは面白い。そんな衣裳を着た姿を實際に見ると、また格別見事なものだ」といふ位の意か。或ひは脱文があるのかも知れぬ。

世間がつまつて不景氣だといふ聲は、昔も今も屢々聞く事だが、「世にあるものは銀なり」といふ西鶴の言葉は、所詮動し難い事實をつかんで居る。いくら不景氣でも生活程度は、決してそれに應じて下つて行くものではない。寧ろ年々歳々衣食住に奢侈になつて行くのは、所謂文化社會の趨勢である。生活の簡單化が叫ばれる半面に、社會の複雜相は加速度で加つて行く。そしてそれが即ち文明だともいへる。西鶴をして今九泉の下から起たしめたなら、彼は文藝家としてよりも、社會經濟學者として、より名論卓說を吐くであらうかも知れぬ。

何處に居ても、金銀さへもちければ、自由のならぬといふ事なし。ことさら貧者の大節季、何と分別して濟がたし。ないといふてから、錢が壹文おかぬ棚をまぶりてから出所なし。これを思へば年中始末をすべし。日に壹文づゝ莫若にてのばしければ、壹年に三百六十文、十年に三貫六百なり。此心から算用すれば、茶、燒木、鹽、萬事に何ほどの貧家にても、一年に三十六匁の違ひ有。十年に三百六十目、是に利をもりかけて見るときは、三十年につもれば、八貫目餘の銀高なり。惣してすこしの事とて、不斷常住の事には氣をつけて見るべし。ことにむかしより食酒を呑ものは、びんぼうの花さかりといふ事有。爰に火ふくちからもなき、其日過の釘鍛冶、お火燒に稲荷どのへ進ぜたるお神酒徳利のちいさきに、八文づゝがはした酒、日に三度づゝ買ぬといふ事なく、四十五年此かた呑くらしける。此酒の高毎日小半づゝにして、四十石五斗なり、毎日二十四文の錢、つもり〳〵十二匁錢にして銀に直し、四貫八百六十目なり、此男下戸ならば、是ほどに貧はせまじきものと笑ふ人あれば、此鍛冶我家おさめたる貞つきして世中に下戸のたてたる藏もなしとうたひて、また酒をぞ呑ける。

【語釋】 ○金銀さへもちければ　金銀さへ持ちたらばとあるべき所。 ○ないといふてから「金が無いと云つた所で」の意。 ○おかぬ棚をまぶりてから「置かぬ棚をまぶる」といふ諺。まぶるはまもるに同じく見守ること。勞せずして功を求めることが原義であらう。「心中大鑑」「寶永元年刊」卷二に「おかぬ棚さがす鼠は常に腹を乾とかや」とあるのは原義に近い用法である。轉じて初めから用意してないものを探す、求めても益のないものを求めることを云ふ。「懐硯」卷一「頭を振て鼻うたうたへど、きのふの腹にてけふはさびしく、置ぬ棚をまぶれど、鼠もあれぬ宿のかなしく」。「男色大鑑」卷八「今からも陰子際あらんと思ひやられ、おかぬ棚をまぶり」。 ○出所　でどころ。 ○これを思へば云々　上文を受けて云ふ。「何處に居ても、金銀さへ持つて居るならば、自由

にならぬといふことはない。殊更貧者の大節季は、金銀がなければ、何と分別しても濟ますことは出來ないのだ。……だから、金銀の有難さを思へば、年中始末をせよ。」と云ふ程の意。 ○莨宿 莨宿は本來和名「おほみるくさ」と云ふ毒草であるが、慶長十二年頃煙草が輸入されてから、莨菪をたばこと訓んでゐる。 ○のばす 金銀をふやす、貯へること。 ○燒木 薪。 ○味曾 味噌。 ○三十年につもれば つもるは見積ることをいふ。 ○すこしの事とて「少しの事とても」の意。 ○食酒 食時の時に酒を飲む事。「永代藏」卷三「食酒、莨宿好、心當なしの京のぼり。」 ○火ふく力もなき 貧窮の甚しい喩にいふ諺。「綫留」卷二二 十年前までは提灯の張替して火吹く力もなかりしが。」 ○其日過 一日暮し。其日暮し。 ○釘銀冶 下級の銀冶屋を云ふ。 ○お火 燒前出(八三頁參照)。 ○はした酒 端酒。○小半 四分の一、卽ち二合半。○つもり〳〵 おほよそ。大略。 ○十二匁錢にして銀に直し云々 錢一貫(正味百六十文)が銀十二匁の相場として銀に換算すると、四貫八百六十目になると云ふ意。 ○おさめたる貝つき 我家を治めると云ふのとをさめた貌つき―すました、落ちきはらつた貌つき―と懸けてある。○世中に 世の中に。 ○下戸のたてたる藏もなし 諺。「酒食論」「上戸は酒にまどひつゝ、世ざまわびしと申せども、生れつきたる貧福は、下戸の建てたる藏もなし。」「正月揃」卷五「津の國のほとりに帶木寶翁あり。下戸の建てたる藏もなしとうたひながら、往生うたがひなし。」

「地獄の沙汰も金次第」で、全く黄金の威力は凄じいものだ。然し、無いと云へば、是は又錙一文もないといふ慘めな有樣、金が無くては大晦日も越すに越されない。「これを思へば年中始末をすべし」とはよく云つた。

西鶴はこれ迄に屢〻始末を說き、その心得を示して來たが、此處では細密な數字を擧げて、より現實的に、より効果的に說いて居る。「始末」の二字をはつきりと讀者の胸に烙きつける上には、確かに最も効果的であつたのだ。尤もかうした手法は、既に「永代藏」卷一「浪風靜に神通丸」の條に、北濱の筒落米を掃き集めて、喰ひ餘した壹斗四五升から一年に七石五斗を延ばし、それが基となつて分限になつた老女の說話にも用ひられて居り、又更に溯つては、「長者敎」(寬永四年刊)の鎌田屋長者、那波屋長者の敎訓にも見受けられるのである。今、參考の爲め「長者敎」を引用して見よう。「我(鎌田屋)若年の時、大工宮作り三年す。その弟子に出で、一日に五合の飯米を、半分食うて二合半を保つ。百七十日には四斗二升五合あり。是を一割にして貸す。さて是よりは五合ともに飯にして食ふ。四斗二升五合の米三年の內に一石となれり。此一石よりは三割を加へ、廿年には五百石に餘る。この餘る分、諸事に使ひて彼の五百石に又々利を加へてゆく。千石に餘るなり云々。」「那波屋の曰く、我妻うるさしと雖も、輕く離別する事成り難し。其故は常に世帶を大切に思ひ、朝二合五勺、夕さり二合五勺宛始末して殘す。此米一箇月に一斗五升なり。一割にして三年に四十四石八斗六升に餘る。每年三割にして、廿年には五千石に及ぶなりと。」(猶西鶴の數字に就ては藤村作博士が一々代數を以てその精確なことを立證して居られる。――文藝春秋大正十五年三月號參照――佐古慶三氏の「西鶴詮義」――關西信托時報第六二――「數字の遊戲」風俗研究百十九――と共に併せ讀むと面白い。)

だが西鶴は此處では殆末の必要を强調するのが目的ではなかつた。寧ろ、卑近な所に、どんな貧乏人でも實行し得る始末が轉つてゐる事を注意した。而も、當然始末しなければならない筈の下級生活者が、年中追はれながら猶始末を出來ないで、きり〳〵に遣繰して行く生活を描かうとしたのだ。そこで本章の主人公である其日過の釘銀冶が登場する。そして次に題の「詰りこの夜市」の場面が展開されて來ることに成るのである。

既に其年の大晦日に、あらましに正月の用意をして、ほうらいは餝りながら、酒小半もとむる錢なくて、

ことのたらざる宿さびしく、四十五年此かた一日も酒のまぬ事のなきに、日もこそあれ、元日に酒なくては、年をこしたる甲斐はなしなど、夫婦さま〳〵内談するに、酒手の借ところなく、質種もなく、やう〳〵思案めぐらして過つるあつさをしのぎしのみ笠、いまだ青々としてそこねもやらずありけるを、これ來年の夏までは久しき事なり、たからは身のさしあはせ、これをうりて當座の用にたつるより外なしと、すでに立さかりたる古道具の夜市にまぎれて、世間のやうすを見るに、大かた行所なき借銭屋の良つきぞかし。宿の亭主は賣口錢一割のきほひにかゝつてふり出しける。こよひになつてうるほどのもの、よく〳〵さしつまつて皆あはれなり、十二三なる娘の子の、正月布子と見えて、もえぎ色に染かのこの洲崎、うらはうす紅にして、中綿もおしまず入て、いまだ袖口もくけずして、これを望はないか〳〵とせりければ、六匁三分五リンづゝに落ける。よをや裏ばかりも出來まじ。其次に丹後の細口の鰤を、片身賣に出しける。これもあまらず二匁二分五リンにうれる。其跡から二疊釣の蚊屋出して、八匁より二十三匁五分までせりのぼしけるに、うらずして置ける。是は商ひならぬはづなり。蚊屋大晦日迄質におかず持たる身躰なれば、たのもしき所ありと笑らひける。其のち十枚つぎの蠟地の紙に、御免筆の名印までしるしたるを賣けるに、一分からやう〳〵五分まで、ねだん付ければ、それはいづれもあまりなる事、紙ばかりが三匁が物が御座るといへば、いかにも〳〵何もかゝずにあれば、三匁が紙な。無用の手本書て、五分にも高し。たとへいかなる人の筆にもせよ、是をふんどしといふ手じやといふ。それはいかなる事ぞといへば、今の世に男と生れ、是程かゝぬものはないによつて、これをふんどし手とぞ

笑ひける。

【語釋】 ○ほうらい 蓬萊(前出二二頁參照)。 ○内談 内々相談すること。 ○酒手 酒代。 ○たからは身のさしあはせ 諺。 賣は持合せて居れば、身を救ふに役立つこと。「賣に身の有合せ」とも云ふ。 ○宿の亭主 古道具市の宿の亭主。 ○賣口錢一割 賣買手數料は一割に決つてゐた。「立身大學帳」(元祿十六年刊)巻三「若是を我等が肝煎にてすめたれば兩方から一割宛の口錢百兩の生捕。」 ○きほひ 勢。 はづみ。 ○ふり出しける 値段を付け始める。 下文にも「三文から振り出して十四文に賣て」とある。 ○こよひになつてうるほどのもの云々 大晦日の今宵になつてから賣る程の物だから、碌なものがあらう筈がない。これもよく〳〵差詰つての事で、皆哀れな有樣である。 ○正月布子 正月の晴着。 ○もえぎ色 萌黄色。 ○染かのこの洲崎 洲崎形の模樣に鹿子を染め出したもの。 ○よもや裏ばかりも出來まじ 六匁三分五厘宛ではよもや着物の裏も出來ないだらう。即ち二束三文に賣拂へば、着物裏の價にもならないことを云ふ。 ○丹後の細口の鰤 丹後伊根浦産の鰤は魚肥え脂多く、甚だ美味なることを以て有名であつた。(日本山海名産圖會)細口は少し細い目と云ふ意。 ○片身賣 魚の片身丈賣ること。 ○蠟地の紙 蠟地の紙は筆走りよく、曇のびもよく、書きよいが、修業未熟者には書きにくいと云ふ。(筆道秘傳鈔」元祿五年刊) ○御免筆 御家流(伏見天皇の御子青蓮院尊圓法親王から傳へた書法)の書法を免許されてゐることをいふ。 ○ふんどし手 褌手。手は手蹟のこと。此位の筆蹟なら誰でも書くと云つて戯れたのである。

漸くの事で、曲りなりにも正月は迎へられるが、酒小半を求める餘裕もない。四十五年來、貧乏の花盛りに嗜んで來た端酒、日もあらうに元日に事缺けとは情ない。そこで夫婦思案の末が、今年の夏の編笠――まだ青々としてゐる

のがせめてもの望の綱だが――を夜市に出すことになつた。

あの質屋の大晦日風景（本書巻一「長刀はむかしの鞘」）も物佗びしかつたが、それにも増して物佗びしいのは大晦日の夜市である。「大かた行所なき借錢負の貞つき」、それに對して市宿の亭主のきほひ聲。あまりに對照が著しい。僅かばかりの金の爲に、折角の娘の正月布子も手放さねばならない。しかもそれが「いまだ袖口もくけずして」なのだから、よく〳〵の窮狀が察せられる。丹後鰤の片身賣、二疊釣の蚊屋も皆それ〴〵に哀を催さしめるが、十枚襲ぎの御免筆が僅かに五分とはひどい。「無用の手本書て、五分にも高し。たとへいかなる人の筆にもせよ、是を褌といふ手じや」云々の洒落も、滑稽を通り越して寧ろ悲痛だ。西鶴の筆致は精細を極めて、而もその急所急所を巧みに描き出してゐる。

扨又これはわれもの〳〵と、大事にかけて出しけるは、南京のさしみ皿四十枚、其へだてに入たる京大阪の名ある女郎の文からなり。これはといそがしきによみて見るに、皆十二月の文どもは、いとしかはひのおもひをさつて、近ころ申かね候へどもと、無心の文ばかりなり。戀も無常も銀なくては成がたし。此皿のぬしも定めて大じんといはれて、此ふみひとつが銀一枚づゝにもあたるべし。然れば皿よりは此反古に大分のねうちありとて、おの〳〵大わらひしける。其跡に不動一躰、どつこ、花さら、れい、錫杖、ごまの檀の仕廻もの。さて〳〵此不動も、我身上の富貴は祈られぬ物よと沙汰しける。時にくだんのあみ笠出せば、其座に賣ぬしの居るもかさはず、あはれや〳〵、此笠幾夏かきるためとて、ふるきこかみにて紙ふくろして入て、さても始末なやつがうり物ぞと、二文からふり出して、十四文に賣て、此錢うけとる時、これは此月に三十六文に買て、何々のせいもん、庚申參りに只一度かつぎ其まゝといひけるも、其身の恥のおかし。其夜の仕舞に、歳暮の禮扇の箱二十五、たばこの入し箱ひとつで、二匁七分に買て歸りしに、たばこの箱の下に小判三兩入置しは、思ひもよらぬ仕合也。

【語釋】 ○南京 南京燒。南京地方から舶來した陶器。 ○其へだてに入たる云々 へだては陶器の破損を防ぐため、重ねた中間に入れる紙片布片等を云ふ。こゝの文は「其隔てに入れたるは」のはを補つて解釋しなければならない。 ○かはひ 可愛。 ○戀も無常も 神祇、釋教、無常、凡て銀がなうては駄目だと云ふのである。 ○大じん 大盡。 ○不動 不動明王。護摩を焚く時には、愛染明王や不動明王を本尊として安置する。 ○どつこ 獨鈷。金剛杵の一股から成るもの。 ○花さら 花皿。華籠（華籠）の俗稱。法會の時散華に用ふる金屬製の器具。 ○れい 鈴。金剛鈴を云ふ。密教の修法に用ひる振鈴。 ○錫杖 比丘修驗者等の携へる杖。上端を金屬にて作り、鐶をかけてある。 ○ごまの檀 護摩の壇。 ○仕廻もの 仕舞物。處分品。 ○こがみ小紙か、不詳。一代男七の三「世之介も同じ宿に、ゆき懸るを。太夫みるより小紙についた書て、うらへ廻つて、御座れと申程に。」 ○何々のせいもんせいもんは誓文である。「誓つて虚言は言はぬ」といふ程の意。 ○庚申參り 庚申青面に參詣すること。「日次紀事」正月の條に「此日詣栗田口三猿堂及八坂庚申堂天王寺所〻有爲〻本凡一年中六庚申日始終兩度持參詣多。」とある。庚申の日に參るのである。 ○歳暮の禮扇の箱 歳暮の祝儀に贈る禮扇。多くは役に立たない安扇を入れてある。南京の刺身皿の隔てに入れられた女郎の文殼。不動一體其他護摩壇の仕舞物。誠に神祇・釋教・戀・無常、銀なくて

は成りにくい世の中である。問題の編笠は、三文から羅り始めて、結局十四文に賣れた。持主の未練がましい言草も面白い。然し、最後の煙草箱の下に小判三兩があつて思はぬ仕合をしたと云ふのは、話の本筋には關係のない言葉で、なくもがなの觀を抱かしめる。こゝでも首尾に纏りたく終つてゐる。

三、平太郎殿

古人も世帶佛法と申されし事、今以て其通り也。毎年節分の夜は、門徒寺に定まつて、平太郎殿の事讃談せらるゝなり。聞たびに替らぬ事ながら、殊勝なる義なれば、老若男女ともに參詣多し。一とせ大晦日に節分ありて、掛乞厄はらひ、天秤のひゞき大豆うつ音、まことにくらがりに鬼つなぐとは今宵なるべし、おそろし。さて道場には太鼓おとづれて、佛前に御あかしあげて、參りの同行を見合けるに、初夜の鐘をつくまでに、やう〳〵參詣三人ならではなかりし。亭坊つとめ過て、しばらく世間の事どもをかんがへ、されば今晩一年中のさだめなるゆへ、それ〳〵にいとまなく、參りの業もないと見ゑました。然れども子孫に世を渡し、隙の明たるお祖母たちは、けふとても何の用あるまじ。佛のおむかひ船が來たらば、それにのるまいといふ事はいはれまじ。おろかなる人こゝろ、ふびんやな、あさましやな。さりながら只三人にきかせましてさんだんするも益なし。いかに佛の事にしても、爰が胸算用で御座る。中々灯明の油錢も御座らねば、せつかく口をたゝいても世の耗なり。面々に散錢取返して下向して給はれ。皆世わたりの事共にからまされ、參詣もなき所に各きどく千萬、爰を以信心、如來もいそがしき中に足をはこび給ふを、そんにはせさせ給はぬ也。金の大帳に付おかせられて、未來にて急度算用し給ふなれば、かならず〳〵捨たるとおぼしめすな。佛は慈悲第一、すこしもいつはりは御座らぬ、たのもしうおぼしめせ。

【語釋】 ○平太郎殿 親鸞の弟子眞佛の俗名。常陸那珂郡大部の人。上人東化の時歸して他力本願を奉じた事が親鸞傳繪に見える由、弘長元年六月十五日歿。 ○世帶佛法 世帶佛法腹念佛ともいふ。佛法も念佛も結局は衣食の爲だといふ諺。 ○讃談 說法勸化する事、又語を以て德を稱する事にも云ふ。 ○くらがりに鬼つなぐ 氣味の惡い喩にいふ諺。 ○道場 佛道修行の區界。特に眞宗では寺院の別名に用ひる。 ○同行 眞宗で宗門内の人々をいふ。 ○初夜 午後八時。 ○亭坊 寺のあるじ。住職。 ○つとめ 勤行。 ○何の用あるまじ 「何の用かあるべき」と云ふべき所を「あるまじ」と斷定的に云つて了つたのである。 ○佛のおむかひ船 弘誓の船。阿彌陀の本願弘誓によつて、救はれて生死の海を渡る事を船に譬へて云ふ。 ○さんだん 讃談。 ○耗 耗に同じ。 ○散錢 賽錢。○下向 寺道場に參詣して歸ること。 ○きどく千萬。奇特千萬。殊勝なこと。 ○爰を以信心「爰を以て信心とは云ふなり」を省略して云つたのである。

浮世の哀れは大晦日に極まる。而もその夜が節分に當ると云ふのである。掛乞と厄拂ひ。天秤の響と大豆うつ音。物凄しい中に、一種凄慘な氣が漲つてゐるやうだ。

そこに釀される數々の悲喜劇――それは大晦日の一點に凝集せられた凡ゆる人生の種々相であるが――を西鶴は冷靜に眺めた。そしてそれを最も效果的に表現する爲に、節分の夜の道場を選んだ。道場の參詣を通して、大晦日の息づまるやうな雰圍氣を、間接的に描き出さうと云ふ彼の意圖は、此の一篇に於て完全に成功を收めてゐると思ふ。

世帯佛法腹念佛。「只白化にほうかしまでも品玉とる種の行所をさきへ見せ、辻談議も佛のまねの口をあき、つまる所は喰ねばひだるい〳〵」(「織留」巻一「品玉とる種の松茸」)といふのである。仔細らしい亭坊の讃談も、結局は「いかに佛の事にても爰が胸算用で御座る。中々灯明の油銭も御座らねば、せつかく口をたゝいても世の耗なり」の一言に落着く。淺ましいと云へば淺ましいに違ひない。然しこれが如何ともすべからざる眼前の事實なのである。

時にひとりの祖母泪をこぼし、只今の有かたひ事をうけたまはりまして、扨も〳〵我心底の恥かしう御座ります。今夜の事信心にて参りましたでは御座らぬ。ひとりあるせがれめが、つね〴〵身過に油斷いたしまして借錢に乞たてられまして、節季々々にさま〳〵作り事申てのがれましたが、此節季の身ぬけ何とも分別あたはず、私には道場へまいれ、其跡にて見るぬとなげき出し、近所の衆をたのみ、太鼓かねをたゝきたづね、これにて夜をあかして濟すべし。ふるひ事ながら、大晦日の夜のお祖母を返せは、我等が仕出しと思案して、世のふしようなればとて、あたりの衆におもはぬやつかいかくる事、これ大きなる罪とぞなげきける。

【語釋】 ○借錢に乞たてられまして 借錢乞に乞ひたてられましての意。 ○身ぬけ 辯解。責任のがれ。 ○太鼓かねをたゝきたづね 實際に鉦や太鼓で迷子を探したのである。原本挿畫を參照せられたい。 ○仕出し 工夫。新案。 ○ふしよう 不祥。不運、因果と云ふ意。いかに此の世に住んでゐる因果だからと云つて、近所の人々に思はぬ厄介をかける事は大それた罪だと云ふのである。

年越のうらみのかねや乞ぬらん

内證殘さず語る平太郎

(「三鐵輪」延寶六年刊)

盗人の晝寢にも當がある。大晦日の道場參りも眞底を割れば後生心からではなかつた。實は借錢乞の督促を廻避する爲の苦肉の計であつたのだ。「大晦日にお祖母を返せ」の手段は、「晝夜用心記」「儘偶用心記」等の一節を髣髴させるものがある。然しこれと云ふのも全く金がさせる罪なのだ。西鶴はかうして黄金に翻弄される世の人心の動きを、懺悔の形式を以て表現しようとした。室町時代のお伽草紙「三人法師」に始まる懺悔物語は、嘗ては西鶴によつて好色的懺悔にまで展開し、好色一代女以後浮世草紙の一類を占むるやうになつたが、こゝでも西鶴の息吹きを受けて新しい生命を與へられてゐる。「懐硯」巻四「大盗人入相の鐘」の一篇も、懺悔の形式を以て人の心の動きを現はさうとした一例である。

又一人は生國は伊勢のものなるが、人の縁ほどしれぬものはなし。爰許に親類とてもなきに、大坂且那廻りの太夫どのにやとはれ、荷持をいたせし時、此所の繁昌見まして、何をしたればとて、ふたり三人の口を喰事心やすき所ぞと見たて、幸はひ大和がよひして小間物商ふ人の死跡に、ふたつになる男の子あつて、かゝも色じろにたくましければ、とも過にして世をわたり、行末は其子めにかゝる事をたのもしくおもひ、入聟していまだ4年もたゝぬに、道をしらぬかよい商ひに、すこしの錢もみなになし、極月はじめごろより、何がなと渡世しあんするうちに、女は子を愛して、我も耳があるほどに、人のいふ事をよくきけ。小男でも本のとゝさま

は利發にあつたとおもへ。女の手わざの食までたきて、女房は宵からねさせ置て、我は夜明がたまでわらんじをつくり、われは着ずに女ぼう子どもには正月布子をこしらへ、此黄がらちやのきるものも、其時の名ごりじやぞ。何につけてもなじみほどよきものはなし。もとのとゝさまこひしやと、なけ〳〵といふときは、さりとては入聟口おしく、勘忍ならぬ所なれども、是非なく日をかさね、我ふるさとにすこし借置たる銀子もあれば、これを取あつめて此窮季仕舞と、はる〳〵くだりける甲斐もなく、其ものどもはみな所をされば、又手ぶりにてやう〳〵けふの夕食前に宿へ歸りしに、何とか才覺いたしける、餅もつき薪も買、神のおしきに山ぐさの色めきければ、世はなげくまじ、又引あぐる神も有て、留守のうちに手廻しよく、内證仕舞置けるとうれしく、無事で歸りたるといへば、女房もいつよりは機嫌よくして、先足の湯も取もあへず、鰯腦を片皿に、赤いはしの燒ものにて心よく膳をすへける程に、箸とつて喰かゝる時、伊勢の銀どもは取て御座つたかといふ。不仕合いふを聞もあへず、そなたは手ぶりでようも〳〵戻られた事じや。此米は一斗を二月の晦日切に約束して、われらが身を手形に書入て、九拾五匁の算用にして借ましたよ。世間は四拾目の米喰とき、九十五匁の米を喰事、そなたのどんなるゆへにかゝる仕合。持て御座つたものはふんどし一筋、何もそんのまいらぬ事、夜に入ば闇ふなります。足もとのあかひうちに出て御座れと、喰かゝつた膳をとつて追出す時、近所のもの共あつまりて、これは御亭さまのめいわくながら、入聟のふしやうに出ていなしやるが男の本意じや、又よい所も御座ろと口々に追出しければ、あまりかなしくて泣れもせず、明日は國元に歸る分別いたしましたが、今夜一夜のあかし所なく、我等は法花宗なれ共是へ參りましたと、身のさんげする事哀れにも又おかし。又ひとりの男は大わらひして、我身の事はとかふ申しがたし。宿にいますれば方々よりいけておかぬ身たり。どなたへ申て錢十もんかり所はなし。酒は呑たし身はさむし。色々無分別年を越べき才覺なし。近ごろあさましきおもひつきながら、こよひは道場に平太郎殿の讃談參り群衆すべし。其草履雪踏を盜み取て、酒の代にせんと心がけしに、ここにかぎらずいづかたの道場にも人ぎれなく、ほとけの目をぬく事も成がたしと、身のうへをかたりて泪をこぼしける。

【語釋】 ○太夫どの 伊勢の御師のこと。（前出二九頁參照） ○みなになす すつかり失ふこと。 ○食 飯。○黄がらちや 黄枯茶。淡い藍色を帶びた黄色。 ○手ぶり 從手空拳。手ぶら。 ○山ぐさ 齋朶の異名。 ○引あぐる神「捨つる神あれば引上ぐる神あり」といふ諺。 ○赤いはしの燒物 赤鰯の燒者は節分の祝儀である。 ○不仕合 不運。不幸。 ○どん 鈍。利發でないこと。 ○足もとのあかひうち。諺にかけて云ったのである。 ○御亭様 亭主のこと。○色々分別云々 色々無分別を企て見たが年を越すべき才覺もないと云ふ意。 ○ほとけの目をぬく 佛を欺く事。

色白で逞しい女房と共稼ぎで、行く行くは前夫の子供にかゝらうと云ふ入聟の量見も量見だが、死んだ前夫の思出に虫のよい事ばかり並べたてる女房もちと我儘すぎる。金があるうちはお互に慎みもするが、いざ落目となると我儘が募る、不平が出る。掌を反すやうな女房の仕打は諸般の消息を描き出して餘す所がない。「此米は一斗を二月の晦日切に約束して……九十五匁の算用にして借りましたよ。世間は四十目の米喰ふ時、九十五匁の米を喰ふ事、そなたの鈍なる故にかゝる仕合せ」とある。四十目の米と云へば大體一石の相場であるから、一斗九十五匁では話にならぬ

ぬ價である。かうして見す〳〵の損を知り乍ら剩へ手形まで入れて買ひ整へた米も當てがあつての事である。俄然伊勢の貨金はものにならなかつた。樺一本の入聟は苦もなく追出された。道場參りの三人の中の一人はかうした男であつたのだ。「今夜一夜の明かし所なく、我等は法華宗なれども是へ參りました」と云ふ最後の一句が、哀れにも又苦笑を催さしめる。

今一人の男は全くのならず者である。最初は大笑ひしつゝ、少し不遜な態度で語り出したが、身の上を語るうちに我ながら淺ましくなつて泣けて來る。讃談參りの履物を盜んで酒代にしよう等は大それた事だ。三人三樣に金に繰られた人間の弱さが感じられる。

亭坊も横手をうつて、さても〳〵身の貧からは、さま〳〵の惡心もおこるものぞかし。各もみな佛體なれども、是非もなきうき世ぞと、つら〳〵人界を觀じ給ふうちに、女けはしくはしり來て、姫御さま只今安々と御平產あそばしました。御しらせ申しますといふ。程なく其跡より、箱屋の九藏、今のさきに掛こひと云分いたされまして、首しめて死れまして御座る。夜半過に葬禮いたします。御くろうながら野墓へ御出たのみます、といふて來る。取まぜてかしましき中に、仕たてもの屋より、縫に下されました白小袖を、ちよろりと盜まれました。せんさくいたしまして出ませずば、銀子たてまして、御そんはかけますまいとことはり申に來る。東隣から、御無心なれども、今晩俄かに井戸がつぶれました。正月五ヶ日水がもらいたい、と申きたる。其跡から一旦那のひとり子、金銀をつかひすごし、首尾さんさんにて所を立のくを、母親の才覺にて、御坊さまへ、正月四日まで預けにつかはしける。是もいやとはいはれず、うき世に住から、師走坊主も隙のない事ぞかし。

〔語釋〕 ○各もみな佛體 人間は佛性を享けてゐると云ふ。 ○人界 人間世界。佛語。 ○けはしく あわたゞしく。烈しく。 ○云分 口論。 ○野墓 三昧。燒場。 ○銀子立てる 銀子で賠償すること。 ○一旦那 信徒中第一の主要な人。 ○師走坊主 前出(二〇頁參照)

「さても〳〵身の貧からは、樣々惡心も起るものぞかし。」これは亭坊の言葉であるが、同時に西鶴自身の言葉でもある。前にも屢々述べたやうに、晩年の西鶴は專ら世の人心を描かうとした。それも自笑基磧のやうな皮相な叙述に止まりはしなかつた。所詮人の心は善惡二つの容れ物である。だが然し、それを左右するものは何であらう。彼の人生に對する深い同情と烈しい熱意とはその背後に存する黄金の魔力を發見した。而して如何に黄金の魔力が暴威を振ふかその有樣を眺めて行つた。人間の信仰も、道德も、愛想も、凡ては貨幣價値に換算して評價せられるのである。彼はさうした人生の事實を胸算用一部の中に表現した。その中でも、此の平太郎殿の一篇は最もすぐれたもの〻一つである。最後の一節はあわたゞしい大晦日風景を一段と髣髴せしむる上に、又全體の諦括りに、情彩を放つてゐると思ふ。

——終り——

昭和十年二月十五日印刷
昭和十年二月二十日發行

國文學大講座 第二〇
西鶴五人女評釋
定價二圓五十錢

西鶴五人女評釋

編輯兼發行者 國文學大講座刊行會
代表者 吉川與志次
印刷者 吉川與志次
東京市神田區小川町三丁目二四

◇發行所
東京市神田區小川町三丁目二四
日本文學社

國文學大講座 各專門大家執筆

◉ 本書は嘗て本會に於て出版して嘖々の好評を博し本書のみによつて文檢に合格した篤學の士數百、引續き本會は續國文學講座江戸文學講座を出版しましたが國文學大講座は三書の內特に文檢受驗者必須なるものを選擇統一したものである。

◇國文學史	文學博士 藤井乙男著	菊判 三〇〇頁	送料 二錢	價 二圓五十錢
◇國語學史（併概說）	文學博士 吉澤義則著	菊判 四〇〇頁	送料 二錢	價 二圓八十錢
◇古事記選釋	三高教授 阪倉篤太郎著	菊判 三八六頁	送料 二錢	價 二圓八十錢
◇萬葉集選釋	京大助教授 澤瀉久孝著	菊判 二八八頁	送料 二錢	價 二圓五十錢
◇源氏物語講義	奈良女高教授 岩城準太郎著	菊判 四〇二頁	送料 二錢	價 二圓八十錢
◇枕草子選釋	三高教授 島田退藏著	菊判 四五〇頁	送料 二錢	價 二圓八十錢
◇平家物語講義	東京女高師教授 石川佐久太郎著	菊判 二一二頁	送料 二錢	價 二圓八十錢
◇古今和歌集選釋	文學博士 尾上八郎著	菊判 二一二頁	送料 二錢	價 二圓八十錢

國文學大講座 各專門大家執筆

◇文法及口語法	奈良女高師教授 木枝增一著	菊判 六五六頁	送料 三錢	價 四圓十二錢
◇言語學概論	文學博士 新村出著	菊判 三一八頁	送料 二錢	價 二圓八十錢
◇謠曲講義	東京文理大教授 能勢朝次著	菊判 三三六頁	送料 二錢	價 二圓五十錢
◇有職故實	風俗研究所長 江馬務著	菊判 三五六頁	送料 二錢	價 二圓八十錢
◇俳句選釋	京大助教授 穎原退藏著	菊判 二三二頁	送料 二錢	價 二圓五十錢
◇新古今和歌集講義	女子學習院教授 佐成謙太郎著	菊判 二一六頁	送料 二錢	價 二圓八十錢
◇王朝文學概論	文學博士 吉澤義則著	菊判 二一二頁	送料 二錢	價 二圓八十錢
◇國文學問題詳解	京都女專教授 田中健三著	菊判 三五八頁	送料 二錢	價 二圓五十錢
◇近世和歌史	東京文理大教授 能勢朝次著	菊判 三四二頁	送料 二錢	價 二圓五十錢

エ7-178

國文學大講座 各專門大家執筆

◇江戸文學概說	文學博士 藤井乙男 著	菊判 二二八頁	送料 二十二錢
◇更科、泉式部、紫式部日記講義	宮田和一郎 著	菊判 四六八五頁	送料 二十二錢
◇西鶴五人女評釋	鈴木敏也 著	菊判 三八四五二頁	送料 二十二錢
◇大鏡增鏡類選釋	金子彦二郎 荒堀邦雄 瀬江秀介 著	菊判 五六四二八頁	送料 二十二錢
◇保元物語大平記選釋	清水齋 藤原亮一 清藤泰衛 著	菊判 三二四五八頁	送料 二十二錢
◇徒然草講義 十訓抄講義	女高師教授 木枝增一 著	菊判 二九四二〇頁	送料 二十二錢
◇江戸時代風俗史	風俗研究所長 江馬務 著	菊判 二六四八二頁	送料 二十二錢